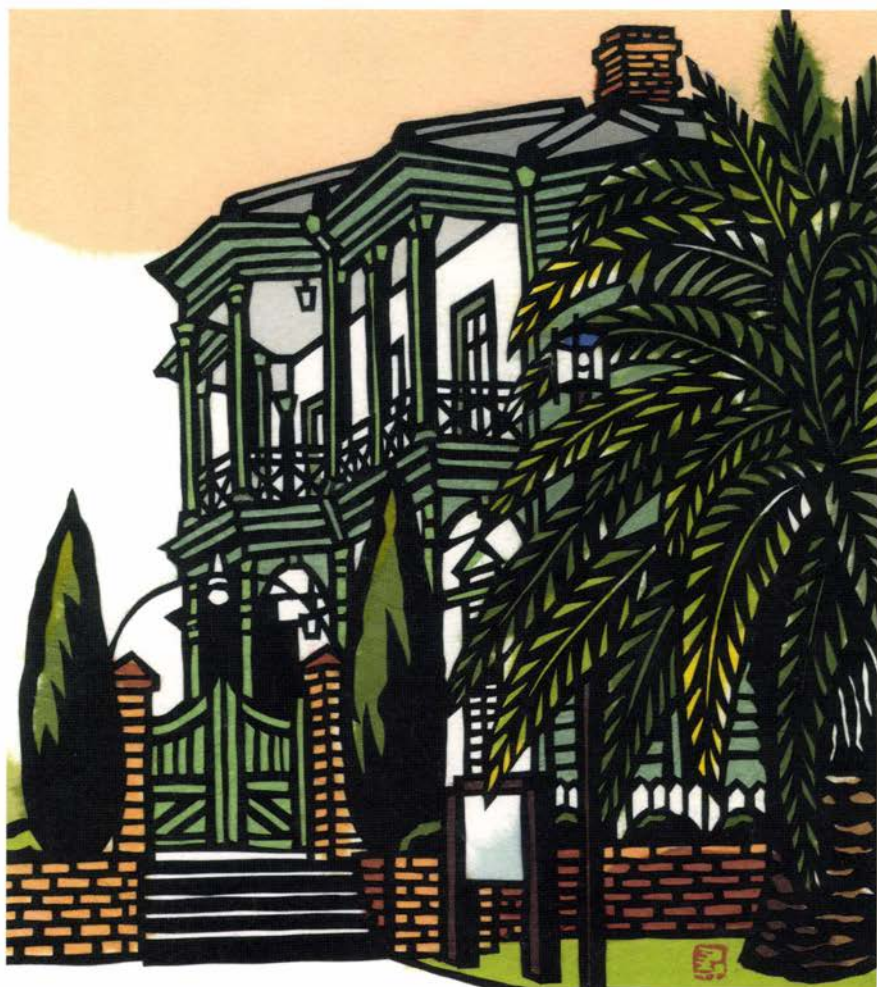


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
平成二十四年四月一日発行(毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通卷一〇一九号



日川協加盟

No. 1019

四月号

# 第18回 川柳塔まつり

と き 平成24年10月8日(月・祝)

午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06-6772-1441

(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

## 《 同人総会・議事 》

平成23年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成24年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

## 《 各賞表彰式・記念句会 》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「川柳に表れた死生観」 川柳塔社 新家完司 副主幹

兼 題 「絆」 愛媛 黒田茂代 選

「語る」 鳥取 牧野芳光 選

「予定」 北海道 小沢 淳 選

「偉い」 兵庫 山口光久 選

「イメージ」 大阪 鶴田遠野 選

事前投句 「美」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭 幸 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正 午(午後4時半終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会 費 2,000円(当日いただきます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

## 《 懇 親 宴 》

と き 平成24年10月8日(月・祝) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウィーナ大阪 3F 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込 120名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

\*事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(御希望の方は事務所)にて9月1日(土)までに本社事務所宛、お送り下さい。

\*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺大道1丁目14番17号201

〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490

振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

## 節目の大会

小島 蘭 幸

「蘭幸君、節目の大会にはなるべく出席するように」これは、ある大会の帰りにホテルから駅まで車でお送りした時、橋高薫風先生から直接いただいた言葉です。

節目の大会といえば、平成22年10月に開催した、川柳雑誌・川柳塔通巻一〇〇〇号記念川柳大会が記憶に新しいところです。「路郎と薫風―牽引車の火と継承者の灯」と題しておはなされた木津川計先生の迫力ある言葉の一つ一つが今も尚、私の脳裡に鮮明に焼き付いています。出席者の皆様に記念品としてお渡しする事が出来た『麻生路郎読本』と『河内天笑川柳句集』。川柳塔社同人・誌友の皆さんが正に一つとなった素晴らしい記念大会でした。あの情熱は通巻一〇一九号を迎えた今も脈々と続いているのです。

川柳塔社が主催した過去の記念大会を振り返ってみますと、各場面が次々と走馬灯のように浮かんで

きます。課題「母」の披露をされた時実新子先生、川柳塔創刊から表紙絵を描いて下さった直原玉青先生の南画の実演、作家田辺聖子先生のお祝いのごことば、寺尾俊平先生のおはなし等々、今更ながら出席して良かったと思うこの頃です。そして「川柳塔創刊七十五周年記念川柳大会一九九・三・二〇」のタイトルの付いたカセットテープを、時々聞いてはしんみりとする私なのです。

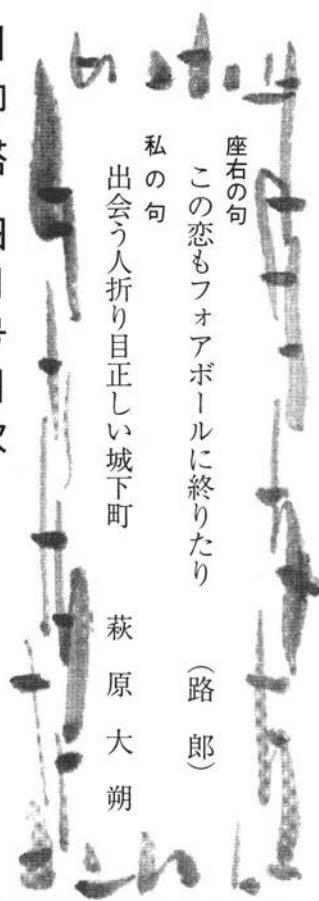
大きな節目の大会・九十周年記念大会は、もう二年後に迫って参りました。同人・誌友の皆さん、また、友好吟社の皆さまに今から予定に入れておいて欲しいと、切にお願い申し上げます。

私は二泊の予定で計画を立てようと、貯金箱を一つ買いました。九十五周年、一〇〇周年も視野に入れて……。

ここまで書いて先日、開催した第一回川柳塔社各地代表者・役員拡大会議の中での熱いことばを思い出しています。

「川柳塔の同人は一本の柱なのです!!」

みなさんと力を合わせて、川柳塔の柱をもっと大きく、もっと太くしたいものです。



座右の句

この恋もフォアボールに終りたり

(路郎)

私の句

出会う人折り目正しい城下町

萩原大朔

## 川柳塔 四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「神戸・旧ハッサム住宅」

### ■巻頭言 節目の大会

中国人研修生のこと

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌<sup>(88)</sup>

新川柳鑑賞<sup>(2)</sup>

自選集

温故知新

水煙抄

中島生々庵句抄

誹風柳多留一一篇研究 80

愛染帖

檸檬抄「人柄」

英語 de Senryu<sup>(4)</sup>

小島蘭幸 (1)

森山盛桜 (2)

小島蘭幸選 (4)

木津川 計 (48)

麻生路郎 (49)

温故知新 (50)

水煙抄 (53)

川上大輪選 (54)

中島生々庵句抄 (75)

誹風柳多留一一篇研究 (76)

愛染帖 (78)

檸檬抄「人柄」 (82)

英語 de Senryu (85)

富士慕情・池 森子共選

吉村侑久代

新家完司選

池 森子共選

吉村侑久代

## 中国人研修生のこと

森山盛桜

四十年勤めた会社を辞めてから一年半経ったが、終りの十年間くらいを中国人研修生に拘つてきた。会社から受け入れの話を聞いた時は、正直戸惑った。対応の仕方が解らないし、中国語も知らない。中国人のイメージも浮かばなかった。受け入れ地は最初は上海、後に煙台からでこれは今も続いている。煙台は山東半島の先端近くの都市で、NHKドラマ「坂の上の雲」にも一瞬出て来た。

研修制度の目的は「日本の高度な技術を習得して自国に持ち帰り、国の発展に寄与する」という崇高なものであるが、日本の資金にも魅力があるようだ。労働基準法が適用になるので、最低賃金は割れない。当時、地方では日本の日給が、中国の月給と余り変わらないと言われていた。

既婚女性もたくさん応募して来る。当然夫と子供を残して来日する訳だが、日本では考えられないパターンだ。日本人の



一路集「伺う」

吉岡 修選 …… (86)

「設計」

坂本蜂朗選 …… (86)

「まさか」

田中みね選 …… (87)

初歩教室「掴む」

鈴木公弘 …… (88)

秀句鑑賞「水煙抄」

早川 遡行 …… (90)

「水煙抄」

川崎ひかり …… (92)

「せんりゅう飛行船」

新家完司 …… (93)

「麻生路郎読本」余滴

乗原道夫 …… (94)

「本所深川を歩く」

松永浩一 …… (98)

「エッセー」川柳はじめ物語

森本弘風 …… (99)

第5回オニザキ「ごま川柳」入選句発表

三月本社句会 …… (100)

各地柳壇（佳句地十選／宮尾みのり）

各地柳壇 …… (102)

四月各地句会案内

各地柳壇 …… (106)

柳界展望

各地柳壇 …… (120)

■編集後記（ひとこと／水野黒兎）

朱夏・いさお …… (122)

座右の句

こたわれば豆腐にだって芯がある

（楓 楽）

私の句

何らかの役に立つからある命

大隅 克博

雇用がおほつかない中、わざわざ外国人を入れるという事については、一時取沙汰されたが、しかし彼等はよく働く。手も早い。残業も喜んでする。鳥取県の有効求人倍率はずっと60%台で推移してきたが、研修生を入れる理由はこの辺りにも有ると思う。

外交的には、すんなりと行かない国ではあるが、個々はそのようでは無い。彼等は総じて親しい、家族思いである。私も何度か煙台に行つて採用試験をやり、家庭訪問もした。暮らし向きは昭和三十年代の日本というところであろうが、家族の繋がりは強いものだと感じた。日本では薄れつつあることだ。も一つ感じたのは生きる遅しさで、これは真似が出来ない。優しさと遅しさが際立っている。

退職してから一年半も経つので、中国の送り出し機関とは最早縁も切れたと思つていたら、今年の元旦に合わせて中国式年賀状が届いた。向こうは旧正月を祝うので、ころ合いを見て日本の年賀状を送った。

じつくりと付き合えば、素敵な国民だと思ふ。



小島蘭幸選

鳥取市 倉益一瑠

リハーサルしようか花道の台詞

白無垢の裾に隠していた尻尾

三度目の涙は武器にならないんだ

初対面絆つける癖がある

雲掴む話の好きな鬼瓦

正体を見てから好きになりました

堺市 志田千代

鉛筆の六角形ははずせない

トーストが焦げるやさしさ足りぬ朝

母さんのやさしさ苦労性となり

夜更しも朝寝もさせてもらってる

父さんのおとぼけは真にうけてやる

悪口が出ないよう飴なめている

三田市 田中章子

キッチンに立てる間は寿司を巻く

足踏みをすれば周りが見えてくる

ゴミの日は背広姿のパパばかり

出口から迷路をたどる癖がある

ばあちゃんの口でまああるくなることも

気晴らしに読むミステリー積んでいる

ひび割れたところへ春の時刻表  
和歌山市 木本朱夏

風花や つなぐ手の無きさみしさに

咳込んでいよいよ春を遠くする

爪ばかり伸びるいくじのない月日

春を待つ雨花柄の傘をさす

気紛れな天使がくれたのは林檎

撥って春だ春だと風が吹く

一日の自由お昼はメロンパン  
和歌山市 牛尾緑良

大臣の首が綿毛のように飛ぶ

人生の節目にひとつ赤いバラ

昭和まだ記憶の中で輝かす

さよならと言った受話器が手放せぬ

弘前市 今 愁 女

万物を白紙に戻す雪景色

雪景色二羽のカラスが居るばかり

青い目のおんな流鏑馬和の武芸

白鵬が豆を撒いてる鬼は外

北方領土記念日だけで終るのか

復興元年立てよ三陸三・一一

阪南市 森 村 美 花

全開の窓を覗いている夕陽

枯れ葉踏む足が優しくなっていく

斜めからやさしい風が満ちてくる

居るだけで苛つくこともあり夫婦

新しい心で老いを迎えます

たっぷりの優しさ赤ちゃんからもらう

大阪市 井 丸 昌 紀

本当は損をしているうるう年

もう一度誘ってくれると思つてた

ありがたい空気吸うのはまだ無料

鍵穴の向こうもじつと覗いてた

餅つきの音が聞こえるいい街だ

厄介にチャンスとルビを振つておく

枚方市 海老池 洋

売店へ暇をつぶしにいく術後

目の保養たまに立ち寄る百貨店

居酒屋の酒に鎧を脱がされる

画竜点睛そんな総理をまつ日本

ビル林立酸素の薄くなる都会

はんなりと心も春に衣替え

鳥取市 森 山 盛 桜

引き波に最早ポリシーなどは無い

栓を抜くだけ栓抜き使命感

良心の斜めうしろに棘がある

遮断機の向こうは敵に見える顔

幕間のあいだにパワー蓄える

見る夢はいつも辻褃合つてない

弘前市 福 士 慕 情

死に場所は故郷と決めた鮭の貌

着地するまでは浮かれています落葉

晩学の汗が仲間恵まれる

病院の梯子で命つないでる

不器用なちちの轍を補修する

妻の手に無い轍がぼくにある

弘前市 高 瀬 霜 石

母の愚痴お経のように聞いている

ドンマイドンマイ今日も自分に言い聞かす

自然体なんて気軽に言うけれど

健さんに憧れてきた土踏まず

泣くんじゃない番号のないユニフォーム

否定語に封印をして世を渡る

堺市 桑原道夫

朝市へ日本のことば買いにゆく  
旧街道沿いの民家の裏の壁  
洗濯機の音は幸せそのもので  
生活のため星空を見ることも  
靴を手につけて渚で待っています  
肩抱いて二月のひとを連れ戻す

出雲市 竹治 ちかし

こだわった訛に慣れて地に染まる  
足が地に着かないままに旗を振る  
リセツトをするとは都合良い話  
理由あつて遠い他人になりました  
手を合やす神の言葉が聞きたくて  
政治家の死に政治家の人が寄る

堺市 柿花和夫

愛犬を亡くしてからは冬籠り  
恩師逝きわが青春の幕を引く  
椿落つ失うものの無き如く  
平穏な海よ戻れと虎落笛  
高鳴りを鎮める胸のシユレッダー  
面倒なことに夫は下戸ですの

堺市 山本半錢

チワワ抱いて頼りにしてのお留守番  
情報に溺れ良識錆びてくる  
ものの好きで貴方の女房してました

老人力そんなの実のないお世辞  
磨き過ぎて古傷熱をもつてくる  
手作りの雛を飾って春を呼ぶ

吹田市 太田 昭

打たれ強くなつて人間面白い  
広辞苑のボクの余生が消えている  
老人の街日没が早くなり  
一匹になつて男は橋わたる  
頂上につくと人間翔びたがる  
私を売りに出します買いますか

米子市 竹村 紀の治

懷にボツと灯りが点く年金日  
身内には今年は喜寿と言ひ触らし  
孤独死がチラリ横切る風邪の夜  
減塩に慣れた男に切れが無い  
七輪で焼いて欲しいと言う秋刀魚  
おめでとうメガネ屋からのカード来る

豊中市 江見 見清

お互いに行き先言うて出る散歩  
初バイト機械油の匂いの子  
歳とつてからは歩幅のあう夫婦  
飲み会に自宅の地図を持たされる  
足許の影は見えてる酔うてない  
同梱の手紙で味を知る土産

倉吉市 牧野芳光

先生と呼べばたいて丸く済む  
面白いことは辞書には書いてない  
すぐ行くと底を見られる年金日

枕辺の遠くで回る水車

頭の中に女を置いて詰め将棋  
思ひ出を遊ばせている魚釣り

藤井寺市 増井ヨシ枝

地を染めてなおも人恋う紅椿

カモシカの足も杖つく古希の坂

あちこちが歪みながらも生きている

いい香り水仙ほめて二三本

酷寒の闇を破って猫の恋

五ページも読めば眠剤いりません

吹田市 山本希久子

句集編む背を押す風にうながされ

花の章でしめくりたい余生

高々と孫に白旗あげている

昭和を生きた背骨が冬を抜け出せぬ

傘寿喜寿夫婦の歩幅揃い出す

ただいまにお帰り森はこだまする

鳥取市 永原昌鼓

情報を掴むアンテナ錆びて来た

私の弱点知っている枕

私が生きた証の孫ふたり

神経痛つれて傘寿の坂登る  
ボランティア始めた孫が頼もしい  
禁煙で味覚嗅覚よく動く

松山市 宮尾みのり

いい人にされると思考鈍りだす  
時計の針だけが正確祖母の部屋

スーパの冷めぬ距離を保って深入らず

根っこ切れこの地で生きる他はない

四面楚歌しばし冬眠するつもり

去るものは疎し忌明けの折を食べ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

春告げる音を集めた貯金箱

まだ少し未練あるのか鍵かっこ

口紅を変えてアルゼンチンタンゴ

今日何度笑ったかしら化粧とる

便箋の余白終ったなと思う

とりあえず眉の太さを褒めておく

竹原市 岩本笑子

イヤリング病院へ行くバスである

寒餅の祈りにも似た柔らかさ

種撒いて春の予約をしています

六十路坂時々鏡見るように

ホップステップジャンプ春が来たんだな

背を押してくれる風には亡父がいる



堺市 大久保 のん子

たわわなる南天の実の誇らしげ  
哀しみはいのちの底に沈ませて  
老木にだって芽も吹く花も咲く  
怖い世だなにがおこるかわからない  
片思いそれもまたよしロゼワイン  
雑音に惑わず確と生きていく

鳥取市 土橋 はるお

和服着た女が想定外だった  
別嬪さんと同じ飯を食ったのに  
玉露のむ度に茶碗に味が染む  
しまい風呂明日始めることが浮いて来る  
一点の汚れも見えぬシャボン玉  
教室の隅にピンクのバラ活ける

唐津市 坂本 蜂朗

全開の経験もなく老いた悔い  
申し開きする度に背が低くなる  
アンケート用紙が少し背伸びする  
むつかしい仕事を酒が引き受ける  
妻のべからずが聞こえる一人旅  
個性的との評に皆頷いた

唐津市 井上 勝 規

いい頃に曾孫の声が弾け出る  
寝たきりもまだまだ俺は逝けないナ  
お陽様と棚田勝負の爺も居る

さりげなく輝く老妻は紅生姜  
太陽と年金だけは忘れない  
年金に感謝する日もあと僅か

高知市 小川 てるみ

インフルで一週間を死んだ振り  
憑物がすっと落ちた寒の水  
海の青空の青さに嘘はない  
心機一転部屋いっぱいシクラメン  
どこで住もうと運否天賦の地震国  
たればの話寂しい酒になる

三田市 堀 正和

だんだんとこども目線になる後期  
一筆箋くらいが丁度いい話  
ユーモアが通じぬ酒で酔えません  
まあまあ仲裁役がキレている  
遍路道微罪がたんと落ちている  
開幕へみんな強気のメッセージ

橿原市 安土 理恵

友だち一人離れていつてそのまんま  
足あとも指紋も消して居なくなる  
血のにじむ別れもあつて二月尽  
もういいかひと月待てば春になる  
オムライスやつぱり泣けてくる黄色  
しばらくは童になつてゐる 老いる

高槻市 富田美義

前向きの姿勢で老いと対峙する  
ご先祖の教える道が枯れてきた  
三世代ボチも絆の役があり  
ひと時の絆が欲しく酒を注ぐ  
傷ついて段々太くなる絆  
書くことで自分の明日と対峙する

三田市 石原歳子

病院のバスを待つてる吹き曝し  
子宝に恵まれ今は孫五人  
いろいろと亡母に聞きたいことがある  
病む夫家族の絆強くする  
年賀状の絶えたやさしい友思う  
診察券増えて私も高齢者

大阪市 神夏磯典子

家族揃う部屋が一番暖かい  
サッカーに野球祖母にも春が来た  
しっかりと腰伸ばしなさいとチュウリップ  
携帯を玩具のように持たされる  
奥の手を出さずに済んで物足りぬ  
欲全部捨てたら軽く歩けそう

大阪市 古今堂蕉子

輪の中で一人騒いでいる自分  
先輩が謙虚私の身の置き場  
ときめかぬ物を捨てろに夫見る

ブランデー舐めて寝るのが私流  
手の内を見せずに根掘り葉掘り聞く  
忘れたい事って忘れられるらし

神戸市 山口光久

手入れた庭木律義に恩返し  
高いたかい笑う赤ちゃん夢無限  
一番手風の音にも耳を立て  
べったりと私色になった夫  
八方を丸くおさめる深い皺  
長幼のけじめいつしか薄らいで

河内長野市 山岡富美子

牡丹雪ひらひら春のプレリユード  
チョコレート撒いて大人のおままごと  
文明の利器は武器にも凶器にも  
ふかふかのお芋を屁理屈の前へ  
拝啓も草々もない手紙書く  
志すものありアンチエイジング

海南市 堂上泰女

切磋琢磨しなけりや今日を生き抜けぬ  
諺はほんに生きてるなあ今も  
少子化を進めてたのも国だった  
政情不安少しでも金ためておく  
はっきりと生きる情の人へ添い  
ポイントをつけられ燥いでるカード

和歌山市 福井 菜摘

思い出は振り向くたびに甘くなる

小吉は昇り運だと夢を抱く

私の鮮度を保つ好奇心

末席で地団駄ふんでいる格差

妥協案握りこぶしの中にある

マンネリの絵をぬけ明日にベダル踏む

さいたま市 星野 育子

普通に歌つてた君が代斉唱

あの世へは牛歩と決めて日向ぼこ

町内会はみんな年金暮し

お金は貯めても時間は貯めれない

ギリギリに来てトイレ行きまた待たす

決断を子に急かされる終の住処

寝屋川市 森 茜

寒そうに神さま売りにきた婦人

ベランダにわが家に足りぬ青菜吹く

お釣り錢ぼとりとばかりの義捐箱

ひとりひとり花物語もつ少女

お仏壇光射しこみ金色堂

喝采はもう望まない日向ぼこ

府中市 馬場 利子

四月馬鹿と言われはつとする噂

白紙に戻せぬ時計にせかされる

自然との対話が旨いシャボン玉

風に乗り迷い疲れた花の種

手のひらに桜一ひら舞い上手

れんげ田で遊ぶ子等たち蝶になる

愛知県 早川 遡行

飲み放題元の取れない歳になり

一年に何日あった休肝日

オクターブ上げて出かける特売日

恥ずかしいことでも医者になら言える

土作りからの花芽は裏切らぬ

盆梅の幹の枯渇を愛すなり

京都市 藤井 文代

断層に囲まれつつも高枕

まかり通る無礼飲み込む白湯の味

札節よりお笑い学ぶ処世術

針の筵座り学んだ人の道

起き抜けの冴えた空気も皿に盛る

年金船沈むまでには逝つてたい

香芝市 大内 朝子

日日生きる命の華に水をやる

老いの殻すっぱり脱いで春をとぶ

ストレスを濾過してくれる春の空

菜の花の匂いに偲ぶお母さん

絵手紙へ戻って来いと里の春

いのちキラキラ人生の一度切り

羽曳野市 安芸田 泰子

約束が重たくなった細雪

一日のゆとりを貰う閏年

老いた身へ号令かけて朝始動

花一輪一輪づつの春の詩

残り火を閉じこめているコンパクト

甘い夢ころがしている春の午後

東京都 岸 野 あやめ

趣味ひとつ胸の谷間で玉となる

老年のしあわせこそが真実だ

声の出ぬ母の眼が言う有難う

無器用で頼まれた嘘すぐ剥げた

象の耳内緒話へ蓋をする

また次もあるから今は負けておく

大阪市 川 端 一 歩

よく見ればお地藏さんは稚児の顔

信念という友だちと同じ歳

だんだんと闇が消えゆく朝が好き

亡母は盲目献体は目だけする

わが家にはぜいたくという辞書はない

赤飯も鯛も忘れて誕生日

米子市 高 田 振 作

クラス会集合場所は無人駅

片想いの彼女も来てるクラス会

クラス会に蟹など出すな喋れない

クラス会先生よりも老けて見え

先生のあだ名で笑うクラス会

クラス会名前が出ない手を握り

東大阪市 北 村 賢 子

春めいた空へこころもジャンプする

想い出の数だけ増える服がある

空っぽのハートを埋める思いやり

避難訓練二度と本番来ぬように

めぐり来る春へ弾けている蕾

余生まだ夢は捨てない春は来る

大洲市 中 居 善 信

ルビ無けりやこの子の名前よう読まん

最初から僕には尻尾生えてない

池上彰の経済論は理解でき

トップとはこんなもんだねなあやらせ

マルクスもケインズも読み評論家

七十五こんな田舎の片隅で

鳥取市 吉 田 孔 美 子

手釣舟イルカ囃して去って行く

タッタタラリあなたのためのポリシーよ

ポリシーに着せた頑固と言うマント

お雑煮の自慢社宅もなつかしい

指導書に餅は一ヶと赤印

母は知る母にならない娘の疼き

唐津市 樋口輝夫

不細工な世渡りしてる傘寿坂

日向はこじつと見つめる白い雲

小母ちゃんと呼ばれ怒った宿の女

祝日に揚がらぬ国旗式もなし

朝ドラを泣いて笑って老い二人

唐津市 山口高明

ご正宮二礼二拍手一礼で

一コマの漫画で世相ぶった切り

橋の上別れ話はやめにする

日曜を清掃奉仕婦人会

諍いの妻が不貞寝の日曜日

熊本県 高野宵草

堂々と笑い飛ばした物忘れ

欠点を理解で越えて共白髪

期待感袱紗を開く手が奇麗

背伸びして素養不足の句が出来た

助けられた医師の薬で四十年

熊本県 岩切康子

目的の歩数に遠い怠け日日

外食と決めて夫婦で出迎える

食代と気易く手伝いするお客

気遣って布団カバーを剥いで去り

水道水結 受診・買物・温泉へ

札幌市 小沢淳

羨ましい生涯だったとは弔辞

雲を得るまでの男の臥龍の眼

月夜の蟹これに似て来たわが頭脳

柩には辞典一冊あればよい

押し黙るこの玄冬に耐えている

札幌市 三浦強一

冬越せただろうか路上生活者

学力は問わぬが実力は問われ

ペーパーナイフ分相応を心得る

不退転男の口の一文字

草食系男に出来ぬ仁王立ち

砂川市 大橋政良

鳩時計お前も歌うのどを持つ

その影が嫌なわらいを置いてゆく

結び目の固さほどけること知らず

山菜の煮しめに母の色が出る

風の絵にどっぷり浸かる四季がある

弘前市 須郷井蛙

笑う友あつて鬱など寄せ付けず

法案は後に解散ばかり好き

今の子は南極並の防寒具

飛びついた無料に怖い紐がつき

孫ばなし嫌って行かぬクラス会

父の忌や春まだ遠き二月尽

弘前市 岡本花匠

父短編母は長編世に遺す

青森県 松山芳生

芽ぶく木々愛の福運分けくれる

春雷や京にて雪の白い修羅

冬野出て春のいろどり花祭り

仏飯へ生きる真意を湯気に問い

黒石市 相馬一花

くどくどと言ひ訳をするおじぎ草

大顔を小顔に見せる化粧法

人脈で当選をする海坊主

がん検診せずに長生きする噂

研修を重ねて嵌める詐欺師たち

黒石市 佐藤古拙

右左ないが軍手にある誇り

金曜の春眠いびき遠慮せず

たばこの輪おのずと目線上を向く

俯いて吐いたことないたばこの輪

萌黄色あざやかにする雪である

平川市 小寺花峯

世の中は暗いカラスは黒すぎる

この先に何があろうと酒がある

胡坐から本音飛び出す茶碗酒

疑問符が朝の太陽から溶ける

最後尾蟻はぶらぶら落ちこぼれ

手のひらの愛の欠片を残し火に

決断に迷うと亡父が逢いにくる

揺れ出した父の威厳がこそばゆい

消しゴムで消せない点が束になる

横浜市 小野句多留

スピーチも厳しい国の事始め

ボロ市を頭をカラにして歩く（世田谷ボロ市）

この橋は落ちると雪に言つたのに

七十路の想いはやはり微臭い

タイピンの過去ほとんどを整理する

横浜市 菊地政勝

鍵掛けに痴呆の脳が戻らせる

メールよりこころ動かす花切手

鉄筆の記憶が徐徐に風化する

命名へ寿限無が浮かび自嘲する

薄給に綱渡りしてフルムーン

川崎市 三浦きぬ

よくもまあ持病かかえて九十三歳

ファッションの華やか女性議員さま

老いるとはこう言うことか医者梯子

迷い猫おまえもひとり生きてるか

観世音お手を一本お借りしたい

富山市 島 ひかる

硬い皮破り芽をふく陽の温さ  
金婚へつづき続けて居る不思議  
春最中ひと色プラスわたしの絵  
一病も知らず八十路へひた走る  
一番も最後も同じライン踏む

可児市 板山 まみ子

大寒に金婚祝いハワイ路へ  
マウナケア星見に月が明かる過ぎ  
蒸気吹くカルデラ歩くキラウエア  
時差ボケを溜った家事が許さない  
できるなら冬は毎年アロハオエ

静岡県 藺田 獏 杏

パソコンに挑む傘寿のやり直し  
女所帯頼まれ釘を打って来た  
口コミが一番こわい説得力  
鍋焼きの湯気の向こうの食い盛り  
我慢して手遅れにする内視鏡

犬山市 関本 かつ子

メロディを聞き分けて待つ灯油缶  
蓄でも旗が閃く梅まつり  
平成の由来に遠くなる日本  
微笑んで外貨を稼ぐ天子像  
中程の幸せならば手を打とう

犬山市 金子 美千代

リフォームをしてキッチンと呼んでいる  
義理で行き義理で来ていただく法事  
不足ない暮らしと母に言っておく  
夕ごはん食べねばならぬ本を閉じ  
春よこい辛抱強く待つ蕾

犬山市 吉田 幸子

遠い日の苦労話をして笑い  
予備軍になって甘党やるせない  
北北西願い真面目に噛み締める  
相撲甚句なるほどウフフ春を呼ぶ  
屋根の雪若いパワーに手を合わせ

京都府 高島 啓子

渡らねばならない目の前の橋  
着歴が残る不都合なことだ  
食番組ばかり胃拡張になる  
部屋ごとの時計それぞれ癖がある  
黄すみれのあたり明るい陽が満ちる

京都府 三宅 満子

遺言は皆に感謝と書くつもり  
つもり貯金で夢が叶ったフルムーン  
漁火がついて復興少しずつ  
寒い日は猫と早寝を決め込んで  
裕次郎もひばりも胸に若いまま



京都市 榎本宏子

長岡京市 山田葉子

姿見で殺し文句を稽古する

妻にだけが上司になった無位無冠

万華鏡遊ばれているのはわたし

ほったらかしの椿健気に花芽もつ

大人には分からね絵本子の笑い

京都市 坪井孝一

根の深い運命線が邪魔をする

野の花が包みこんでる石仏

幸せにも嘘のつけない人と住む

微笑みが売りのモナリザ眠いんだ

新築の釘の打てない壁の家

京都市 西村益子

相似形頬杖をする爺と孫

媚びないで気楽に生きて角が取れ

七十路を自分のために楽しもう

母さんの竜巻時に吹き荒れる

丸い背しつかりせよとジャコ昆布

亀岡市 井上森生

老いの身に春は孫らの新学期

練り上げた丹田締めてホッカホカ

新療法貧乏揺すりが膝に効く (TVためしてガッテン)

大空を力一杯呑むやる気

米寿まで生きたらその技教えます

よく聴くと苦情言われているらしい

嫌なこと聞くとび耳が遠くなる

カーナビの知らない路地にうまい店

朝ドラに姉弟喧嘩懐かしむ

錆びてきた物差し昭和口ずさむ

大阪市 吉村一風

貧富など言わないだから花はいい

寄せ書きの隅にこんもり愛を盛る

みやげにはいつも内緒がひとつある

嬉しかった席空けたのは茶髪の子

善いことをすれば心に花が咲く

大阪市 大川桃花

耳に穴あけた男のうすい胸

毒舌と毒舌仲の良い夫婦

原発をまもる停電楯にして

算数は苦手です速い金勘じよ

童謡から知る美しい日本語

大阪市 岩崎公誠

九分九厘ボンコツになり生きている

実らない話つづけている不毛

パソコンの川でアナログ溺れている

青い鳥イメージだけで愛される

爪を切るあれこれ明日を考える

大阪市 小谷 集 一

大阪市 谷 口 義

好きという言葉に深い意味はない

旧姓で声かけられた里の駅

美辞麗句よりは気配り思い遣り

生れたら一生という檻の中

アクセルをゆるめて余生風になる

大阪市 鶴 田 遠 野

ひっそりと店畳んではった三代目

スイーツにセクハラされる血糖値

一別に記憶の糸を織っておく

なみなみと小言を注ぐ妻の酌

低迷で多忙になった社の幹部

大阪市 板 東 倫 子

家計簿は中止へそくり出来ぬから

節分の鬼が静かに引上げる

親馬鹿にみんなで合わす無責任

バレンタイン日本男子は疲れ果て

国政が老齡年金減らす怪

大阪市 升 成 好

大寒波日本列島羽交い締め

繕いでなくお洒落なんですアップリケ

連れ合いの話で弾む女たち

その集い酒は出るかと念を押す

日本の朝一番は競りの声

友だちは一人もない友の会

こだわりはこだわりとして隅に置く

たましいが抜け出さぬようマスクする

オブラートに包む言葉を知りません

優柔不断のまましりとりが終る

大阪市 坂 裕 之

若者の素晴らしさ見たローザンヌ

存在を認めてくれる人が居る

父さんの仕切るお鍋が旨かった

真つすぐがいいと決った訳じゃない

横槍を入れる気力がまだあった

大阪市 榎 本 日 出

すっぴんで出掛けていますポストまで

節電で早く寝た夜は夢ばかり

反省をしても食欲には負ける

大吉のみくじ財布に入れたまま

真夜中の電話飛び起こされただけ

大阪市 平 嶋 美 智 子

庖丁の音目覚し時計より確か

とんとんとんばたきゆつきゆ朝の音

被災地の雪の下にも春の夢

そつと肩たたかれ心晴れた時

嫁姑潤滑油から逃げる孫

大阪市 澤田 定子

チャイム鳴る湧き出るところとく子等あふれ  
豪雪の白い悪魔に囲われる

写真では立派に見えた一戸建

通販のシルクのパジャマ薄いこと

家事雑事熱中出来ず日が暮れる

大阪市 伏見 雅明

大物のつもりなんでも他人まかせ

マイカーのキーの代わりに万歩計

厄あけた途端くすりが多くなり

戸締りが何故か気になる妻の留守

がらくたを集めて自慢する果報

大阪市 寺井 弘子

その辺で諦めたらという鏡

手間省くデパ地下料理ほめられる

つむじ風吹き抜けてゆく子供部屋

お茶代の割り勘恋の芽をつぶす

嫁が来て我が家のルールぶちこわす

大阪市 小泉 ひさ乃

それぞれのドラマ作りに親ばなれ

子のノルマ年金範囲での助け

携帯のマナーおばさんすぐ忘れ

傷ついて感情理性交差する

もう燃えることもない残り火を抱き

大阪市 佐藤 忠昭

未知の土地同居話に湧く不安

三世代上手に生活出来るかな

面倒だ有り金全部呉れてやる

住み慣れたナンバ梅田は華がある

折合いを付けて同居は四年先

大阪市 熊代 菜月

値切られる覚悟で値札つけている

初仕事デイサービスに行く日課

農閑期嫁がめかしてコンサート

ファッションはちよつと派手目と決めている

積みあげた苦勞の花よナデシコよ

大阪市 奥村 五月

夜遊びの好きな諭吉に子守唄

席取ってお待ちしますとあの世から

上品にカニは食べても旨くない

始末書も書いたあの子に介護され

恐い妻俺の意見はみな畳む

大阪市 中村 叡子

ごちゃごちゃと要る物みんな身の周り

我ながら山坂多き八十路生き

早や一年津波原発未解決

天国と地獄を見てる今の世は

由紀さおりルルルで世界魅了する

大阪市 江島谷 勝弘

大阪市 津 守 なぎさ

ケータイが並んで列車待つている

突然に体がはてる汗がでる

カミさんが毎日僕にケチつける

現地では収束なんてないらしい

偶然が重なりあつて運不運

大阪市 池 上 清 治

夜はよく眠れてほんま有難い

眠れない夜はラジオが友になり

売れ残る寿司の値下げを狙う孫

大雪にうなされそうな夜が深み

残りくじいやいや引いて大当たり

大阪市 原 田 すみ子

縁側でふくら雀が瘦せてゆく

梅林でふと口遊む早春譜

思ひ出を小出し好みの色を塗る

誰よりも自分励まし甘やかす

不得手から意外な幸がこぼれ落ち

大阪市 松 尾 柳 右子

病院へ行く日しるしたカレンダー

小魚のから揚げからつとカルシウム

留守番の作句に力入れて見る

よもぎ餅よもぎ摘んだ日思い出す

演歌聞き心ぬくもる午後三時

愛蔵書眺め心を落ちつかす

七色の財布で溜ることがない

落伍者が増える後期の旅プラン

真剣にとり組む文字がみなゆがむ

果物はお尻に訳がありそうだ

大阪市 津 村 志華子

おぼろ月過去のことなど忘れましょ

ゆつくりとしよう余生に限りある

乾杯のグラスに心透けている

鉛筆の転がる先は花浄土

饅頭はもう食べ飽きた仏さん

大阪市 田 浦 實

バタバタとしないでいると孤立する

天災が隠れ人災炙り出す

響く槌音きつと悲しみ忘れさす

節電の効果があがる亭主留守

ど忘れが夫婦メモ魔にさせました

大阪市 笠 嶋 恵 美

わた菓子で童心になる元気出る

喜寿祝う数えでけじめつけたくて

無理のない百歳体操もてます

飲み放題みんな仲良く酔いました

それとなく覚悟うながす話聞く

大阪市 近藤 正

被災地の人の絆の温かさ

なめらかに酒一杯で舌まわる

貧しくも桜満開青テント

四年後の不安抱いてサクラサク

維新の会流行病の塾通い

大阪市 榎本 舞夢

今年こそと決めた誓いがつづいてる

ハズバンドエプロン姿いたにつく

老人会異なる趣味で西東

バレンタイン孫と付き合い一つ買う

久しぶり八十路記念に雛祭り

大阪市 吉内 タカ子

温い手を戴く介護ありがたい

介護人無理をするなと神の声

ただ笑顔見たさの介護足が向く

長生きも政治不安が胸を刺す

孫の守りイクメン休暇手もだせぬ

堺市 村上 玄也

過去形になった後輩との会話

足跡はもう見当たらず旧職場

年寄りと自覚をしだす七十五

見栄張って詰め込んである予定表

一つの世も正論袋叩きされ

堺市 奥 時雄

クラス会集まったのは生き残り

来年のことは語れぬクラス会

水臭いことは言えぬ家族葬

洪水に浸され飲める水がない

千枚田夕陽一段ごと昇る

堺市 加島 由一

こころざし一朶の雲を見て登る

肅々と来る病院の無料バス

正確に来る病院の無料バス

お得意のマラカスを振る庶務課長

空気読みたまに本音も言うてみる

堺市 荻野 像山

年明けた途端に早くすすむ日々

途中下車したいが停まらない月日

お迎えに備え足腰鍛えてる

アリバイを信じる母は裏切れぬ

柿取れば幼馴染がよみがえる

堺市 矢倉 五月

元氣だせ遺影にエール送られる

また開ける待受け亡夫に変えてから

振り向けば亡夫見た日の演技力

今わたし泣けばこの娘がなお嘆く

消し忘れ誰のせいでもない独り

堺市源田八千代

雪の中宅急便が無事に着き  
如月に梅の蕾が未だ固い

チャイムに電話同時に鳴って急からしい

誉れさんとも称したい澤選手

義理チョコをコーラス句会エアロビクス

堺市齋藤さくら

雪下ろし知らぬ大阪ありがたし

もう涙出なくなつたな一周忌

水仙も春を待つてゐる散歩道

医者通い口だけ元気言うてはり

待つてゐる時は長いなまた来てね

堺市大隅克博

親からは一度もこない請求書

才色兼備天は二物を与えはる

嫌いとか好きとか越えて妻といふ

健康が一番だなと気がついた

どうしよう奉加帳みて思案する

堺市遠山唯教

子が育つとどん夢が擦れ違ふ

旅に出る妻はいきいきして跳ねる

健康でいると孤独を感じない

着脹れで七人掛けにいる五人

いいことがあるといいねと旅つづく

堺市西村りつえ

迷い込み縋る物ない大砂漠

期待せずそれなりに待つ日向ぼこ

偏屈は恵まれすぎて隅で生き

あいまいな笑顔が誘う落し穴

マイペース一歩一歩に楽も苦も

堺市宮本かりん

人の話そこそこに聞き自己主張

先見えぬままで急かせる風の音

年重ね人それぞれの味を出す

冴えた月明るい道をありがとう

ボール投げ未来夢見ている親子

堺市内藤憲彦

桜咲き一粒種が正社員

生き慣れて初めの一歩忘れてる

バイキング育ちの良さを皿に盛る

いつも愚痴拾ってくれる友が居る

花粉症ラブチョコよりも早く来る

池田市栗田久子

川風の静まる音を待つてゐる

太陽と風椎茸を干してみる

どのように育ててみても猫は猫

やさしさが映るだろうか窓ガラス

草の芽ののぞく気配はまだ見えぬ

和泉市 横山捷也

大阪狭山市 矢野梓

買うものは無いが百均に寄つてみる  
賛成に少し迷つた左の手

鍵穴を覗いたほどで知る世間

一寸した段に躓づく悲しい日

ブライドは捨てず孤独のままで居る

泉佐野市 山本蛙城

ポケットにいつも飴ありご同役

することがなさそうでするスクワット

雪予報続きお鍋を続けます

金儲け達者学生兼社長

産め殖やせ老人デモをしませんか

茨木市 藤井正雄

懐の深さに魅力ある課長

ライバルを素直にほめているゆとり

定年日歩から出直す夜が明ける

酌み交わす仲間も老いて量が減り

勝敗の鍵持たされて立つ代打

茨木市 島田誠一

盆梅展万朶の蕾一会待つ

予備校の門前活気出だす春

山桜一夜の風に散る吉野

水ものの人気に潜むスキャンダル

集まって飲んでカラオケまだ平和

回り道梅の蕾に歩が緩み

ぶつ付ける豆が足りない鬼は外

冬の陽を浴びる窓辺に座を移す

沈黙の長さが多分返事だと

料理本何冊も見てまたカレー

交野市 森本弘風

菓子店をチョコが占領する二月

せめて十粒少くしたい豆の数

二年ぶり鬢付け油匂う街

断捨離についていけない昭和っ子

人材は潰してしまえ俺のため

河内長野市 村上直樹

続編はない自分史のエピローグ

輪廻転生母なる河の暖かさ

良薬と思えば甘し妻の下知

寂聴を聴いてこころの錆落し

茶柱をしみじみふたり冬の朝

河内長野市 坂上淳司

ぜんざいに厄を小分けにして配る

厄除けの鯛の小骨喉に立て

医者に行く丸で埋っている暦

花丸は偶数月の十五日

陰暦を今も大事にする農家

河内長野市 植村喜代

元気でいててねと言う年賀多くなり

人の心も知らず雪は降る

いつの間に耳も八十三になり

ふらふらと足が時々雲の上

あれこれと持たせて帰す娘が二人

河内長野市 黒岩靖博

雷を何度も受けて咲いた華

汗流し絆生れたボランティア

失った愛と絆の大切さ

円高の歯止めきかずに国を捨て

試供品もらった後の電話攻め

河内長野市 山室光弘

鬼っ子になつてくれろと願う親

着脹れた日めくり剥いで過ぎる四季

寒い朝布団とかわす格闘技

過不足のない人生に悔いひとつ

妻の小言反応すればおおごとに

岸和田市 原 さよ子

箒目の踏むのがおしい寺の庭

なじみでもおまけはしない販売機

あれこれと言うまに過ぎた適齢期

神様のお蔭にしたがるおばあちゃん

ばあちゃんの歴史を語る指のふし

岸和田市 雪本珠子

幸せも色んな形あるみたい

したたかに生きてみるよと月が言う

変わらない笑顔の妻が傍にいる

オープンなわりに本音は出さぬ人

輪の中で噂の渦に巻き込まれ

岸和田市 岩佐ダン吉

腹据えてかかる失うものはない

わだかまり捨てて私も救われる

やるだけはやっただぞ汗を信じたい

今はひとりやがてでつかい声になる

勘よりも汗をかいたらどうですか

岸和田市 堤 檀代

よく食べて笑っているからまだ死ぬ

雪除けも知らぬ南の果報者

申告は不要な年金もらってる

久しぶり雨が路地花よろこばす

如月や待つてましたとチョコが言う

岸和田市 森元 ふみよ

五十回忌済ませてはつと亡母の顔

独り居に鬼さんどうぞお茶どうぞ

老女にも子供ニュースは楽しくて

老梅が香り振り撒き存在感

年重ね感性高く意気盛ん



四條畷市 吉岡 修

印籠が長く世間をにらんでた  
この一冊これは冥土へ持つてゆく  
父さんに聞いても母にたしかめる  
いよいよ時の下着も買つてある  
一冊も残さずきつと捨てられる

吹田市 大谷 篤子

待ちぼうけ詫びてるようなラベンダー  
にんにくと生姜で厄も寄せつけず  
湯たんぼの湯で顔洗いエコしてる  
都合よく人数合せにされている  
アンテナが錆びて不協和音も落着かず

吹田市 瀬戸 まさよ

高齢の元氣いただく高齢者  
昔はね絆で苦労したものよ  
席どうぞうれしいけれど老いを知る  
駅弁で思い出の旅買つてます  
殆んどが妻の介護に甘えます

吹田市 野下之男

今年こそ神様はもう聞き飽きた  
反対のための反対何処へ行く  
名前だけ残しています国技館  
年下の男が持てる良い時代  
新星の会心の笑み待つゴール

吹田市 木下 敏子

美しくなりたい夢の初鏡  
よろこびを分け合いながら寺の庭  
俵せの香りを抱いて路の臺  
立春の陽射しにじっとして居れず  
鬼は外福はしっかり抱いて寝る

吹田市 須磨 活恵

あんば柿半分コする春隣  
想い出は心にしまふ万華鏡  
想い出も記憶の底も紙魚が這う  
人は人私は私の靴を履く  
不器用で手探りばかりして喜寿

高石市 浅野 房子

十年後どっこい私生きている  
家族葬すませ隣は物静か  
家族葬出来ぬ一人だどうしよう  
長生きを喜ぶべきか泣くべきか  
ごめんねと言つて食べ物捨ててる日も

高槻市 指宿 千枝子

南からそろそろ届く花便り  
幸せをいっぱいもらう餅を焼く  
過ぎたこと愚痴ると皺が増えそうだ  
明日は明日考えるのは止めにする  
臆せず歩く自分の道がある

高槻市 片山 かずお

これが僕ですかと見てるウインドー  
気だるさの午後の空気に身をまかせ  
あきらめて終わりを知れと舞う枯れ葉  
振り向いて欲しいと見てる好きな人  
上ばかり見て幸せを取り逃がす

高槻市 井上 照子

昇進の友へ健康ご忠告  
引き受けたスピーチ暗記もう無理ね  
寄せ植の花に元気をありがとう  
今夜また眠れるように飲むワイン  
老いた身の視野の狭さに泣かされる

高槻市 峯村 勳弘

ふと思う東北地震無かったら  
議員数減らず税金増えて行く  
上を向く睫毛は嘘をつきません  
AKB明日へ希望と読み替える  
平和にはやはり桜が良く似合う

高槻市 初代 正彦

お互いの心をつなぐいい笑顔  
せせらぎのぬるんだ水に声をかけ  
迷うのも若い証しと気にしない  
窓際へ移ったお陰広い視野  
立春のまだ凍てた地に小さな芽

高槻市 富田 保子

カラオケで四分だけは歌手気分  
孫のため景品いつも取ってある  
一日がこんな短い院通い  
二人三脚手術した日を懐かしむ  
謎々が解けた人生ひろい道

高槻市 佐甲 昭二

ただ酒を飲めばどこかで付けが来る  
追伸に謎解く鍵が伏せてある  
もの言わぬ父の背中が睨んでる  
きつと来るラストチャンスに賭けている  
神からの息災というお年玉

高槻市 左右田 泰雄

ちよつとそこまでと出かける軽い腰  
逃げ足の早さじゃ負けぬ雲がくれ  
人生の余白に咲いた返り花  
困難にぶつかる度につく自信  
うつとりと夢の続きを手繰り寄せ

高槻市 杉本 義昭

遅咲きをゆつくり待つてくれた母  
カフェテラス決まって座る席がある  
千年の大樹支えている根つ子  
被災地の木々は森へと夢つなく  
法話聞く心が正座して痺れ

高槻市 島田 千鶴子

はよはよと私を急かす電子音  
バイキングお止しなさいと血糖値  
深刻な顔で読んでるマンガ本  
波の音今は静かなレクイエム  
雖まつり小さな紳士虬張る

高槻市 安田 忠子

年齢忘れ趣味三昧で若返る  
書きかけて簡単な字をふと忘れ  
何食べたい満腹な時言われても  
美味しいもの昔は後に今先に  
大阪市の方向向いてまるかじり

豊中市 水野 黒兎

日だまりの領有権を猫は死守  
ぶつぶつと醗酵をする内緒事  
世界地図たまには上下逆に掛け  
遊園地の鉄棒は錆び団地老い  
ぼちぼちで浪速商人ビルを建て

豊中市 藤井 則彦

エゴに酔うヒト科に牙を剥く自然  
有終の美を飾りたいロスタイム  
夫婦とも持病があると元気です  
野良犬にも引つ越しそばを分けてやり  
辛い世も五風十雨に宥められ

豊中市 安藤 寿美子

東京で大阪弁をかくさない  
近ごろは南天の実に鳥も来ず  
風の音あの子が居ればとまた思う  
いつまでも辛さにおぼれていてはあかん  
川柳があつて私は生きている

豊中市 松尾 美智代

鬼も攪乱五日も床に就きました  
病み上りなるとご飯の美味しいこと  
弁当作る手元が迷う久し振り  
福寿草今年も庭に咲きました  
日向ぼこ何とお陽さまありがたい

豊中市 松村 里江

修羅場抜け一皮むけた女です  
にぎやかな女淋しさ裏返し  
心配があつても私とほけてる  
すべてごく普通あの人よくモテる  
ピンピンコロリへ善いこと積み重ね

富田林市 中井 アキ

大雪のニュースと蜚梅の黄色  
もつと高くもつと青くと羽繕い  
終ったとしみじみ思う水鏡  
貪欲になろう選んだ道だもの  
スランプの出口あたりに薄氷

富田林市 片岡 智恵子

寝屋川市 富山 ルイ子

本心を語ろう仮面はずします

二度の肺炎夫は命とりもどす

今日という独楽がくるくるよく回る

究極の心変りに錆が浮く

ぜいたくに慣れすぎ地球破壊する

富田林市 中崎 深雪

冬深し しんしんとこの痛み

病得てようやく見えたものがあり

闘病は苦しいが不幸にあらず

頼られる人でありたい弱者だが

笹鳴きにガラス磨いて春を待つ

寝屋川市 平松 かすみ

私をきれいに見せる臘月

回れ右ゆっくりどうぞお手洗い

二桁の暗算はもう苦手です

発条の仕掛けのような金バッジ

国会は瓦礫の上でしてみよう

寝屋川市 籠島 恵子

二等辺三角形におくところ

辛抱はほどほどにする余命表

稜線が透けて見えます冬木立

平凡というラッキーに生かされる

そうかいそうかい あんたはそれでいいのかい

血圧が二〇〇におどろいてしまふ

二〇〇ではさすがに風呂は中止する

傘寿でも健康過信していたが

脑梗塞にならずやれやれホッとする

遺言状日を措かずに書くとする

寝屋川市 森田 麗

都会人雪で転ぶもニュースに

雪囲い蓄を抱く母の如

立春に絆深める里の雪

厄の神断わりですとステッカー

ゼブラゾーン走れば君の影に会う

寝屋川市 山本 三郎

与野党が国民無視の怒鳴りあい

曲線も有ったが妻は付いて来た

定年がほとけの顔にしてくれる

一流を指せと親のプレッシャー

野仏の雪を払って手を合わす

箕面市 広島 巴子

沖縄の今チャンブルがほろ苦く

守札門くぐり琉球ロマン追う

美ら海の風すきとおる露天風呂

誓い立てひめゆりの塔献花する

万歩計戸棚にしまい冬籠り

守口市 井上桂作

年よりは考える力忘れずに  
考えてたくましく生きようぜ  
原発の議事録づくりなぜできぬ  
震災が絆となりて国柄に  
大阪維新船中八策引き合いに

羽曳野市 徳山みつこ

豪雪のりんご痛からつらからう  
甘酒に生姜効かせて昔飲む  
回遊もむなしい就活のスーツ  
音もなくしつとり慈悲の雨がふる  
ご先祖の恵み私は生かされる

羽曳野市 吉村久仁雄

負けてなお直球勝負しかできず  
鍵のない檻に人間しがみつく  
時という薬を待てぬ歳となる  
あまり水やらぬ息子が発芽する  
ほっこりと温い人だとだけで終え

羽曳野市 永田章司

ツイッター無言の民が立ち上る  
水面下国を左右の密議あり  
責任の回避部厚い説明書  
君だけとみんなに言って信が落ち  
余命告げ医者すっきりの顔になる

羽曳野市 三好専平

電話では天使のような声を出し  
人間を信じて燕巢を造り  
杜甫の詩が好きで左遷は気にならず  
すこしだけ濁った冬の池が好き  
生きる意味なんてわからんこと言うな

羽曳野市 福田悦子

試されるジグソーパズルの複雑さ  
愛満タン朝のみそ汁そこに母  
足音はまだまだ先の春の雪  
困ったらまず携帯に手を延ばし  
生きている証空氣が旨すぎて

羽曳野市 宇都宮ちづる

紙風船扱うように孫叱る  
きしむ音するので今夜微温い燗  
爪染めてちよつと弾んで同窓会  
縁日の金魚我家で鯉目指す  
あの日から被曝氣にしてレントゲン

東大阪市 佐々木満作

物好きが高じて人に疎まれる  
身から出た錆を落としに組む座禪  
古希過ぎて好奇心まだ衰えず  
よく喋るインコに癒し貰ってる  
突然に体調異変起こる古希

東大阪市 米田 水昇

舞扇ひらいて好きな面ざしに  
顔叩き化粧たつぷり冬の夜  
姉妹旅それぞれ若さ取り戻す  
痛み止め飲んだり寝たり忙がしい  
通販で食材料もセーターも

枚方市 寺川 弘一

空っぽの抽斗だけど鍵かける  
踏まれぬように雑草可憐な花咲かす  
お酒止めると誰もが理由聞きたがる  
大木になって見返すこぼれ種  
冷たいと言わずクールと言ってくれ

枚方市 伊達 郁夫

ありったけの笑顔で入る手術室  
温度差がだんだん埋まるキムチ鍋  
難敵は私自身と知りました  
諦めがいつもの顔にしてくれる  
今のとこ妻は一人で足りてます

枚方市 丹後屋 肇

集中力途切れてしまうフライング  
ヘルパーの介助を待ち侘びる孤老  
越冬の鴨に餌を撒くボランティア  
怒鳴り合い笑い転げる濃い絆  
燃え尽きて負けたのだから実力差

枚方市 小林 わこ

どのあたり踏むと腰痛楽ですか  
踏んでふんでへこまない風船ほしい  
だから坂踏み越えたいと思う冬  
初舞台あつという間の無い記憶  
ブレーキかける友の眼いつも暖かい

枚方市 二宮 紫鳳

一輪の梅ほころびて福を呼ぶ  
水仙の香りを活けて春を待つ  
手習いの成果が見える孫賀状  
被災地に思いをはせて暖をとる  
潔く切ったことばがまだ疼く

枚方市 二宮 山久

古稀近し絆深めるペアシューズ  
お互いの器知ってか丸く生き  
世渡りの下手な同士で盃進む  
寒波にも耐えて体操六時半  
初詣高いハードル決意する

藤井寺市 高田 美代子

辛い日もここに笑顔抱いている  
四捨五入どうなろうとも僕の運  
フィクションとわかっていても聞いておく  
都合よく桜が咲いているデパート  
お湯割りへ芋か麦かと聞きにくる

藤井寺市 太田 扶美代

縋帯の下はやわらかい新芽  
分つてくれたらしいウイंकが届く  
女とや喋りたい日が偶にあり  
七十歳このまま生きていいのかな  
あと二周ここで一息入れておく

藤井寺市 鈴木 いさお

下ぶくれバツハはきつと好々爺  
その辺にふつといそうなモーツアルト  
口髭が似合うねヨハンシュトラウス  
メンデルスゾーンと夢を語りたい  
愛嬌あるドボルザークの髭っ面

藤井寺市 伊藤 アヤ子

雪だるまつくるほどの降りならば  
尼寺のしだれ桜も春を待つ  
雪帽子すっぱり被る寒はたん  
紅梅が窓を開ければ笑つて  
ふるさとは霧氷の花と温泉地

藤井寺市 津田 シルク

うつの日の特効薬に五七五  
かわいい子に旅はさせれぬ世の中に  
喪服着て帽子ふかあくかぶります  
鰯の群中の一匹私かも  
おでんどっさり女房は旅のフルコース

藤井寺市 吉田 喜代子

独り居の不安を知つた長い風邪  
有り難い主治医のような友が居た  
流水を待ち兼ねている生命あり  
恵方巻き豪華になつて食べ切れず  
縁側でふくらむ蘭と春を待つ

藤井寺市 若松 雅枝

ドレスアップの無駄知らされた試着室  
ブライドがあるから正義守り抜く  
診察券また一枚が増えている  
野牡丹が狂い咲きして人を恋う  
グーチョキパーテレビ見ながらストレッチ

藤井寺市 俣野 登志子

英語かと思う女学生の会話  
老いの趣味永久の友とのめぐり逢い  
衝動買いの靴に言い訳聞かせてる  
思い切り断捨離できたまた買える  
七度五分寝てはおれない上天氣

松原市 森松 まつお

一日のペースつかめぬ定年後  
三丁目の夕日に心洗われる  
名場面泣いてるボクを笑う妻  
忠臣蔵観ても泣かない人がいた  
ここだけの話が好きな芋焼酎

八尾市 宮崎 シマ子

夫の留守独り言にも五七五  
寺の鐘さつとひらめく五七五  
階段を数えて余る五七五  
雨垂れにリズムを合わす五七五  
振り出しに戻って迷う五七五

八尾市 高杉 千歩

大輪の薔薇にも消したい過去があり  
老人会七十歳は若手です  
ポイント五倍を待つて貼るカイロ  
てんでこ舞いしている夢で午前五時  
筆順が違うが正解になるクイズ

八尾市 村上 ミツ子

おお寒いこころも背なもふところも  
息ふきかけて温めたりさましたり  
二十九と三十にある高い壁  
知つてると言わず識つてる話聞く  
時間に義理に縛られているいつも

八尾市 寺川 はじむ

悪魔にも聖者にもなる水の神  
維新という磁石に集う永田衆  
水割りに恋を浮かべた日を思い  
節電ルールふたりで決めて消し忘れ  
液晶に縋ったツケが社を揺する

大阪府 初山 隆盛

冬空の星がすくとんと計の知らせ  
結んで開く愛の握手に合う割り符  
ふる里の風土をつむぐ黄八丈  
リハビリの大地を蹴った試歩の杖  
極楽を覗いた法話艶がある

大阪府 米澤 俣子

大地震じりじり近くなる予感  
漬物石に母の元気が生きている  
命をつなぐ年金ちよいと危かし  
限りある時間たのしい色で描く  
軸足を換えても駄馬でいるワタシ

大阪府 桑田 ゆきの

地下街で迷子になった親探す  
天才と言われた頃の花の彩  
芸能界年の差婚に咲かす花  
豪雪にリスク背負って雪を掻く  
立春の大空一片の雲もなし

大阪府 野田 栄呼

復興へ兆の数字がつきまとう  
赤を着て元氣引きよせ旅枕  
正座できるただそれだけで有難い  
雪しんしん熱い恋文陽が昇る  
生まれるも死ぬのもひとり怖くない



神戸市 山口 美穂

日本丸の船頭どこへ連れてゆく  
飼い主にそっくりな犬連れている  
小春日の窓辺へ老犬を寝かしつけ  
朝昼夕ごはんときすりセツトです  
ひとり鍋昨日を少し変えただけ

神戸市 山田 婦美子

選択に洩れた片方の道思う  
半生記守り続けた薬指

振りむけばはつきり見えてくる因果  
松葉でも一人になりたいときがある  
日だまりの梅の蕾が語りかけ

神戸市 木村 貴代子

今つばみ孫よ自分の色に咲け  
雪の底生命を抱いて待つ蕾  
足弱をさそってくれる友が居る  
コンサートうれしやさしい友と来て  
二人目にせめて産着は新品を

神戸市 山崎 武彦

記念日はバラと笑顔を届けます  
譲られた藤椅子にある亡父の癖  
原発に懲りて質素な暮らし向き  
成るようになれとは亡父の遺伝子か  
まっ白な心ためらいなど持たぬ

神戸市 伊勢田 毅

単身赴任先ず試される酒と喉  
アベックの雀がのぞく雪落し  
医者嫌い本音を言えはこわいから  
立春後疎ましくなる雪の嵩  
風評に負けるものかと種を播く

相生市 中塚 礎石

我武者羅が米寿迎えた向こう傷  
点線の跡を女房が線を引く  
真実が見え隠れする顔ならぶ  
西日うけ同じ歩幅でついてくる  
切腹をして長生きをするつもり

明石市 梶谷 和郎

ためらういつも背を押す亡父の声  
国間に譲らぬ意地が線を引く  
ためらって尻尾ごと喰われた蜥蜴  
崖を背にしてためらいが消えていた  
好きなのに逆の言葉が先走る

芦屋市 黒田 能子

五十年あかところも気にならぬ  
神さまが意地悪ばかりして困る  
ぜいたくは敵だと教えられました  
おはじきが出来そうカラフルな薬  
真夜中の冴えた頭の物思い

芦屋市 竹山 千賀子

両の手をゆるり労う仕舞風呂

縁側で充電中の老夫婦

蹟いた石大切に磨いてる

いやな事一日延ばし重くなる

友の死を悼みはらはら舞う粉雪

尼崎市 春城 年代

垣武御陵のご近所ですのわが母校

亡夫の行方あの星だろか星だろか

倦怠期などあったかしらと万華鏡

空耳か亡夫の声がご苦労さん

父似だいや母似だと七回忌

尼崎市 山田 耕治

教頭が兎世話する春休み

厄などは知らぬせつせと朝歩き

三姉妹法事のたびに比べられ

先に行つてますと立ち話をぬける

検査値にあと十年の夢を見る

尼崎市 長浜 美籠

ケーキセツト愚痴から恋の話まで

叱られるほど愛されてないらしい

バスワード神にあずけている余白

門外不出なみだも溜息も

先行きの予兆パワーを小出しする

尼崎市 藤岡 りこ

デパートで駄弁を買い旅の味

仮病した次の日マスクして出社

ラーメンも割り勘にして気が軽い

経を読むかわいい声は三代目

思い出は小箱に入れて秘めておく

尼崎市 軸丸 勝巳

少年に戻りふる里会弾む

マチュピチュに負けぬ景色とくに自慢

地震予知安全地帯ない日本

積もる雪屏風立てたい日本海

氷点下何ぞ炬燵でみかん剥く

尼崎市 林 昭三

爺ちゃんは骨ばかりだと孫が撫で

母として守って欲しい五ヶ条は

体調で自販機で買うカップ酒

歳重ね近頃犬に遊ばれる

風格は我が家で一番古時計

伊丹市 山崎 君子

胡蝶蘭二月の部屋を飾ります

本ひらく今年もたのしむ川柳塔

ウィンフィルうつとりと聞く日曜日

いい人に今日も囲まれ一日を

友来る嬉しい話つぎつぎと

加西市 金川宣子

崖つぶち夫婦の仲をつなく犬  
長電話溜まっていたな愚痴不満  
うちの孫意外に出来た表彰状  
定年後脳みそ捏ねることもなく  
赤札に引き寄せられてメニユー決め

川西市 西内朋月

寒さには滅法弱い瘦せ蛙  
隅っこ座席が性に合っている  
酒だけはずっと死ぬまで止めれない  
真っ先に逃げてしまえば楽だろう  
被災したつもりで入れる義捐箱

川西市 米原雪子

着ぶくれてにこにこしてるおばあちゃん  
リハビリと思って歩く小雪舞う  
口惜しいが最後まで見た負け試合  
失敗談まるで自慢をすることく  
生粋の京言葉に耳すす

三田市 北野哲男

恵方巻真面目にかぶっている独り  
ペンギンの歩みになった雪の道  
猫の恋暖かい家三日空け  
呆け方も笑いの種にクラス会  
学校が近くて地価が下り気味

三田市 久保田千代

いつの日か故郷知らない民となる  
赤く咲く椿に雪が華を添え  
悩みごと鏡の前を逸れて座し  
選択は夫唱婦随でかじを取る  
やけ食いで体重計がまた動く

三田市 福田好文

犬よりも先に駆け出す雪野原  
飲み過ぎは毒と酒には書いてない  
不覚にも犬に釣られてするあくび  
妻の留守家電あれこれ指示をする  
生かされていたと気が付く計の知らせ

三田市 上垣キヨミ

母からの五感宝にして生きる  
春の日の散歩に五七五が跳ねる  
諭吉さん私タイプで無いらしい  
風邪三日わんさか過去の人の夢  
同窓会年金の日の後に決め

西宮市 西口いわゑ

奮には教えることがたとある  
おべっかを知らな過ぎるぞ鏡たち  
ぜんざいで嫁と語らう小正月  
天を指す裸木の美にみとれてる  
雪がチラチラほっこりおでんでもしよう

西宮市 牧 淵 富喜子

上げ膳据膳入院ぐらし悪くない  
飛び切りの青空平熱に戻る  
ドクターに一句捻って礼を言う  
また少しやれる気がする米洗う  
国会のテレビに怒る熱がある

西宮市 山 本 義 子

備長炭あかあか生きて暖かい  
花自慢ホイホイ聞いて幸もらう  
未曾有の危機わたしも二三ありました  
はしゃいでは豪雪の地にすみませぬ  
終らねば二幕目あかぬ冬籠り

西宮市 亀 岡 哲 子

九十八のダンディふわり春帽子  
九十八に出逢いほほえみ湧く散歩  
九十八を支え奥さまいい笑顔  
九十八の庭に今年も花あふれ  
九十八の窓に明るい灯がともる

西宮市 緒 方 美津子

待ちわびたものがあふれる春の庭  
白木蓮咲いて華やぐ兎小屋  
うちの魔女箒を持つと立ち話  
子が生れ影をひそめた光りもの  
ガラクタに癒されたくて里帰り

西宮市 秋 元 てる

自慢した手前早朝から散歩  
見忘れたメモしげと見てわらう  
そうなんだ人はこうして年を取る  
相席の笑顔が決めた蕎麦の味  
言訳はマスク外してするものよ

西宮市 藤 木 直

年の差婚娘に年下の母が出来  
楽しい日キラリと光る人に逢う  
ゆつくりと戻す振じれた赤い糸  
病名を自分で付けて医者に行く  
ゆつくりと見えて心は忙しい

西宮市 片 山 忠

酒たばこやめても男廃れない  
欠点を一つあげれば笑い下手  
4 Bで思いのたけを打ちあける  
親切の裏まで読んだ無礼者  
あこがれはそつと野に置き火傷する

西宮市 吉 井 菜々子

行き交う人みんな二月の眉をして  
ジーンズで会う約束の旅かばん  
寒木の連なる空気吸いに行く  
アルゼンチンタンゴと走る九十九折  
いただいた句集へ飾るヒヤシンス

西宮市 足立 茂

口車に乗って虎の子消えてゆく

「入るな」の立札読んで来ないクマ

その日のうちにみんな知ってる箝口令

持ち歌が時間余して底をつく

あのころの天使このごろ牙をむく

西脇市 七反田 順子

牡蠣祭り孫に誘われ赤穂まで

水仙忌母の命日巡りくる

差し向い平和が続くお茶の味

旬の野菜鍋の日続くダイエツト

天空の龍のうろこに夢たくす

姫路市 古川 奮水

毎朝を犬も信じて散歩する

回転鮎値高鮎はまた回る

豪雪のニュースに瀬戸は雪を見ず

窓ガラス通し晴天あたたかい

未だ飲む気相棒のれん探してる

奈良市 米田 恭昌

バラエティーより補聴器好きな時代劇

孫の仲裁どっちつかずにシャンシャンシャン

堪忍袋繕っている飲み屋

余程のことか前後不覚に下戸が酔い

子も孫も居ぬに豆まく老いひとり

奈良市 加門 萌子

被害者に風化は無いぞ加害者よ

スポーツは元氣政治は首ひねる

人前で食べる文化が闊歩する

控え目も謙虚も死語となり果てる

文明の利器にトラブル多発して

奈良市 辻内 げんえい

別れ際やさしい言葉かける孫

犬も老いジャンプもせずに餌ねだる

上りより下りに欲しいエスカレータ

地位上り給与は少し下がってる

宇宙人きつというはず会っている

奈良市 岩本 浩二

ピリオドを打ちたい人が粘っこい

和太鼓のドンドコドンドン血がたぎる

五欲の荷降ろして登る八十路坂

はつらつと生きて締めたいエビローグ

いよいよの時は柩に酒 柳誌

奈良市 阿部 紀子

陸前の一本松に日が昇る

雪ひらり臘梅の香満ち満ちて

桜咲き年金全部散っていく

よどみなく何処まで目指す新市長

広言し実行せねばならぬ羽目

生駒市 飛 永 ぶりこ

蕪蒸しやんわり意固地はぐれ出す

冬ざれに小豆ことと夢躍り

高齡の過疎地に豪雪の無慘

小気味よい姉妹の会話春ほのか

冬日和出番身じろぐお難さま

檀原市 居 谷 真理子

復興へ歩は金飛車は龍となれ

真つ当な望みはゆつくりと叶う

戒律を破つて大輪が咲いた

節高い指だ文句を言わぬ手だ

全力を出させたまえとだけ祈る

大和郡山市 坊 農 柳 弘

母妻嫁家系引き継ぐ割烹着

濃く淡く私を口説く花さくら

陽春の笑顔きりりとニューフェイス

栗一枚春の音符を抱いたまま

内緒ごとダンスに入れていい夫婦

奈良県 渡 辺 富 子

やさしさのこだまで絆強くなる

言い合つて白い時間が過ぎていく

たつぷりの自由で老いがうろたえる

生きる意味求めさすらう頭陀袋

ま四角の男に惚れて傷だらけ

奈良県 天 正 千 梢

人の世の出舟入舟さみしかり

私の力釘一本位かな

朝空に日光菩薩りんとして

朝市が目ざめて朝がはじまりぬ

今までは一人で出来ると思うてた

和歌山市 福 本 英 子

バラもチョコも義理が嬉しい春の彩

手を叩くだけの招待状届く

点滴を嫌う血管開かない

航跡が見事夕陽ひき連れて

雪国に申し訳ない陽が海に

和歌山市 松 原 寿 子

雪の芯深い涙へ突き刺さる

輪になつて会話はじけるティータム

さらさらと瞳が夢を編んでいる

運命に忍びと文字がつきまとい

寒風へ充電させる絆チョコ

和歌山市 土 屋 起 世子

よい話ばかり集まる三回忌

都会っ子も祖母との会話国訛り

棚いっぱい家族写真の終の家

娘の服借りて紅さしクラス会

ゆつくりと歩けばよいと膝が言う

和歌山市 古久保 和子

朝だから起きるフツに暮らす幸  
空き箱へ空き箱入れて溜めてある  
指先の冷えは何かの罰だろう  
知りすぎた男は禁固刑に処す  
寒くても女の意地で衣替え

和歌山市 喜田 准一

夢一夜承知で乗った騙し船  
物分かり良過ぎて前に進めない  
ワンランク上を狙って背を伸ばす  
節目節目に思い出す亡父の背な  
身を切らず爪も切れない永田町

和歌山市 柏原 夕胡

にんげんに疲れて旅に出たところ  
ひたすらに春へ春へと手を伸ばす  
朝日がまぶしすぎる日もある磨ガラス  
何もかも流す桜が咲いたなら  
抱きしめたところから針抜け落ちる

和歌山市 坂部 紀久子

どか雪へシヤベル一つの苦悩見る  
水仙の白と仲良くしてみよう  
たまに嘘ついてほしいと見る鏡  
白紙委任亡夫に預けて慈なし  
おそくなると言うから私もおそくなる

和歌山市 田中 みね

降りしきる雪とて辛いものがある  
鬼の面きみに不要という鏡  
雪景色たのしむだけでいいものを  
もつと言え盾つく人が居て楽し  
そのうちに貴方さまでもやり返す

和歌山市 松尾 和香

始まりは遊び脳みそ生きかえる  
雪が舞う恋しい人の虎落笛  
お静かに動き始めた超音波  
胸底に温める愛を持って逝く  
試着室鏡が笑う子も笑う

和歌山市 玉置 当代

伝統を守る妥協は許さない  
再生の絆へフリーマーケット  
投句迫っているのに他所に目が移る  
押入れにあるのは不用品ばかり  
風穴をあけてジーンズ噂呼ぶ

和歌山市 上田 紀子

御期待に答えましよう桜咲く  
風除けに先頭切つてゆくゆとり  
ネジひとつ変えて響き合う心  
ためらいをきっぱり捨てて髪を切る  
糸切れた風罪などないものを

和歌山市 武 本 碧

満ち欠けがあつて人生ミステリー  
袖引いてみてもそ知らぬ顔の神  
影武者の彩が少うし濃い過ぎる  
小道具を揃え外堀埋めにくる  
粉雪もやがて吹雪となる噂

和歌山市 堀 富美子

緩んだか腹の立つのが消えている  
絵の中に母が居るから癒される  
びつたりと五体にギブス纏いつく  
節分へ小さな福を呼んでいる  
受験日の孫へ祈りが深くなる

海南市 小 谷 小 雪

ストープのお湯が急かせるふき掃除  
マスクしてマスクの人と立ち話  
とびきりの春を配って下さいね  
防寒へ猿も団子になっている  
原点にお互いさまを置いておく

紀の川市 宇 野 幹 子

抽象画の中へスリルと紛れこむ  
温室の中饒舌な胡蝶蘭  
杖とする妻へ預ける舌下錠  
自在鍋むかし話がつるされる  
正統派妻はどこにも隙がない

紀の川市 北 山 絹 子

節くれの指が一家を支えてる  
惜別を刻む女の花暦  
立ち読みの味を覚えた塾帰り  
蔵出しの酒に季節の味がある  
父の背の広さは僕の誇りです

田辺市 岡 本 昇

逆境から逃がない足を鍛えてる  
仕付け糸抜いてようやく親離れ  
日日新た明日の風を待っている  
出来合いを食べて帰れと祖母の粥  
怒る泣く拗ねるだんまり妻の乱

鳥取市 両 川 無 限

半鐘を聞くと男の尻が浮く  
三度目でやっと無心になった汗  
花散らす風の正体見てしまう  
本棚は僕の履歴書だと思ふ  
周波数合わなくなった認知症

鳥取市 夏 目 一 粹

金たまる人は感謝の念をもつ  
雪ふれば子どもに戻りだす子ども  
大切に仕舞い忘れていた薬  
両親が逝って寂しさ知りました  
悲しみであいた穴だが埋まらない



鳥取市 春 木 圭一郎

人の価値結果だけでは決められぬ  
人生の荷物一人で背負わない  
価値観はそれぞれ違う方がいい  
世の中のあらゆることはすでにある  
幸せの定義分からぬまま過ぎる

鳥取市 福 西 茶 子

特訓を死ぬほどもやはり下戸  
白無垢を着てから強くなりました  
代替り仏飯きようもパンになる  
鬼は外妻がときどき鬼になる  
野球拳十指に指輪はめていく

鳥取市 奥 谷 彩 子

未知の明日を楽しみに今日生きる  
喜寿傘寿まだまだ此の世七合目  
蒼天にこぶし上げてるつくしの子  
暗夜に光妻と行く花遍路  
不況風前途多難な子の船出

鳥取市 岸 本 宏 章

白い飯食べたら分かる店の味  
居所が不定の虫がよく掘ねる  
筆順のミス黒板に諭される  
国宝が作る壺には値が付かぬ  
長生きの秘訣が言えるまで生きる

鳥取市 岸 本 孝 子

甘酒が上手に出来て亡姑と飲む  
ノーマイクマスクをかけてゴミを出す  
しつかりもほどほど惚けたふりもする  
ずばらだが財布のひもはかたくしめ  
雪国の春は行きつ戻りつ気を持たせ

鳥取市 鈴 木 一 弘

冬鳥も餌がなければ寄りつかず  
お互いが汚れて滅ぶ泥仕合  
嘘ばかり大人が塗った白い壁  
新年の老人ホーム春支度  
しつかりと結んだ口は敵を呑む

鳥取市 有 沢 せつ子

入選になりますように切手貼る  
響き合う仲間が増えてファイト湧く  
気を抜くと背中が丸くなりたがる  
趣味といえ五七五が奥深い  
大雪で休校家の雪を掻く

鳥取市 加 藤 茶 人

相槌を打つだけで良い夫婦仲  
ごますりも四十八手のひとつかも  
ない袖は振れぬ総理を変えたとして  
行間に私の想いロバの耳  
人柄が良い分出世からはずれ

鳥取市 中村 金祥

真人間になるかも知れぬ写経する  
なでしこがつぶされまいか心配だ  
孫が来ぬ午後は寝るしかない夫婦  
助け呼ぶ声も吸い込む豪雪地  
お陽様に一日もらううるう年

鳥取市 池澤 大鯨

時差ボケのような毎日冬籠り  
秒針がなくなてかまわぬくらしする  
螺子を巻く再発進の準備して  
雪掻きは男の仕事逃げられぬ  
ニューハーフ男を忘れた訳じゃない

鳥取市 西川 和子

如月の雪が明るい色で降る  
呆け防止子等にパソコン与えられ  
パソコンの枠にはまって来たはがき  
パソコンのヒントを晩の食卓へ  
雪しんしんパソコンと居て今日が暮れ

鳥取市 前田 楓花

生も死も覚悟を決めて生きる年  
しんみりと闇夜で聴いた別れ唄  
しくじりのハガキにあった福の神  
腹立つが忘れることが一番だ  
ふる里で太って帰りたいと言う

鳥取市 福永 ひかり

仲直りでできず止まっている時計  
消費税の話でもでもでもある  
一票へ先祖返りはしたくない  
選択肢なかった道を越えてきた  
使命感ほどではないがほっとけず

鳥取市 宮脇 道子

永く生き憎い話は記憶する  
八十歳過ぎ良く生きてたと我を誉める  
亡母の年越えられるかと近くなり  
孫達は祖母のふところ当てに来る  
大雪で放射物資を解かしてね

鳥取市 竹口 清信

前向きに善処しますが板に付く  
板付きの馬鹿がここにも一人居る  
沈んだら軽い浮気を考える  
考えるだけで出来ないのが浮気  
川柳でする浮気なら罪は無い

鳥取市 平尾 菜美

穏やかな風と低空飛ぶつもり  
とことんと夢ふくらます風になる  
宝という子らに未来の風光る  
雑踏の風とひたすら男旅  
コンサイス片手に歩く風の中

鳥取市 横田 春 名

因習は絆をつなぐ智恵だった  
干支飾り十二年目はもう会えぬ  
ちよどいい今の私でちよどいい  
外は雪おでんグツグツ笑い合う  
痛くない顔してなめる古い傷

鳥取市 中宇地 秀 四

神よりも医者を頼りにとほとほと  
極楽は人並と言う処世訓  
ひょうたんのくびれ羨むお父さん  
あきらめて居るが何とかして欲しい  
鬼嫁がケチな我が家の護り神

鳥取市 吉田 弘 子

節分へ冬の終止符など打てぬ  
気分だけ切り替える冬から春へ  
実りとはこんなもんかと七十路坂  
以下同文あたりが丁度性に合う  
主婦意識包丁持つ手慎重に

鳥取市 池原 天 馬

降りつづく雪取り除く俺虚無になる  
どっぷりと余事につかて日を暮らす  
過疎かなし近くの街も本屋閉ず  
いのちのくすりよく忘れるが生きてます  
悪いくせ国会ニユーステレビ切る

鳥取市 高 浜 勇

赤ワイン飲んで心は冬ごもり  
ウミネコの意地悪そうな目がきらい  
ありがたみずしりとひびく妻の留守  
こうこうと明かりをつけてひとりの夜  
素で勝負できない今日も化粧する

鳥取市 深 澤 千 恵 子

これからはスローライフでいい余生  
無意識に冷たい空気避けている  
年金をがたがたにする長寿国  
ぶかぶかがちよつとかわいい一年生  
絵手紙の奥に人柄みえてくる

倉吉市 山 中 康 子

献立てが調いやつと清書する  
よい返事待っていますと娘を思い  
序の口でうろうろしてる二十年  
春になり娘と会える日をこころ待ち  
まだ欲があるのにするり代替わり

倉吉市 野 口 節 子

雪が舞う眺めるだけの花として  
貧富の差見事に消した銀世界  
寒に咲く花に根性教えられ  
日めくりの音が次第と早くなり  
脳のしわ五七五に支えられ

倉吉市 猪川 由美子

3・11ずっと続くよ大仕事  
青天井ゴールも見えぬ消費税  
愚直にも節電し過ぎ風邪を引く  
刑期終えてすぐに新党立ち上げる  
政権迷走暗雲垂れに胃が痛む

倉吉市 山本 玲子

携帯の操作にエネルギー不足  
空き屋敷蔵がぼつんと残される  
スーパで赤飯買って誕生日  
呼び出され安定剤を飲んでいく  
気短とのんびりやとの組み合わせ

米子市 後藤 美恵子

誕生月逃げる二月にブラスワン  
立春に暮らしを変える窓あける  
上品にくしゃみするのは難しい  
丸齧りのりんごみつけた歯の病  
被曝地の雪は白いか気にかかる

米子市 中原 章子

必需品備蓄が無いと落ち着かぬ  
誕生日七十代が果ててゆく  
あなたとで良かった長寿共に生き  
同じ部屋違うこととして距離を置く  
目指そうと思うだけでも力湧く

米子市 成田 公一

細切れの夢を重ねる寒い朝  
催促に来て家主まだ呆けてない  
初釜という昼の酒堂々と  
正月のモードのままにもう二月  
どこにあると知らず信じる星占い

鳥取県 石谷 美恵子

生きている幸せ寒のうまい水  
不況とは思えぬ人出蟹の市  
行く雲に託すわたしの片想い  
一流のバカを演じている器  
神童も小町もいまは認知症

鳥取県 竹信 照彦

車道だけ除雪歩道は自己負担  
荒れている田畑を隠す白い雪  
つらに見るたびに凶器に見えてくる  
まだ元氣除雪作業が出来るから  
ドル安も止めてくれない原油高

鳥取県 山本 正光

寒かぜに聞きたいことのあるつぼみ  
五分咲きの桜素敵な出会い待つ  
大山で地ビール飲む日が待ちどおし  
好きですと言われたことの無い自慢  
親よりも確かに越えた酒の量

鳥取県 斉尾 くにこ

能力があるからできる能天気  
おじぎしたままで眠っているブーツ  
蟹気楼見ていた鯨砂の上  
しあわせのサイズが合うか試着する  
春の音ひとつはおばる金平糖

鳥取県 西谷 悦子

未知の橋渡る気力を持ち続け  
母の道紆余曲折がまだ続く  
蔓のようもつれながらも生きている  
第二幕名刺は持たず勝負する  
歳重ねてもなかなか丸い石なれず

鳥取県 岩崎 和子

回る地球時々揺れて驚かす  
お洒落して何が悪いの八十路でも  
六十年夫好みの化粧する  
東京に美の研究の十日間  
免許頂き都会の街を歩いたね

鳥取県 深田 倶久

春祭り合格祈願の絵馬と会う  
新人生一寸気になる袖の丈  
談笑の炬燵片づけ春陽呼ぶ  
あれこれに「春」を名付けて忙しい  
朝ドラが今日の予定を変えさせる

鳥取県 鳥越 鬼一

寒中はおくやみ欄がにぎやか  
長い冬犬と暮らせば暖かい  
春よ来い降り積む雪はもういらぬ  
日脚のび梅のつばみも赤みさす  
腕を組み熟考してるふりをする

鳥取県 佐伯 やえ

春や春 ひ孫に夢のランドセル  
春風と手を組み朝の散歩する  
くさらぬように脳みそしかとまぜておく  
結んでひらいて炎えて花子は嫁にいく  
いつか行く道へきれいな花植える

鳥取県 山下 節子

好き嫌い食生活にあるリスク  
種あかしされて納得する手品  
リスクだけ考えてたら進めない  
過疎になり散髪屋さん集会所  
現代っ子床屋はいやと美容院

鳥取県 細田 裕花

シャボン玉春の匂いの方へ飛ぶ  
言い訳の明るい声につい負ける  
雪うらみ非力をうらみ雪をかく  
お薬で治る病氣と聞き笑う  
自動便座に洗脳されてゆく私

鳥取県 松川行男

ベダル踏む健康器具にもう飽きた

領ずかぬ妻へ第二の案を出す

その日まで妻のお世話を俺もやる

偉くなつたな嫁と孫等が指図する

たわいない話に酒も底をつく

松江市 松本文子

ほどほどが分らず背のびしてしまふ

年賀状並べるご恩返せたか

泣きごと愚痴も言わない人が好き

ゆつくり来いと亡夫からメール来る

霰バラバラ私の罪はまだ消えぬ

松江市 三島 崧 丘

啓蟄や春がくすぐる足の裏

敗者復活谷の底から這い上がる

雨だれの音がロダンへ誘い込む

政治家のための政治はもう要らぬ

筋書きのない一日へ髭を剃る

松江市 石橋 芳山

どうしたらいいのか怒り止まらない

放浪を楽しむように知らぬ街

栓抜いて世間知らずの難破船

ズングリのダルマと同じなんだろう

調子いい女は笑うのが上手い

松江市 川本 畔

淋しさに冬の風鈴つりました

北々西吹いてよいかと冬風鈴

空つ風庭の枯木が愚痴っぽい

それならばイメージの花咲かせましょ

風花の一つ二つが舞い降りる

松江市 錦 織 禮 子

くすぐって見よう吉報明かすかも

返信ハガキ絵筆の趣味も垣間見え

それなりを通過七十路の顔写真

サボテンもストーブ前で暖を取る

羽子板を三つ並べた三姉妹

松江市 小川 注 湖

宍道湖の夕日松江の顔自慢

まだ熱い未練くすぶる愛だった

ぎゅっと手を握った力胸騒ぎ

肩に手をそっとしておく涙止む

肩に手をこうしていてもいいですか

松江市 松本 知恵子

なよなよの女信念通してる

成り行きといつて諦めつけている

紅梅の明かり希望と眺めてる

三代目産みの苦しみ知らぬまま

雪道を小学生の澄んだ声

出雲市 伊藤 玲子

節の傷やつと癒えたらもう傘寿  
思い出を喋りはじめた竹の雪  
肩寄せて悲しみ分かつ友の葬  
ざわざわを鎮めてくれた鐘一打  
太陽の呪文が届き芽が伸びる

出雲市 石倉 美佐子

六十年立つても実家の流が出る  
長男に理屈いっぱい叱られる  
腰紐が短くなって結べない  
あーあーと人に知られぬ欠伸する  
とんがった頬つべで妻は意志表示

出雲市 多久和 敬子

雑草が芽吹く私も動き出す  
甘やかし人も草木も芽を出さぬ  
待って不明日必ず芽吹くから  
輪の中でじっくり自分確かめる  
節分だ心の鬼も追い払う

出雲市 小白金 房子

箒の目神と対話の朝を掃く  
名刀の炎へ魂叩きこむ  
ひと言の痛さも耐えて和を保つ  
迷うてはならぬ心の芯をもつ  
いい目覚め生きる証の善をつむ

出雲市 富田 蘭水

せかす時計明日があるから大丈夫  
親からの頂く足で頑張ろう  
方言の値うち素顔を盛りあげる  
物忘れいらいらするも出て来ない  
大雪が人間よりも力出す

出雲市 岸 桂子

残り少ない修正液だ大切に  
良心に時々肩を叩かれる  
喜寿すぎてからの迷いは捨てやすい  
一日が過ぎるいつもの水の音  
切り捨てたはずの昔が流れつく

島根県 伊藤 寿美

松籟の丘を歩けば川柳碑  
結局は独りになった森明かり  
死生観川の流れはわたしかも  
だつてさでもさ帰省した孫が言う  
維新の窓開くか政界喧し

美作市 福原 悦子

偶然な答えに少し裏がある  
三猿を決めて明るい老母です  
相手の価値は掴めぬままで生きている  
冬を越す草の強さよ芯がある  
休み休み九十九折の花の道

美作市 大石 あすなろ

お茶うけにまた度忘れの話聞く  
百の愚痴夫は黙って受け止める  
相合い傘雲になって来る噂  
紆余曲折スイッチバックして生きる  
ジंकスを少し担いで運を呼ぶ

美作市 山本 玉恵

生きているあかしにそつと紅を引く  
地球自転起点は問うて下さるな  
煩惱を抱けば西へにしへと雲の道  
ニートではなかなか景気付いて来ぬ  
晩節の眼鏡がくもる空の色

竹原市 石原 淑子

ボランティア働く手だと褒められた  
名残り雪のせて梅の香馥郁と  
ひらいたひらいた命キラキラ蝶の羽  
どの花も何の子も光る自分彩  
誕生日祝ってくれる夫と居る

府中市 岩本 雅代

贅沢と知りつつ寿司の丸かじり  
同窓生温い握手は友絆  
昭和生まれ希望は捨てぬ百までも  
節分祭雪のお庭で鬼を追ひ  
温かい言葉が欲しい雪の中

府中市 藤岡 ヒデコ

雪の日にはしゃぐ子供の居なくなり  
ストーブの前で無沙汰の長電話  
寒波にも負けぬ団塊エネルギー  
難聴の兆テレビの音で知る  
一歩ずつ気を付けている下り坂

宇部市 平田 実男

過労死へなんと冷たい社の幹部  
警察へ警察がいる世を嘆く  
離婚した勇氣離婚をせぬ勇氣  
子や孫のためならいとわれない火の粉  
介護だと思わせぬよう手を繋ぐ

東かがわ市 清川 玲子

龍のひげさわってみたい好奇心  
道祖神の肩に新雪降りそそぎ  
逆境も手抜きはせずに石を積む  
端座してしつかり矜持保つペン  
ブランドはもういいユニクロ似合ってる

東かがわ市 川崎 ひかり

一本の道で始まる父の地図  
ヒト科だけ欲の衣に着ぶくれる  
天国はいいのか誰も帰らない  
釣り糸を垂れて明日を模索する  
じいちゃんの冬の定番頬かむり



西予市 黒田茂代

ふたありの炬燵おでんが温かい  
目的地に着くとわたしの旅晴れる  
冷たくなるんだ死ぬるっていう事は  
九十三歳立派だったよおばあちゃん  
極楽へ向かう百花の衣装着て

松山市 古手川 光

ブータンに教わる足るを知る暮らし  
忍耐を例えて言えば冬木立  
宿木を眺める生きる術思う  
荒っぽい言葉やさしいことを言う  
生真面目がびつくりさせた四月馬鹿

松山市 高橋宏臣

夢いくつ紙風船を遊ばせる  
生き様の残夢のカケラ万華鏡  
夕焼け小焼け荒野を行くのは誰  
マルクスもルソーも読まず変換キー  
闇冴えてマルサス論者一人増え

高知県 小澤幸泉

再任用の知らせに酔える早春賦  
昼酒に恋しいひとを浮かべ見る  
利用価値まだありそうな電話口  
人目にはつかぬ善行花が咲き  
冬枯れの街に孤独を呼びつづけ

# 誌上競詠 川柳「咲くやこの花賞」作品募集

## 題と選者

|      |        |    |     |   |          |
|------|--------|----|-----|---|----------|
| 第1回  | 「始まる」  | 森中 | 恵美子 | 選 | スミ       |
| 第2回  | 「食」    | 井上 | 一 簡 | 選 | スミ       |
| 第3回  | 「衣」    | 赤松 | ますみ | 選 | 4月20日締切  |
| 第4回  | 「せめて」  | 嶋澤 | 喜八郎 | 選 | 5月20日締切  |
| 第5回  | 「ほぐす」  | 前年 | 優勝者 | 選 | 6月20日締切  |
| 第6回  | 「太陽」   | 木本 | 朱 夏 | 選 | 7月20日締切  |
| 第7回  | 「怪しい」  | 阪本 | 高 士 | 選 | 8月20日締切  |
| 第8回  | 「カーブ」  | 筒井 | 祥 文 | 選 | 9月20日締切  |
| 第9回  | 「ぴったり」 | 板野 | 美 子 | 選 | 10月20日締切 |
| 第10回 | 「生きる」  | 奥山 | 晴 生 | 選 | 11月20日締切 |
| 第11回 | 「凄 い」  | 天根 | 夢 草 | 選 | 12月20日締切 |
| 第12回 | 「世界」   | 新家 | 完 司 | 選 | 1月20日締切  |

投句料(掲載誌料を含む)一年分 2000円(同人・誌友は1000円)

送付先 〒572-2844 寝屋川市太秦緑が丘11-8

川柳瓦版の会 TEL・FAX 072-821-3641

発車ベル約束の友まだ来ない  
外出も妻の車に身を任せ  
迷路めくホテルの部屋に寝る不安  
訓練に本気を問われ取り乱す  
適役の妻町内の顔になる

福岡県 林

さだき

# 川柳塔の

## 川柳讃歌

(88)

木津川 計

### 恋をしているから雨の運動場

葉原 道夫

駆け出しの女優キャシーと恋に落ちた俳優のドン(ジン・ケリー)は、彼女とキスを交わして別れたが幸せ一杯だ。折しもの雨に構わず、ずぶ濡れになってタップを踏み、唄いながら舗道を軽快に歩く、映画「雨に唄えば」の名シーンである。In happy again! In singin' and dancin' in the rain!

人知れず恋をする道夫さんが、悦びの余り雨の運動場を……、ではまさかあるまい。そんな幸せな若者を雨のグラウンドに見たのだ。

### 化粧して新聞取りに行くくらし

田中 章子

大新聞のある支局長が嘆いた。「マンション入口のロックが広がり、各戸配達が出来んようになると、また部数が減るのです」と。他人事に聞いていたが、章子さんがそんな難儀を川柳に読んで防犯時代の不自由を表沙汰に

したのである。

朝早く化粧して下まで取りに降りる不便が腹立たしい。が、新聞は止められない。新聞社がつぶれると、コミュニティも崩壊する。アメリカに広がる新たな困難である。

### 上げ底になっているかも知れぬ愛

柏原 夕胡

戦後の観光地には上げ底の土産が当り前で、純真な修学旅行生らがよく騙され、世の世知辛さを知った。そんな土産品が駆逐されたのは衣食足りて礼節が行き渡った余禄だったが、人間の欲望は肥大化するばかりで已むことがない。詐欺師の戦場は血まみれの戦利品でいまでも溢れている。

上げ底の愛もあると夕胡さんは言う。愛が惜しみなく奪うにせよ与えるにせよ、その愛が演出すると、その戦場もまた悲劇を生む。

### 顔見せに来て下さいと医者言う

石原 歳子

クリニクも客商売である。リピーターがいなければつづれる。さりながら、「毎度おおきに」とは言えない。「またのお越しをお待ちしています」と言えば患者といえども怒る。だからこの医者が生み出した名文句だ。

曖昧な言い方を日本人は好む。往來で会った人に「どちらへ」「ちよっとそこまで」「そら結構でんなあ」。この意味不明がいい。す

べてが本気では血の雨が降ろう。われらは伝統的におぼろの美学をよしとしてきたのだ。

### 冷静になると大阪弁になる

谷口 義

帰国子女は寝言を外国語で言う。われを忘れても外国語になる。日本語で喋るのは冷静なときだ。だから「冷静になると大阪弁になる」日本人は大阪の「異邦人」である。すると、冷静ならざる「異邦人」は何語で話しているのか、問うていくと複雑になる。

こういうことだろう。興奮するとそれぞれが母語をぶつつけ合う。だから冷静になり、「……とちやいまつか」「そうだつしゃるか」「おもしろい大阪弁が平和的解決に向ける。

### わたくしを忘れていない請求書

岸 桂子

始末書が届けばお仕舞だが、請求書を送ってきたから「へえー、まだわたしに未練があるの?」と桂子さんは驚く。それにしても依頼書の筈が請求書の厚かましさに腹が立つ。すると昔の歌が思い出された。「捨てちゃえ捨てちゃえ、どうせ捨てた恋だもの」

「男の顔は履歴書だが、女の顔は請求書である」(藤本義二)を借りれば、請求書に請求書の届く摩訶不思議だが、どうせ狐と狸の化かし合いじゃない、と思ったりして。

(「上方芸能」誌発行人)

# 新川柳鑑賞 (2)

麻生 路郎

若いのに負けずこつちも妻を撮り

(没食子)

近ごろは何処へ出かけても、若い男女が、それは夫婦であろうと、愛人同士であろうとお互いにシャッターを切っているほ、えましの情景に接するものである。この句は既に人生の半ばを過ぎた夫婦が旅に出ての「コマで」「こつちも妻を撮り」と若やいだ気分を出したと云うのである。面白いネライである。

ツンとした妻の背中が岩に見え

(芳仙)

こんな句は解説したんでは味が抜けてしまう。ジツと句の内容をみつめていると、何んとかなくユーモラスな感じが湧いてはおえましさを感じられる句なのである。「岩に見え」は誇張法であるが、弱点を持った夫には確かに岩に見えて来るものであろう。

一生をオイコラハイで終りたる

(夜潮)

女の一生をこんなに簡単に諷した句を知らない。女の無自覚、女性の悲劇がいつまで続くことか、測り知れぬものがある。

「オイコラハイで」と

具体的な表現ですべてをうなずかせた手腕は偉とすべきである。

麻雀とあたしとどつちなのあんた

(方大)

麻雀は細君にとつて苦手である。負けたと云つては癪癪玉を破裂させるし、出掛けたりいつ帰ってくるか判らないし、たまたま帰ると質ぐさを持つて行くし、会社は休み通だし、家庭は火の車である。「麻雀とあたしとどつちなの」と悲鳴をあげざるを得ないのである。話し言葉で実に巧みに鬱屈気を出した句である。

迷い子札妻は俺にもつけたがり

(生々庵)

今そこにいたかと思うともういない。出たらいっ帰つて来るのか判らない。何処にいるとも云わないで二日も三日も泊つて来る。こんな夫はザラにある。迷い子の札をつけたがるのもムリはない。妻の心境をスバリと詠んだ句である。

へそくりの言譯妻は聞いています

(おさむ)

この句を一読すると従来のへそくりと云うものの考え方では「へそくりの言訳夫聞いていず」の誤植ではないかと思えるが、決して決して誤植ではなく「……言訳妻は聞いていず」なのである。へそくりといえは一豊の妻の昔から妻のものであった。あてがわれた世帯の中から、ひそかに生み出すものであった。少々凡倉であっても一家の経済力は夫に属して、妻は僅にお台所の小遣いがまかされる程度に過ぎなかつたからである。ところが敗戦後、サラリーマンなどの家庭経済では男と女の立場が逆転した。男はサラリーのすべてを妻の前に投げ出してお小遣い生活に甘んじ一家のやり繰算段を妻の手にゆだねるようになった。サラリーでは到底妻子の要求のすべてに応じかねることを知った夫のズルサからの逃げ道に外ならなかつた。しかし、それでは自由にビール一杯のめぬので働蜂としての夫の立つ瀬がない。そこで月給が上つても素知らぬ顔で男のへそくりがはじまつたのである。この句を読むと時代は遷るの感が深い。

(新川柳鑑賞は「川柳雑誌」に昭和28年10月号から昭和34年5月号まで連載。原文のまま)

# 自選集

小島蘭幸

バレンタインチョコが嬉しい歳になる  
ネクタイをキリリ勇氣になつて  
ロツク流して充電中という作務衣  
紳士からええおっさんになる作務衣  
すってんころりん数珠が守ってくれたのか

斉藤 効

はじまりはこんな小さな種子でした  
校門で笑顔をくれる雪だるま  
蜜りんご好きだったなあ仏様  
いい汗だしあわせ色をしています  
分け合つた苗あちこちで蕾付け

塩満 敏

綱の意地把瑠都関には負けません  
四月には愛しい孫のお嫁入り  
今年こそ鶴彬忌を作る年  
妻の庭肥料たんと撒きました  
杖無しでアンヨの稽古しています

新家完司

葬式とお見舞い雪は降り止まず  
うぬぼれはボケの始まり辞書を繰る  
最強の敵は朽ちゆく我が身体  
休む島あるのだろうか渡り鳥  
ともだちを受ける航空母艦たれ

恒松町紅

爺さんが何を言うかと笑われる  
出る幕はないが老いても背は伸ばす  
晩酌がいける幸せ明日がある  
早口の電話苦手な老いの耳  
呆けてない筈だが知恵が浮かばない

津守柳伸

地震大雪春は名のみの助け合い  
慰めも言葉にならぬ癌告知  
北北西縁起かつぎの丸かぶり  
小食のみじめをもちにバイキング  
特訓で携帯クリアさせられる

遠山可住

九ちゃんひとりぼっちの夜を歌う  
旅好きの妻が還らぬ旅に出る  
米寿への体操椅子に腰かけて  
書き馴れた字へペン先がふと迷い  
お化粧の時間は要らぬ野良の顔

都 倉 求 芽

西高東低みな足ばやの節分会  
靴を脱ぐころには感情線ゆるむ  
聴診器たまにはパソコン見ずに褒め  
ペランダの梅も今年はすくんでる  
午後のお茶軌道修正までできる

土 橋 螢

真珠湾七十回忌に黙祷  
八方美人だったなあ茜雲  
いい春を迎えてほしい日本の子  
和服着た男と女初詣  
わたくしに光と陰の道しるべ

中 原 諷 人

花の香の賑やかなりに祭り月  
龍笛に箏篳と笙おごそかに  
神の御幸に隨身と鷹匠も  
大祭の山車引つ張るにUターン  
雪崩ては白い綿帽子が消える

西 出 楓 楽

ものの見事にわが体型はラ・フランス  
幸福度自分で上げる他はなし  
コンビニのおでん捨てたものじゃない  
糊代を多目にとっておく冬日  
六人目の孫はまぼろし冬の底

仁 部 四 郎

妻の留守幸か不幸か雨になる  
妻の留守健康雑誌読み返す  
お茶の葉はつぎたせばする妻の留守  
応分のことと読書の妻の留守  
吃水線守って酌んだ妻の留守

林 瑞 枝

壁に向きひとりの驕り彫らんかな  
他人さまの言葉を生きる妙薬に  
枕から祭り御輿が出て行つた  
迂闊には出れぬ優しい傘にいる  
生き抜いて恰幅のいい昭和っ子

前 たもつ

礼拝を優先させて迷いなし  
天変地変神の所在を問うヒト科  
見えないもの見えて信仰深くなり  
手術如き何狼狽えるゲッセマネ  
再手術みこころなりと心決め

政 岡 未延子

割れ目繋いで健康診断受けている  
黄信号進むべきだと心得る  
神様に頼む受験校三つ  
わたくしを鳴らしてくれる日々の水  
断捨離に亡母の着物がひっかかる

三宅保州

たんこぶを作った子ども見かけない  
お父さんに似てきたねえとよく言われ  
迷った時は着てゆくものでまた迷い  
ミリデシリットルそんなの酒じゃねえ  
話せないしこりが残る喉仏

宮西弥生

何事もなかったように溶けた雪  
老いという字に重ね着が美しい  
菜の花の黄色に強くする列島  
不揃えの知恵も大きい縁の下  
見たくないものまで見せる春の風

ものごころ

八木千代

ものごころついた椿の花の下  
椿なら咲けば落ちるはあたりまえ  
得心で落ちる出来るだけ咲いて  
蛇穴のとなりは御免アミダサマ  
今は椿に守られている椿守

両川洋々

もう泣かぬ女になって来た妻よ  
嘘一つ隠すところない丸裸  
神さまの神通力に歯が立たぬ  
汗をかけ稲はその汗裏切らぬ  
ヘルパーの笑顔魔法のように効く

板尾岳人

ユーモアのわかる猫だが笑わない  
卵巣を銜えてカラス巢に戻る  
米寿には三千日もある未来  
大宇宙象の背中にある砂漠  
孫悟空らしき墨絵にある漫画

奥田みつ子

いつの間に年重ねたか傘寿とや  
傘寿なお挑戦できるものがある  
生かされて楽しい夢も見ています  
滝凍ることたつで見てる造型美  
雲走る雲も私もボヘミアン

河井庸佑

逆境へ流れが変わるまで耐える  
遠回り意外な人に巡り会う  
親友の計に思わず絶句した電話  
リハビリの成果にやる気弾み付く  
今頃になって過保護を悔いる親

川上大輪

洗っても私は白くなりません  
現在も過去も未来もおれは俺  
指紋だけ残しこっそり帰ります  
夢に出るうちは成仏していい  
リモコンをいつも持つてる独裁者

第13回 柳都岡山の会川柳の集いご案内

日時 5月13日(日)  
会場 倉敷国際ホテル  
会費 2000円(記念品・発表誌呈)  
宿題 各題2句 「席題なし」

|        |       |   |
|--------|-------|---|
| 「ぶらぶら」 | 野島 全  | 選 |
| 「つぶやき」 | 岩本 笑子 | 選 |
| 「ほどほど」 | 小野真備雄 | 選 |
| 「うきうき」 | 西原 知里 | 選 |
| 「雑 詠」  | 大野 風柳 | 選 |

投句締切 11時 開会 13時

川柳トーク

柳都川柳社主幹 大野 風柳

連絡先

〒710-0055 倉敷市阿知1丁目14-13  
倉敷ファッションカレッジ内(山口貴子)  
TEL 086-422-8866  
FAX 086-422-8867

断崖に生きてる松の底力  
芋ヅルの味も知ってる戦中派(97歳)  
妻の留守好きなビールに手が伸びる  
世界不況時どき止まる古時計  
地球儀を洗う恵みの雨が降る  
春を待つ希望大きいやせ蛙  
日溜りで剃る気になった無精髭  
狒犬も吠えなくなった闇の月  
ときどきは火の粉も降ってくる余生  
米寿来て長老格の席につき

小西雄々

木村あきら

温故知新

『清水白柳遺句集』より

友釣りの鮎人間に似ておかし  
アイデアの通りに行けば蔵が建ち  
学歴で飯が食えないことを知り  
ペンキ塗立桜頓着なしに散る  
都会の子猫の砂まで買ってくる  
海老のひげ画家のタッチで生きてくる  
戸車の錆びついたよな老夫婦  
片恋もロマンズとして自伝書く  
許してもよさそうだがという他人  
天皇は無欲と見える手を振られ  
レール炎えて午後の電車のあえぎけり  
おおそうかチヲホラ国旗立つ日なり  
住宅も文化といえは弱々し  
人類に親近感を持った猿  
消印が欲しくエハガキ後に着く  
バス降りてからの人出に呆れ果て  
空白を埋める近道考える  
看板で古い二階をかくすなり

# 水煙砂

## 川上大輪選

岡山市 工藤 千代子

相槌がずれて閉まらない引き出し  
笑わないピエロに古典落語など  
ほろくそに言うて言われて雨期乾期  
寄せ植えにされて微熱のつづく薔薇  
踊り場に折れた翼を積み重ね  
輪を抜けて今宵は月に逢いにゆく

河内長野市 針生 和代

身の内で鬼と仏がせめぎ合う  
夢がまだ一杯あつて握るペン  
人間を庇いきれなくなる地球  
なるようになって生きてる老いひと日  
得をした気分になった還付金  
一善を積んで明日を出迎える

岡山市 藤成 操江

手鏡で今の私を確かめる  
頬杖の下で悩んでいるノート  
いい事もあった小出しにして生きる

雑草が一番先に冬を出る

葉桜になったら答え出すつもり  
問診表嘘を書きたい箇所がある

三田市 上田 ひとみ

あんなによく泣く君がお嫁さん  
平気なふりしているけど父さんは  
父さんと母さんずっとここに居る  
ああ素敵な声で話す人なんだ  
やさしいお茶入れてあげて下さいね  
あれこれと描いてごらん未来地図

篠山市 酒井 真由

眠りからさめぬ薬が欲しいとき  
百薬の長にもあった副作用  
石段の途中で迷いからさめる  
原発の闇深くなる雪はげし  
失った宝のなんと多いこと  
伸びをして猫が炬燵を出て行つた



豊橋市 藤田 千休

バスツアー喋り疲れて食べ疲れ  
忘却とせめぎあつてゐる記憶力  
体力を温存したいギリギリス  
過不足の言葉がおこしだす摩擦  
首かしげ不承不承の認印  
コピーからそっくりさんがコンニチワ

雲南市 武島 ちよえ

故郷のその後気になり風に聞く  
落のとうみたいな方に会いました  
被災者を思う三食頂いて  
なぞなぞで私の脳を試される  
これ以上買えぬと財布口喋む  
潮時を逃し渦から出られない

松江市 山根 邦代

もう着ない着物をハサミ迷いだす  
節分の鬼は心の中にすむ  
こたつ板今日のお茶菓子待っている  
比べてはならぬと思うても比べ  
ご褒美を自分におくるチョコ選び  
友からの便りに福のおすそわけ

神戸市 玄 番 美恵子

勢いを少し落せば合う歩幅  
巢立つ鳥思いのままに飛ぶがよい  
閃きの句をメモしている枕元

足腰に伺いたてる旅プラン  
百歳の詩集に見えた立志伝  
ためらった句が気にかかる待ち時間

河内長野市 梶原 弘光

回る寿司で酒酌み交わす午後三時  
地図にない道を歩いた創業者  
同意書にサインしあとは鯉になる  
亡き友のアドレス消して暫し鬱  
物好きと言われ決心揺らぎ出す  
菜園の都合で決める鍋パーティー

神戸市 木村 忠義

大樹には神様が居るように見え  
整頓してあれやこれやが見当たらぬ  
ハウス栽培は過保護のように見え  
事あるごとに妻へ感謝の増す老後  
うれしいと土産売り場へ足が向く  
救急車のお世話になったとはシヨック

八幡市 今井 万紗子

悔し涙振り切り明日に逢いに行く  
背を押され妻からもらう太鼓判  
差しあたり三文判で生きてます  
時々アクセル踏んで雲隠れ  
虹の橋あの指切りを忘れない  
あくせくは止そう十分生きたから

弘前市 高橋 洋子

野良猫と目と目が合ってそれが縁  
手軽さの味占めました無洗米  
その内にそのうちにねともう一年  
代変わりしたのに親が光り過ぎ  
耳鳴りを暫し忘れたジャズライブ

岐阜市 平野 あずま

成人式晴れて孫とも盃交わす  
冬木に芽春は出番を待っている  
老人会昭和の歌が咲き誇る  
喋ることないが居ないと困る妻  
風評の除染を願う千枚田

江南市 脇田 雅美

日本の義理人情は宝物  
ストレスにプラス思考で付き合おう  
牛丼にデフレの味を噛みしめる  
下駄箱に足で稼いだ靴並ぶ  
ミスマッチ一枚岩が崩れだす

大阪市 高杉 力

初孫の写メを見せ合う同窓会  
激安のスタンド捜し遠まわり  
売れているビールが分かるゴミ出し日  
新曲と言ってSMAPまだ歌い  
居酒屋で隣り合わせてからの仲

大阪市 安藤 なつこ

気がつけば地図が違ってきたふたり  
持っている地図になかったこんな道  
お腹空きすぎると何も感じない  
先に礼言われ文句をいいそびれ  
忙しいああ忙しいと楽しそう

大阪市 太田 としお

失策を歳の所為にはしてならぬ  
誰がした腰は曲るし髪白し  
スピード感あつて橋下すきやねん  
お陰さま地下鉄只にして呉れた  
元旦はやはり普通の日ではない

大阪市 松田 聡

お昼ときパパはすき家でママホテル  
美人でもいけずな人はごめんです  
深呼吸すれば心が晴れてくる  
野の花がいとしく見える日のゆとり  
危機感が相当足りぬ日本丸

池田市 上山 堅坊

筋書きはないが本気で生きる日日  
全員がつぶやききつと国変わる  
風向きが変わって腰を低うする  
鼻声の毒に痺れる心地よさ  
一日の錆を取ってる酒二合

泉大津市 助川 和美

晴れ着まで米に変えてた敗戦後

コーヒーで四方山語終らない

セピア色日記あなたのことばかり

やせないとあんためんどうみちやれへん

低姿勢これが最後と借りにくる

河内長野市 木見谷 孝代

災害が続き軋んでいる日本

目を見れば口約束も裏切れぬ

骨おってやった仕事の跡がある

満ち足りた中で気骨は育たない

背を曲げて歩く姿が母に似る

河内長野市 八木 加修子

悪友にポツリともらす愚痴ひとつ

携帯にやつと慣れたら次スマホ

意地悪な心の置き場もてあます

世辞言われ鼻がびくびく上を向く

デパ地下をいきいき泳ぐ年金日

河内長野市 谷 久美子

だからだと私にもある休肝日

日替りのメニユーでこなす家事娯楽

泣き笑い越えた勳章皺白髪

句読点打つとはつきり出る答

耳打ちをすると野心の根が生える

岸和田市 中岡 香代

我家にはしゃべるボタンが多すぎる

花びらも一緒に参る墓参り

新品のネクタイが持つ入社式

理屈言う子供の口が憎らしい

母の中菩薩とエンマ二人住み

寝屋川市 岡本 勲

釣り上手釣られ上手で仲がいい

十年日記白寿を目ざし買いにいく

定年後のんびりぐせが板につき

すみませんその一言で座が和み

スタートの父の一言背中押す

羽曳野市 磯本 洋一

今日もまた結論のない議論する

真っ白で恥じらい見せぬシクラメン

目覚しが憎まれっ子の寒い朝

雪おろしテレビながらに力入る

知己来たり地酒に酔いて訛り出す

大阪府 畑中 節子

霜柱土持ち上げてさわぐ庭

頼られる事も楽しく生きがいに

年あらた傘寿の翼塗り替える

何気ない自由五体に日々感謝

太陽が元氣出せよと誘い出す

大阪府 神野 千恵子

三田市 尾崎 一子

何もない一日なのにすぐ暮れる  
携帯を持たないだけで変わり者  
物好きだなどと侮ってはならぬ  
一本のクギを頑固にしてる鏝  
ちぐはぐな話が脳を刺激する

神戸市 新保 登美子

三田市 雑賀 一泉

三歩前歩くベツトについて行く  
るるんと飛び越えて行く水たまり  
ひだまりで昼寝をしてる雪だるま  
隅っこが居心地良いと親譲り  
ひと呼吸置いて元気という返事

川西市 山口 不動

宝塚市 丸山 孔一

生き様を全部残して旅に出る  
貯金より早くたまるよ薬殻  
夜泣きした息子が夜泣きされている  
豪語した夜の帝王皺だらけ  
老いらくの恋の残り火まだ消えず

篠山市 藤井 美智子

西宮市 株元 玲子

三日月が笑顔に見える散歩道  
責任の重さとストレス比例して  
人は人自分は自分比べない  
ばあちゃんを越したと孫が横に立ち  
きれいには欲ばり老いても女です

気が小さくみえて男は男なり  
齢なれど一汁三菜ほしい欲  
しつかりせよ昇る朝日が胸をつく  
浄土にも険しい道のあるらしい  
たつぷりと満腹にして終の旅  
会うまでは期待と不安同居する  
お宝に親にもらったDNA  
早い話原発もはや粗大ゴミ  
来年こそ師走になると出る言葉  
過去は無理でも未来なら変えられる  
神仏要る時にだけ呼びに行き  
おい女房長生きしては本心か  
死んだ後何言われても構やせん  
断捨離と覚悟しつつもまた仕舞い  
同窓会孫と病氣と年金と

継続の馬力だんだん弱くなり  
止めたらあかんでとうれしい一言  
ちゃんと使えよとパソコンが嘆く  
広告の真白き裏がペン誘う  
呆け予防の話上の空で聞く

西宮市 泉水 冴子

かじかんだ手からお箸が逃げてゆく  
五七五を考えながら歯の治療  
着脹れて少し暖房費を浮かす  
恍惚になれば神さま頼みます  
にこにここと訳知り顔が寄ってくる

奈良市 大久保 真澄

君といえることも宇宙の神秘かも  
捨てねばと思いい何にも捨てられず  
おばちゃんがチラシ片手に闊歩する  
ジタバタと生きて汗かく恥もかく  
ウインドーの前だけピンとする背筋

和歌山県 小川 イセ

やんわりの笑顔の奥にある闘志  
八十路越え兄弟会の出来る幸  
ささやかな思いを落とす募金箱  
千羽鶴折る指先に折り込め  
軽い気で話して友を悩ませる

和歌山県 坂部 かずみ

教科書のようにテレビを開けている  
バレンタイン値札ばかりが目止まる  
応用が利かなくなつてガンコ者  
ウォーキング耐震補強する身体  
生きるとはピリッと効いたキムチ鍋

和歌山県 磯部 義雄

薬掴む思いで買った宝くじ  
無口だが酒が入るとよく喋る  
性格が良いのか吠えぬ役立たず  
太っ腹夫の財布いつも空  
会葬の多さ人柄惚ばれる

紀の川市 楠原 富子

地球儀に安心できる国がない  
跡形もなく消したい傷が多すぎる  
幸せを探していつも自分流  
柔らかい言葉に落し穴がある  
耳栓をはずしてやつと輪にとける

紀の川市 辻内 次根

物忘れみんな言ってるから良いか  
休めないので手洗いと嗽する  
期限切ればかりがたまるとり者  
わたくしになつて赤字の出る家計  
楽になる薬らしいが笑えない

和歌山県 森下 よりこ

お隣もそのおとなりも介護車が  
母の歳越えてまだまだ生きてゆく  
幻想的な空間にいる雪になる  
氷張るそれでも新芽動いてる  
ちよつとした段差で恐ろしいことに

鳥取市 松原ひとみ

義理チョコでももらつてほつとするポツケ

角張つた脳に丸みを作るチョコ

傷癒えぬ地に容赦ない寒波来る

曇天続き青空の絵を飾る

一言の師のつぶやきに気が晴れる

倉吉市 岡崎美知江

核心にふれると声が震えちゃう

好きですと声に出したらこわれそう

もう少し待てばハートの戸が開く

認知症泣いて笑つて介護する

妻の尻に敷かれていれば平和です

米子市 野川宣子

逆らう気失せて無風の古い二人

逆立ちひとつ出来ない私生きている

ガラス玉場所を選んで光り出す

両の耳で聞いて下さい民の声

孫からの直球痛いところ突く

米子市 見山温子

泥水をはねる車も泥だらけ

同じ事何度も聞いて怒られる

ハンバーガ孫に連れられ初試食

妊婦服女の自信見せている

定年なし老いには老いの仕事する

米子市 生田寒之

積んでいた本と貯金を崩しだす

この世にも損せぬ活計あつたとは

使わない機能に捨てた無駄使い

マドンナの顔が見たくて同期会

留守続く隣家の庭にふきのとう

松江市 藤井寿代

私を少女に戻すチョコのパフェ

友の笑顔は満開のチューリップ

言い訳の上手い女で淋しんぼ

好きだよと言われた日から鬼になる

手の鳴る方へ明るい方へ足が向く

松江市 相見柳歩

人助け棒は決して倒さない

水を飲むここで魂生き返る

またしても女の勘とやらに負け

空間がゆがんで星が見えてくる

無駄なこと仏をにらむようなもの

京都市 清水英旺

日が伸びて命も伸びる心地する

往復はがき音信のない友に出そ

コチコチと命を削る刻の音

鬱屈が老いの心に結露する

立春の月なお冬天に凍りつく

雲南市 菅田 かつ子

詩にされた一輪ぎしの黄水仙

一言に心和んだ風の中

格好良いつもりよろよろしてならぬ

若鮎といっしょに跳ねてみようかな

美味しいと言うからシチューまたシチュー

美作市 小林 妻子

風来子まだ生きている丸い里

洪水が邪魔してお茶が沸かせない

泣き事も収めて祖母の胸の幅

ハイと言う言葉がとてもむずかしい

貧乏を知ってるなんて嘘だろう

広島市 岸本 清

家族より犬の医療費高くつき

ワンとしか言わぬ犬だが家族です

叶うなら我が人生の巻き戻し

コマーシャル用足してもまだ続き

未だなお心の余震収まらず

竹原市 若年 幸子

想定外何と便利な逃げ言葉

私も家もメンテナンスを急かされる

閻魔からイエローカード届きそう

荒れた手に娘の苦勞見え隠れ

春を恋い萌黄をまとう試着室

山口市 中前 幸子

夕焼けのブランコ主語が揺れている

笑わない人形乱れ髪を梳く

G線上のアリアを騙し絵の中で

古時計ゆっくり告げる過去の刻

片隅にわたしの愛が吹き溜まる

宇部市 高山 清子

ひらがなの様に生きよう八十路坂

ごめんねは解ついても口に出ず

言い訳をするから男値打ち下げ

自分史に綴れぬ傷を胸に秘め

ひらめきもときめきも絶え風をまつ

阿波市 三浦 千津子

聞く耳と流す耳とで生きやすい

迷いから抜けて心に灯がともる

じっくりと話す大きな夢だから

味方には鬼でも欲しい時がある

決断の出来ぬ焦れつたい昨日今日

松山市 神野 きつこ

跡取りの決まらぬ父の納骨日

冬木立年輪つけてじつと耐え

実力がないからせめて笑顔でも

政治家が職業になる世襲制

氷上の華と言われて傷だらけ

大洲市 花岡 順子

塩竈市 木田 比呂朗

ユニクロが春だと騒ぎ出す

大雪へ食料品をまとめ買い

先ず頭下げるところも親譲り

腰掛の仕事一つが見つからぬ

ストレスを飲み込みながら生きている

唐津市 北村 松風

満杯のカードで財布脹れてる

友の通夜冷たい雨も情を添え

鈍行の旅によく似た八十路坂

五時からの特価にならぶ蟻の列

訃報爛いちばんに見る歳となり

山鹿市 米加田 恭代

小さなチョコにしました健康上

狭窄症か恋煩いか胸痛む

犬だって恩忘れずにしつば振る

しつば振る犬にだってある下心

苦虫が時々くれる甘いアメ

札幌市 佐藤 登美子

雪女列島上で旗を振る

音沙汰が無いのは生きている証拠

安否問う嫁のメールへついほろり

人生のドタバタ劇も無事通過

息子へ申す残高ゼロで逝くつもり

白線も春を装う交差点

カラフルなツアーチラシに煽られる

散歩までいつもケータイ持たせられ

朝ドラ後ようやく動く重い腰

家計簿がベジタリアンを押しつける

福島県 七ツ森 客山

ナダソウソウみんないい人ばかり

視界不良なれど被災地にも春が

まだ除染すすまぬ土に露の臺

お葬式続き美食にならされる

満開の桃の花にも放射線

佐渡市 高野 不二

昨日の事は忘れ昭和を思い出す

水だけで生むか卵が安すぎる

賞断ってニユースになったがる

薬まで皆カタカナになっている

日めくりの今日新しいものがない

富山市 有澤 嘉晃

氣を楽に余生を過ごす再生紙

絵葉書の方がきれいな観光地

ほのほのと心包んでくれる友

入学の声がはじける青い空

わたくしの嫌いな点に出てくる芽



静岡市 渡 辺 芳 子

気付かずに過ぎた人生今悔いる  
出来るなら小学生にもどりた  
サブリメントこんなのにんでどう生きる  
死ぬ時はごめんなさいとありがとう

熱海市 三 谷 圭 角

梅まつりバス多けれど蕾だけ  
健康と自慢した友先に逝き  
あの一手五年過ぎてまだまだ口惜し  
情なやディベート族が世を捌く

愛知県 樺 嶺 志

日常の失って知る平穏さ  
足爪をわが手で切れるありがたさ  
他人ごと国の借金知らぬふり  
みな同じ謝罪会見辞儀姿

大阪市 平 井 露 芳

雲の峰見え隠れする昨日今日  
取り過ぎた言うて年金下げて来る  
病院の廊下年中師が走り  
財務厚労間で揺れる紫煙の輪

大阪市 阿 野 寿美子

朝起きて何をするかと考える  
じつと見る犬の瞳は声になり  
おとうさんなんかやと押されきみ  
動かずに采配振うおばあちゃん

大阪市 安 田 由美子

傘寿の親娘を捜し三十年  
雷も花火に見える宇宙船  
福袋アンパンマンに騙される  
寒波到来白水仙も凍ります

大阪市 柴 本 ばつは

足し算がとても苦手で損ばかり  
腰低くひくくつらい三代目  
子育ては一枚上手おばあちゃん  
孫のためキティちゃんともお友だち

大阪市 梅 里 南 天

痩せ蛙アルキメデスは土の中  
おれ様の寝相を見ればやまいだれ  
冬の陽にブランケットと遊びおり  
福は外鬼がいるのだこの内は

大阪市 吉 田 知 之

たくさんの薬もらってややこしい  
共稼ぎ妻に財布を握られる  
着物姿何の稽古の帰りかな  
ワイドショーゲラゲラ笑いついしらけ

大阪市 前 川 善 之

節電にまだまだ出そう知恵と技  
震災に遭って分かった人の情  
年を取るほどに命が惜しくなり  
介護バス一人待てる春の朝

大阪市 川 島 吉太郎

池田市 多 田 契子

一日の俺の行動妻が決め  
悪いくせ焼く迄つづく頑固者  
安晋請音を気にする若夫婦  
どっこいしょと掛声がいる敬老会

隣人は音もたてずに生きたはる  
来年は少し減らすと薬見る  
良き友に恵まれている午後三時  
約束を違え固まる現在地

大阪市 浅 井 公平

泉佐野市 稲 葉 洋

瀬戸内の行きかう船で旅したい  
船の旅色々あつて味くらべ  
年とつてすべてのことがそろそろと  
古池で鴨が開いている会議

棒読みの般若心経まだ凡夫  
助けてと薬にすがつた夢の中  
散り際の賛美を桜何と聞く  
下駄占いあした天氣に診察日

堺市 増 田 和 幸

貝塚市 石 田 ひろ子

一千兆誰が作つた借金だ  
年金で長生きよいか悪いのか  
いい加減卒業しよう核神話  
パンドラの箱を開けたらアトム出た

嫁の友に若いと言われちよつと照れ  
墓建ててやつと婚家の顔になる  
はそはそと雨と話をして帰る  
逝く時も見栄張りたくて選る写真

堺市 近 藤 治 子

交野市 田 岡 久 幸

新刊のページ開いて匂いかぐ  
悪友がいて退屈はしていない  
当日は神頼みする受験生  
頼り無いママ子育てで母になる

この街に老いて御慶の声幾度  
友の計がするつとやってくる電話  
そうかももう君とは現世で会えぬのか  
目白来て雀鳴く日の恋しかり

堺市 羽 田 野 洋 介

河内長野市 松 岡 篤

喜寿の宴再会契る同期会  
信号を渡ると晴れる今日の憂さ  
解決の鍵は一つと限らない  
確かめよう隣は何をする人か

お出かけは電車一本早くする  
殴られた先生妙に会いたくて  
あちこちに口を出すから忙しい  
腹の虫かなり正しく時を告げ

河内長野市 辻村 ヒロ  
誰だったにこにこされて知ったふり

合格を頼むじいちゃん墓参り  
寒風に梅の蕾がいとおしい  
定年後目覚しよりも先に起き

河内長野市 山本 エミ

玉手箱そつと秘密を詰めました  
働き者節目太目の指自慢

節目こそ今がチャンスとトライする

龍の字の連風揚げた辰の孫

川西市 日野岡 和之

枯れ木にも花を咲かさん老いの意地

雑音は聞こえませんかと天の声

人生の収支決算残り福

季の暦一枚剥いで早や果立ち

岸和田市 増田 隆昭

嫌な時笑いの文字を十コ書く

当選は出発だよと言ひ聞かす

ペランダの隅に灰皿置いてある

越して来て祭りの寄付で仲間入り

高槻市 田中 由美子

ノックせず老いが笑顔でやってくる

オムレツが形にならぬにわか雨

病み上がりやさしい春を食材に

菓子箱の中身は菓子と限らない

豊中市 源田 啓生

日本を鞭打つような大寒波  
ボケットの中で不安が渦を巻く  
これがなあ八十路に近い顔らしい  
朝視ると決めたテレビを忘れてる

豊中市 池田 純子

大雪の今年は鬼もどうぞ内  
早起きの背中に月がついて来る  
恐い顔引退しますジジになる  
方角を間違いかぶる恵方巻き

豊中市 石橋 優明

すべり台ブッチンプリン滑らせる  
バッテリーのせこんがり焼いた恋心  
逃げた鼻床屋でひげを剃るころか  
水枕ふわりふわりと雲の上

豊中市 荒巻 夢

転けないで友と電話の合言葉  
時々は無性に恋し母のひざ  
日の恵み背中いっぱい寒の朝  
咎める者誰もいなくて大あくび

富田林市 関 よしみ

懸命に生きて絆も温める  
柔らかなたてがみ私包み込む  
何事も平均で良い我が家流  
わっと春命いつせい音合わせ

富田林市 山野 寿之

愛と愛繋いだ糸が細くなる  
ゆつくりと決めた時計が焦り出す  
向こう岸野心捨てたら見えてきた  
過去晒し私がわたしらしくなる

寝屋川市 小谷 滋彦

新年会飲み食い笑う小宇宙  
悲しみも少しうすれて寒の明け  
上ル下ル京都住いもまた楽し  
豆撒いた父さん今は鬼にされ

羽曳野市 安本 美喜

どんぞこに落ちててもボール跳ねあがる  
カウン트가始まりました花粉症  
ネコヤナギ膨らむ春は近しとも  
新顔の野菜にちよつと足を止め

阪南市 坂口 公子

海と空占めて絵になる鳶一羽  
営々といく蟻の列春うらら  
面々と続いて有り難い孫曾孫  
面白い本に出合うた幸不幸

東大阪市 西田 いくひろ

俚約をしすぎ女々しくなってくる  
素敵な出合いちよつと道草したくなる  
底を見た暮らしにヤル気燃えてくる  
義理チョコを貰ってうれし古稀の坂

枚方市 坂本 ミヨノ

ダイエツト忘れのんきに鍋囲む  
浮き沈みのんきな暮し夫婦舟  
観光の地図に熱あげ湧く二人  
寒椿雪の重みにちぢむ紅

枚方市 河田 洋子

復興に線量計が邪魔をする  
今年こそ断捨離決意実行に  
古希過ぎて危ない橋は渡らない  
助け合い笑顔で暮す老い二人

松原市 市川 雄太

被災地のためにスクラムみなで組む  
わがままがたかつて失せる信用度  
キャンブ地で選手が熱く燃えている  
積雪にはしゃぐ子供が愛おしい

箕面市 酒井 紀子

夜桜が散りたくないと午前四時  
淡雪に恋の終りの予感する  
古傷をそつとしまつてベンをおく  
少しでも意地悪したい恋がたき

箕面市 寺井 柳童

四世代揃う幸せ初詣で  
万万歳女系家族に男の子  
節電用ばかり詰まつた福袋  
蕎麦素麺饅頭大好き理屈ぬき

八尾市 山根 妙子

福袋持ちきれなくて転げてる  
鬼と福ひとり演じて豆を撒く  
掃除機に夕べの豆がころころと  
目も指もスマホ動きの前五人

八尾市 前田 紀雄

電子辞書新になったが脳は古  
お喋りは直球よりも変化球  
不景気でスカイツリーが良く目立つ  
二足の草鞋背反してギブアップ

八尾市 田邊 浩三

国産の松茸ついに見当らず  
マンションに移り門松縁が切れ  
仕事始め肩の荷下ろし靴を履く  
豆まきに除染済むまで鬼許す

大阪府 小栢 こずえ

ひと区切り褒美のチョコがより美味い  
老いてなお未完の抄を埋め続け  
落葉舞うすみに寄道一寸して  
本読んで己を磨く冬ごもり

大阪府 高木 道子

気が付けば想定外の絆あり  
雪女郎アップテンポの無法ぶり  
国会の野次へふんふん頷いて  
マイカーを掘り出している深い雪

大阪府 西川 冷子

断末魔聞えてきそう壇の浦  
夜盗虫今年の雪にもがき居る  
凍てた坂四本足が羨ましい  
外は雪温泉プール四肢延ばす

大阪府 若月 祐作

節分の豆頂きに宝寺  
帰り道角の地蔵に豆を置く  
福は内豆飯のり巻きかぶりつき  
節電と賀状を減らす策を練る

神戸市 白川 淑子

やる事がまだ有るしつかりと食べる  
愛される意地悪婆さん修業中  
ピンク着る七二回目の春に  
八起目でやつと掴んだほんまもん

神戸市 能勢 利子

娘に譲るへそくり法と母の味  
春一番心の中を吹き荒れる  
花ふぶき待つ人もなく途中下車  
親の欲元気なだけでまるなのに

神戸市 山根 弘子

一日の疲れ癒したコップ酒  
恋がたきと鉢合せした散歩道  
るるるんでハンドルはずむ恋の道  
散歩道バラに恋して小休止

神戸市 長川 哲夫

山また山青山のあり母のあり  
四方の山母に抱かれてゐるように  
里山のここが故郷竜の玉  
初歩き子はしっかりと恵方向く

尼崎市 田原 一兆

忙中閑昼の錢湯我ひとり  
酒うどん暖簾の文字があたたかい  
表札の塵拭い取り永らえる  
古傷の疼き封じるカット絆

尼崎市 小池 幸子

冬眠の動物達が羨まし  
神仏俄信者の受験生  
日にひとつ予定こなしで恙無い  
推敲を重ね重ねて迷路入り

尼崎市 市坪 武臣

よちよちと孫の歩みに明日が見え  
歩かねばずきずき疼く膝小僧  
いいことがあつたか妻の鼻唄で  
責任を取らぬトップの美辞麗句

加東市 岩本 美緒子

寒の入り筆は冬眠したまんま  
水墨仏画帳一冊増えた年  
グルコサミン娘から錠剤宛てがわれ  
膝小僧薬と杖がお供する

加東市 黒崎 美紗子

絶食で時計眺めて待つ検査  
次番か病院廊下響く音  
病床から青にオレンジ雲流れ  
入院は検査いろいろしてくれる

加東市 安達 厚

来年から遠慮しますと出す賀状  
集つてケータイいじり皆無口  
輝きはないが誇りはもっている  
あれそれでみんな悟れと言われても

篠山市 石田 久子

飲んだはずなのに余つてくる薬  
笑う方が楽だと気付く歳になり  
聞かぬことにして心を丸くする  
生きてるか夫が氣を揉む長い風呂

篠山市 沢山 啓子

雑記帳ずい分強い鬼が棲む  
雪のんの他人の部分が浮び出る  
メインテーマ決めて井戸端会議する  
真の友ホンマの妻は言わん仲

篠山市 酒井 健二

慎ましい日々のくらしが宝物  
ラッキーか否かで決める人生論  
日に一つ楽しみ作り日をつぶす  
腹八分残す料理に手を合わす

篠山市 谷 田 多美子

今日の日のおしゃべりすんだお買物

生き残る友とかわしたおめでとう

腰痛が道草しつつかせる

大正の女性大正の詩をもつ

篠山市 永 井 かほる

開店日何が安いか見るだけで

黒豆の出来を比べる農業祭

グループの主役の笑顔一番だ

する事があっていいねと励まされ

篠山市 佐々木 勇

添書きがダイヤにもなる年賀状

円陣を組んだ相手も勝つ気だな

旅路から友の弾んだガイド振り

ぶつぶつと沸いた薬缶の独り言

三田市 辻 開 子

この寒さ遠慮しながら電気オン

電話口もらってやりたい孫の風邪

オイとハイテンポずれだし思う歳

桜咲き類ゆるんでる電話口

三木市 山 口 久 子

文字丸く心身丸くなればいい

冷え性が足湯だけでの遠出する

ぶらぶらと人の輪たのし散步道

意地張ってひ孫相手に過す日々

奈良県 谷 川 憲

愛犬は話が分かる顔をする

先頭の蟻に追いつけない都会

票集めに長けて大義のない政治

夜なべした母の手縫いは捨てられぬ

奈良市 尾 畑 なを江

真すぐに歩いて来たか振り返る

海鳴りが恋し四十路の旅日記

なにげなく言った通りにあわて出す

積みのこしヤンチャが一人外にいる

奈良市 前 田 弘 恵

年の数食べ応えあり噛みしめる

乾燥の予報にたっぷり化粧水

一人旅一期一会もまた楽し

食べ放題ご遠慮します老いの旅

奈良市 矢 野 良 一

銀恋を歌えば戻る青春期

スーパの特価で決まるお献立

高がカラオケ然れどカラオケ奥深し

メールなら照れずに言える娘にも

岩出市 村 中 悦 男

老犬と更に親しくなる老後

いい湯だな歌も出てくる外は雪

色々と名前つけられ雪が降る

当選切手八十円が二枚欲し

高速道エリートのラッパばかり聞く  
田辺市 大峠 可動

情報網の網にビエロと十字架と  
名案がないから寝不足の政府  
人間は不用涙を流すから

橋本市 石田 隆彦

親と子の軋みに注ぐ酒二合  
小商い値切った後の悔い一つ  
昔は郷里今は国捨てはばたく子  
病院を出て人生の深呼吸

鳥取市 津村 律子

ありがとう忘れぬように貯金箱  
ありがとう一ツあげたら喜ばれ  
病名を聞かれぬように雑誌読む  
明るく笑う娘まさかのガン告知

鳥取市 坂本 とも湖

窓の陽がベッドの老母を勇気づけ  
老母の味秘伝を学ぶべきだった  
ライバルも老後の支え知恵を借り  
影法師振られた私笑うなよ

鳥取市 近藤 秋星

僕だけが陰暦で書く年賀状  
誕生日喜ぶべきや八十二  
生れて来た証しに残すものがない  
ああ無情竹馬の友も杖ついて

立春だ春がそこまで来たようだ  
力にはなれぬが家族の無事祈る  
寝れぬ夜はトイレは近し腹も空く  
崖つ縁に來た身だ欲を捨てようか  
鳥取市 山口 千代子

この道の誰も数えぬ石の数  
雪積もるそれでも歩く脳回路  
脇道に咲いてる花に逢いに行く  
雪の下顔出すツクシ仏前へ  
鳥取市 大前 安子

川柳に夢中になつて鍋焦がす  
悩んでも皆年は取る花咲かそう  
叶わない夢を追いかけて早や古希に  
右左杖の倒れた方選ぶ  
倉吉市 田中 紀美恵

譲れない母の着物に娘の背丈  
エネルギーためて春待つ姥桜  
マニフェスト思えばみんなシャボン玉  
どんぶりを一つ洗つてすます昼  
倉吉市 前田 喜美子

毎日が白川夜舟定年後  
今日もまた出るはお金か溜め息か  
試食して素通りしては気が引ける  
膝に腰何の油をさせばよい  
倉吉市 中村 毅



倉吉市 堀 かずこ

世渡りがうまい人でもつまずいて  
あの世でも梅は咲くかと亡夫に聞く  
世間体気にして見栄をはっている  
青空が私を誘い散歩する

境港市 中井虎尾

伯耆富士ここは松江だ出雲富士  
東大のサクラの花は秋桜だ  
電話して逆探された過去があり  
上向いて民の政治をする不思議

米子市 田村周子

雪が降る静かに全て真白に  
春を待つ明るい日差し希望わく  
大晦日孫の受け持ちガラス拭き  
買物難民今は宅配サービスで

米子市 加藤正二

閑だから死んだ先まで手配する  
寒波来てラジオテレビが老いの守り  
カレンダー医者行きだけが書いてある  
歳のさば読んでも顔がだまらな

米子市 小塩智加恵

兄弟が親の歳越えガンも無し  
退院の夫晩酌復帰した  
まとめ買い超特大の冷蔵庫  
糖検査合格でした飴なめる

米子市 後藤宏之

かんたんに掴み所は教えない  
帰る家ないぞとさとし嫁に出す  
いねむりをいつもしていて皆勤賞  
ふりかえりみればシャボンのようだった

米子市 湯浅久司

天国に行けるか今日も考える  
花でなし我は溝板檜なり  
老いを知る去年はできたことなのに  
湯が沸いたころに帰って来るパート

鳥取県 下田茂登子

離婚した嫁の写真が置いてある  
字が下手で損しているとそう思う  
ポロリと漏れた言葉に本音ちらと見る  
無学でも亡母の教えは哲学だ

鳥取県 橋谷静江

惚けたふりその場を凌ぐ技を知り  
お二階の孫とメールをする時代  
元氣出しバスポートなど取り寄せる  
前向きに献立表と向い合う

鳥取県 飯野菖子

時計見る急に腹まで減ってくる  
そろそろと天国行きの名簿くる  
まっしぐらラスト来る日を気付かず  
頑張った人生ラスト花も咲く

鳥取県 田口 清帆

梅の香が笑顔の春をはこびくる  
まだ燃える八十路のハートに紅をさす  
つまずいてひらめいて来た五七五  
ベッピンさん親にもらった顔いじる

鳥取県 岡村 孝明

新築はしたが住めない放射能  
子や孫に祝われ舞うはじじ米寿  
一面の雪の原にも春の音  
大古の石学者が歴史語らせる

鳥取県 大塚 美代子

近所中かき集めての雪ダルマ  
書初めに未来の夢を託す子等  
友誘い小春日和の散歩道  
うたかたの夢であの世に迷い込む

出雲市 黒目 英男

原点を忘れず過ごす震災後  
寒げい古寒さが人を強くする  
流行歌僕のハートに火を付ける  
ひたむきに課題に向いボケ防止

安来市 原 煩惱児

お年玉孫には孫の予定表

親子孫固い絆の初詣

認知症の妻よ嘆くは愛不変

はっこりと炬燵で思案続く日日

岡山市 永見 心み咲さき

ばあちゃんと呼ばれた日からステージ2  
食卓にお箸二膳があり平和  
御神渡り神も蛇行の迷い道  
我儘で通していると言う驕り

備前市 森 ふみか

諸々を溜め込み軋む首の骨  
早口になってこぼれる蓮の露  
曲り角手招きをする券売機  
足早に去る宅配の弁当屋

竹原市 六田 半徳

近くても丸木橋止め遠回り  
インフルエンザ学級閉鎖増加中  
立春を過ぎて名残の雪が降る  
豪雪が日本列島更に攻め

竹原市 土井 輝恵

三日とは続かぬ誓い壁に貼る  
没句は没句盤回しをしてみても  
幸福論考え続け七十四  
他人恨みや世間は狭くなってくる

今治市 渡邊 伊津志

凛々と生気が走る風車

芋虫がうねって歩く高歩き

青春に大きくくさめ春となり

満月を眺めて暦終わるなり

四国中央市 篠原 久

ネイルアートの指が千羽の鶴を折る

三・一奇しくも妻の誕生日

歩け歩け一言医者押し通す

物忘れ進むわたしの昨日今日

高知市 三谷 待太郎

ストレッツああそうだったストレッツ

そうだった足は第二の心臓か

一雨ありはやりの風邪よ流されよ

票かせぎさはさりながら低次元

香南市 桑名 孝雄

酒の備蓄だけはおさおさ怠らぬ

TPP僕も農家の内らしい

いい婆ちゃんになったあの日の女子社員

いつの間に撮っておいたかい遺影

福岡県 本田 さくら

同窓会師弟仲よく米寿古希

同窓会介護業があちこちで

美容師に髪をほめられ蝶になる

満州の亡父の写真は雪の中

北九州市 小松 紀子

死して生きる亡夫よアナタはえなかった

想定外まさかの坂に泣いた日々

バレンタイン義理のチョコでもあげようか

アバウトに生きてストレスためません

唐津市 吉富 節子

馴れ初めは隣の席の終電車

赤帽子迷子防止の旅の友

操縦のうまい嫁です平和です

積雪に東北忍びまた涙

唐津市 岩崎 實

よき日本外国人に教えられ

五十年後敬老の日はどうなるの

健康が一番二番三番も

ここ迄は歩いてきた峠道

山鹿市 三谷 たん吉

隙のないきれいな女ただ無気味

底ぬけの明るい笑顔たんとある

世直しをやる気もなくてしゃべるだけ

総理だぞ批判はやめて盛り上げろ

シドニー 坂上 のり子

ハローでもいい目が合えば声かける

思いつくと昼夜構わず動く家具

穏やかな静かな日々がほしい猫

優しさをそつと秘めてる猫の爪

弘前市 稲見 則彦

雪を切りアナタへの道こじ開ける

なかなかの出来と初心者ヨイシヨされ

オリオンが凍てつく夜を独り占め

願い事聞く暇ないと流れ星

弘前市 高 森 一 吞

ぬり絵からアンパンマンの歌になる

テレビからサブリメントの雨嵐

午前二時降らぬ雪みて二度寝する

地吹雪は三昧の音色を消し去って

東京都 岸 愛 三

寝る食べる飲む以外には特記なし

日一日女房沽券が増えてゆく

遠くない昭和をまるで中古品

他人からいわれたくないお父さん

東京都 大 竹 一 良

コマーシャルすぐに信ずるお人好し

嫌なこといつまでも持つ情けなさ

自分史に都合悪さはほかし書き

意地張らず負けて勝取るしたたかさ

昭島市 野 口 忠

子供等が遊びつかれてまた炬燵

お受験の子におみくじが笑みを見せ

茶柱が立ってようやく腰を上げ

野良へ出る父の軍手の太い指

東京都 井 上 つよし

こ踊りしたり涙ぐんだり鐘三ツ

困ったときのお互い様も過疎の村

財源は想定外のマニフェスト

友情と度胸育む飲み仲間

東京都 高 岡 弥 生

立春が過ぎてまだまだ冬本番

長年のゴールド免許青になる

勝ち組は人生いつもケセラセラ

子の試合残り何回観れるかな

横浜市 巖 田 かず枝

元氣です古希の夫とけんかする

争えば犬が心配顔で見る

鏡見て自分をほめてやる勇氣

ヒーローになりたい孫の運動会

相模原市 赤 木 妙 子

娘三人みんな揃えば国なまり

持たされた杖に娘の情け知る

食べる程毎日薬飲んで生き

覚えてた漢字すんなり出てくれぬ

## 第9回大野風柳賞作品募集

雑詠五句 (未発表作品)

審 査 大野 風柳

### 一 審 査 方 法 一

\* 選句は記名選とします。

\* 五句一組として総合力で賞を決めます。

締め切り 4月25日消印有効

会 費 1000円(小為替のみ)

宛 先 〒956-8691

新津局私書箱15号

柳都川柳社宛

全員に風柳句染記念品呈

発表誌柳都6月号希望の方は

500円加算のこと

## 中島生々庵句抄

(句集「生々楽天」から 昭和五十一年発刊)

昭和二十二年～三十年

混線へフト耳よりな闇ばなし

二階借り子らも佗びしう住みなれて

俺のハンカチ見すばらしくも疲れ果て

貰い風呂すめば一石囲む腹

寒さむと帰れば炬燵酒が待ち

かげ口も知らず来賓すましてる

割り勘と知らずつき合い気をつかい

つき合つて帰れば子等は雑炊か

俺の収入気付いたらしい子の寝顔

後姿素直な母がそのまんま

奉加帳つきつけられて意地になり

この寄附にさもしい裏の裏がみえ

五月晴れ電柱と俺とだけ寂し

親の気兼ね頓着なしに又生まれ

次の間でも一度母にくどかれる

悪友のこうした時のたのもしさ

斯うなれば男の意地の自炊をし

かみしめる母手づからの胡瓜もみ

手料理が自慢の妻を見せたがり

仲人がもったいつける福ぼくら

昭和二十七年～三十年

かみころすあくびうちわでひろいあげ

天気予報だました傘へ陽の強さ

うまくいった話へ傘を忘れて来

悠々の昼寝は明日へ備えたり

母の手前夏やせですと言ひ逃れ

# 俳風柳多留一篇研究 80

小栗清吾・伊吹和男

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清博美

ついているのである。

柳雨「吉原志」には夜鷹の項に採られているが、猿田彦で無理なく解せるので、夜鷹の鼻と足駄まで行く必要はないと思う。

さるた彦ころぶと直に山婦来 宝13校3

さるた彦わるい道たとわらわせる 明五仁3

さるた彦鼻をにぎつて汗をふき 宝12校2

さるた彦ゼンたいむりなつえをつき 明四礼10

清賛。

635 かし本屋げだい斗のがくしや也

小栗 外題は、書物の表紙に貼った短冊形の紙に書かれた表題。「日」貸本屋は、商売柄いろいろな本の名前はよく知っているが、内容にまで精通しているわけではないとの意であろう。「外題学者」（書名のみを知って内容を知らぬ学者）（「江」という言葉があるようなので、それを踏まえた作句であろうか。

外題でハ博学多才貸本屋 一四九三  
かし本や無筆な人につきあわず 明七礼4

山口 賛。今の古本屋然り。

633 けいせいの蛭にくわれるにきやかさ

小栗 住吉神社御田植えの句である。五月二十八日、摂津住吉神社で神田に早苗を植える神事が行われるが、これに泉州乳守の遊女が奉仕することになっていた。『俳諧歳時記草』には、「住吉の御田植（略）泉州堺、乳守の妓女のうち、約するところの、奉公年季明けたる、女三人来りてこれを植。今日、神殿を植てのちは、妓院の暇を出すといふ」とある。

主題句は、このことを蛭で田圃を表現して作ったまで。賑やかに神事が行われたのであらう。

ひるが居ルさかひと女良は入りかね

泥水て住吉の田を植て居る

清賛。

634 あの鼻で足駄はわるいおもいつき

小栗 猿田彦の句と思う。

猿田彦は「近世、神社祭礼の渡御行列に、鼻の高い赤い面をかぶり、矛を持ち、高足駄をはいて先導する役」（『角川古語』で、天

下祭でもお馴染みのキャラクターである。

主題句は、この姿の特徴を捉えて、もし転げたらあの長い鼻が折れるだろうに、高足駄を履くとは何とも悪い思い付きだと、からか

636 万才ハ小声の時におちをとり

小栗 落ちを取るは、好評を博する。拍手喝采をうける。(江)

三河万歳は、目出度い文句を連ねて行き、やがて小声でわいせつな文句を述べる。そこでドツと聴衆が喜ぶのである。

かんじんの所を万さいそつといひ 一五二四

万才に嫌ハおなかをもてあまし 安四叶一

万才中がかり才蔵下がかり 萬二二〇

清 賛。小声で言うから面白い。

637 ごまつくんだんを清少納言よみ

小栗 清少納言の和歌、

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも

よに逢坂の関はゆるさじ

(後拾遺集・雑二)

は、『史記』孟嘗君列伝中の函谷関を鶏の鳴きまねで開けさせた故事を踏まえたものであるが、この話が江戸中期の通俗本『呉越軍談』に掲載されているのをとらえて、「清少納言は、きつと呉越軍談を読んだに違いない」と時代錯誤の面白さを狙った句。

清 賛。

638 何処にあるやらわつちらが餅といひ

小栗 私達の餅は何処にあるやらと言ったという句だが、まったくわからず。

伊吹 田舎者がうる覚えの和国餅の店を探しているのでは？和国餅を我國餅として。

山田 賛。和国屋は万橋(和国橋)の新材木町角にあった。そこは、かの「白子屋お熊」の店跡との説があり、次の句がある。

白子屋の跡トもちやとハ思ひつき

安四智七

清 伊吹説賛。

639 れんくわんの中を花火の通ひ船

小栗 連環は、いくつも環をつらねること。環をつらねたように結び合わせること。くさ

り。(日)

ここで「連環」は、川涼みの屋形船が供船、料理船などを何艘か従えている様をいうと思う。その中を「花火の通ひ船」が動き回っているという、隅田川の両国川開きあたりの情景であろう。句の解釈としてはそういう情景を詠んだ句ということではないと思うが、「花火の通ひ船」の実態がよく分からないので、どなたかご教授下さい。

①座興用の玩具の花火を売る船、

②涼み船からの打ち上げ花火の注文を取りに走り回る花火屋の船、

③花火の注文に向うく屋形船付随の通ひ船、などが考えられるが。

花火うりよし野川一チ追いめぐり 玉三

山田 礎「花火を売る船(但し、玩具ならず本格の)」賛。「花火」火の芸術(小勝郷右、岩波新書)に、

江戸の大商人たちは「納涼期間には涼み船で大江にくり出すが、その周りには花火を売る花火船が集った。江戸大店の旦那衆の豪遊ぶりは……中でも自前の花火を一瞬の座興のために打ち上げさせるのは大変な豪遊だった。

とあります。

山口 山田説賛。注文をとつて、その場で打ち上げたのでしょう。涼み船(川一丸等)の近くまで通つてくる舟。

清 山田説なるほど。

小栗(再説)それを「通ひ船」と言つていいか、が小生の疑問です。「花火船」とどうちがいましょうか。

因みに「すみだ郷土文化資料館」の意見は、小生の上げた三つのうち、①②両方ありうるとの見解でした。

# 愛染帖

新家 完司 選

ブータンに行ったつもりで里暮らし  
亀岡市 井上 森生

(評) 国民総幸福量世界一を目指すブータン。  
国王夫妻の来日と共に人気急上昇。その気  
になれば我が里も「しあわせの里」に出来る。

善い人が増えた気がする震災後  
倉吉市 中村 毅

(評) かつて私たちの国が、これほどの優し  
さや思い遣りに満ちたことはあつただろう  
か。これが一時的な現象で終わらないように。

臍ピアス母の許しを得てしたか  
河内長野市 坂上 淳司

(評) 臍がどのような役目をしていたのか、  
考えたことはあるのか。それが母の体の一部  
であることを思ったことはあるのか？

手短に話してほしい孫自慢  
紀の川市 北山 絹子

(評) 孫のことを話したい気持は分かる。額  
いて聞くのも友達を務めだろう。だが、乾杯  
の挨拶と孫自慢は出来るだけ短く願いたい。

神仏に頼ると金をせびられる  
松江市 石橋 芳山

(評) 誰に頼みことをしても相応の礼はしな  
ければならない。まして相手は神さま仏さま。  
無料奉仕ではないと賽銭箱が言っている。

河内長野市 針生 和代  
実力に合わぬ願いは聞けぬ神

(評) いくら賽銭を弾んでも、怠けていては  
一流大学に入れない。世情に疎くては事業に  
失敗する。神といえども万能ではないのだ。

和歌山市 福井 菜摘  
レトルトに真心添えておもてなし

(評) レトルト食品の代表はカレーだが、最  
近凝った和風総菜なども出ている。急な客  
にはそれで充分。あとは笑顔でごまかそう。

長岡京市 山田 葉子  
見なくてもいつも空いてる予定表

(評) 予定表を見て分刻み、などは有名タレ  
ントや政治家。「いつも空いている」のは少  
し寂しいが、のびのび自由でいいではないか。

三田市 福田 好文  
ランドセル孫に背負わせ待つ桜

(評) 胸弾む孫の入学。世界的な標準に合わ  
せて秋入学に移行する大学もあるが、小学  
校ぐらいは「桜咲く春」であってほしい。

大阪市 笠嶋 恵美  
梅酒なら飲めますどうぞお誘いを

(評) 湯や水で濃度を調整できるので飲みや

すい梅酒。まだ置いていない居酒屋やレスト  
ランは、早急に対応しなければならぬ。

唐津市 仁部 四郎  
半日が済みましたねと昼の月

三田市 久保田千代  
鼻が利きすぎてこの世が住みにくし

明石市 桃谷 和郎  
冬の風呂足がじんじん唄います

尼崎市 春城 年代  
気概など湧けてしまう掘りこたつ

鳥取市 中宇地秀四  
はじらいもトキメキもあり未だ八十路

豊中市 松尾美智代  
退院をしたらたらく呑んでやる

飛行機が真上を通る家に住む  
回数券残ってるのに期限切れ

弘前市 福士 慕情  
漬物の重石になった鉄アレイ

老斑が浮き出て美味くなるバナナ  
私の影だウエスト見当たらない

岡山市 永見 心咲  
掃除機のオーケストラで唄ってる

奈良市 大久保真澄  
寒空の葬儀お経が長すぎる

ぜいたくは承知であたか便利座  
ツイッターに脳トレ兼ねて初デビュー

高槻市 初代 正彦  
顔色の冴えない友に励まされ



香芝市 大内 朝子  
若作りしてもどっこいしょは抜けぬ

松江市 三島 浜丘  
脇役に慣れて寂しさには馴れず

三田市 田中 章子  
お財布に住所氏名の紙入れる

堺市 内藤 憲彦  
新薬は効きましたかと医者が訊く

芦屋市 黒田 能子  
おしゃべりのあなたアメ玉如何です

樺原市 安土 理恵  
連れがあれば男子トイレも入れます

三田市 北野 哲男  
非常食詰めかえさせる歯の事情

鳥取県 齊尾くにこ  
口喧嘩しながら凭れ合う仲間

鳥取県 齊尾くにこ  
弾まずに蟹を食べてる従兄弟会

家系図の巢からまった私の名  
物音で確認しつつひとつ家

藤井寺市 鴨谷瑠美子  
何となく見てる浮世のワイドショー

弘前市 高瀬 霜石  
春が来るのにわたいいつまで寒い顔

結論がまずありそしてアンケート  
和洋中どれでもいいがまずビール

尼崎市 小池 幸子  
手拔させぬマッサージ機にありがとう

半世紀お世話になった風呂屋消え

樺原市 居谷真理子  
むつつりと役目を果たす足の爪

三田市 大隅 克博  
シンプルなドレス自分を知っている

親よりも妻の影響受けて今  
心もち地声抑える通夜の席

岡山市 工藤千代子  
話し合う余地についての話し合い

孫だけが誉めてもらえる三杯目  
無精髭まばらに生えた反抗期

今だけの優勝候補キャンブイン  
四條畷市 吉岡

修ばつねんと聖書一冊置くホテル  
勤務地に染まらぬままの大阪弁

気疲れもマッサージ機がもみほぐす  
華やかな席のお酒は呑み易い

鳥取県 石谷美恵子  
蛙の子蛙なんかにやしたくない

黄金虫の歌ほど財は貯まらない  
睦言は湯タンポ猫と交わします

引力に逆らうことはいたしません  
大洲市 中居 善信

自販機がオーキニなんて小癪にも  
堺市 加島 由一

博奕とは縁が切れたが酒がまだ

大阪市 小谷 集一  
休肝日本日五体不満足

西宮市 牧渕富喜子  
恢復期つぶあん系が欲しくなる

米子市 加藤 正二  
赤紙がこないだけでもよい時代

八尾市 高杉 千歩  
戦争と平和を生きてすぐ米寿

高槻市 片山かずお  
するつもりでしたといつも妻は言う

大阪府 米澤 徹子  
ドクターも仏滅させてする手術

大阪市 江島谷勝弘  
ドキッとする妻そっくりのシルエット

孫の目がメロン切る手を狂わせる  
藤山市 円増 純子

大体は情性でなっている果実  
富山市 有澤 嘉晃

世界中で寒波和歌山でも零下  
和歌山県 森下よりこ

軽トラを抜いてペンツに道譲る  
堺市 奥 時雄

説得力のない肥満体の医者  
和歌山市 柏原 夕胡

トンボやら亀から習う生きる術  
大阪市 太田としお

食べすぎと思っていけないのにメタボ  
西宮市 緒方美津子

鳥取市 岸本 宏章  
雪の日は出ない乾燥注意報

大阪市 古今堂蕉子  
正義漢面する自分ちよつといや

大阪市 岩崎 公誠  
女ごころ持ちつづけてるお婆ちゃん

大阪市 神夏磯典子  
剪定の缺気楽な音がする

河内長野市 村上 直樹  
マスクしてもごころ美人は目が綺麗

大阪市 大川 桃花  
書いたのにメモ置き忘れ買いわすれ

京都市 三宅 満子  
忘れ物したことさえも忘れてる

和歌山市 武本 碧  
拾う神信じ気楽に日向ほこ

吹田市 太田 昭  
酒癖の悪い男に誘われる

和歌山市 古久保和子  
文庫本の文字がだんだん辛くなる

鳥取市 春木圭一郎  
生き抜いてみるか楽しみある限り

寝屋川市 籠島 恵子  
疑問符をつけると生きにくいこの世

松原市 市川 雄太  
風の声自分呼んでる気がします

奈良県 渡辺 富子  
二割増しのばつちりになるつけまつ毛

三田市 堀 正和  
チビチビと一生の運使い切る

和歌山市 田中 みね  
生き仏の好きな物買う供え物

富田林市 山野 寿之  
葱焼いてとろりとろりと酒二合

鳥取県 平木 公子  
留守できぬ現在犬の介護中

八尾市 吉村 一風  
賢いなあ驚人をよろこばす

堺市 山本 半錢  
関節が錆び付いてくるテレビ漬け

茨木市 藤井 正雄  
出来ちゃった婚授かり婚と言うらしい

大阪市 小泉ひさ乃  
皆疲れてるのか席を譲らない

河内長野市 梶原 弘光  
そばつゆはたっぷりつけて食べる主義

三田市 石原 歳子  
城下町のしつとりとした桜餅

西宮市 片山 忠  
簇けても吠えたい時に吠える犬

鳥取市 前田 楓花  
雪乗せた桜の枝に花想う

枚方市 伊達 郁夫  
試供品だけで済ませているサブリ

寝屋川市 森 茜  
終着駅身の上ばなしけりとなり

池田市 上山 堅坊  
議事堂に被ってほしい寒の水

鳥取市 吉田 弘子  
徒歩三分誰を基準にしているかな

浜松市 岡田 史郎  
三粒ほど噛んで節分遣り過ごす

弘前市 今 愁女  
今こそ自由八十路の恋を楽しまん

枚方市 寺川 弘一  
祝電が読まれる時もある序列

藤井寺市 若松 雅枝  
頼られて嬉しい汗を流してる

生駒市 飛永ふりこ  
冬枯れに抜けぬ甘さの五七五

橋本市 石田 隆彦  
錆びた脳蘇生させてる五七五

紀の川市 宇野 幹子  
五七五しつかり食べて肥満体

今治市 渡邊伊津志  
良い夢を見よとて障子張り替える

米子市 中原 章子  
上からの目では出来ないボランティア

三田市 雑賀 一泉  
そわそわとすることも減り般岩経

鳥取市 倉益 一瑤  
拝んでも若さも過去も戻らない

豊中市 藤井 則彦  
きつと死ぬならばゆつたり生きてやる

唐津市 坂本 蜂朗  
煩惱がやめろやめろと言う写経

西宮市 吉井菜々子  
石橋蓮司と行ってみたいなあのお店

和歌山市 玉置 当代  
同じこと書ける日記で恙無い

八尾市 田邊 浩三  
定年後家で女房の電話番

鳥取県 山下 節子  
窓口に必ず募金箱がある

枚方市 丹後屋 肇  
スポーツを断念してる骨密度

大阪府 畑中 節子  
春蒔きの種が元気を連れてくる

米子市 生田 寒之  
酒灯油買って年金底が見え

西脇市 七反田順子  
霜柱偏平足をあざ笑う

大阪府 初山 隆盛  
どか雪に町のくらしも蓋をされ

堺市 近藤 治子  
屋根の雪見て心まで重くなる

堺市 増田 和幸  
被災地に情け知らずの冬將軍

鳥取県 細田 裕花  
足の裏ひび割れ寒さ突き刺さる

宇部市 平田 実男  
賞味期限へプラスアルファ―する我が家

岡山市 藤成 操江  
すっぴんで買物帽子深くする

田辺市 岡本 昇  
ぐうたらな妻も三度の飯は炊く

八尾市 宮西 弥生  
診断の果ては仏を待つ答え

寝屋川市 小谷 滋彦  
年賀より寒の見舞いが性に合う

鳥取県 西谷 悦子  
予定書き元気を誓うカレンダー

交野市 田岡 久幸  
節電にエアコン止めてどてら着る

八尾市 村上ミツ子  
遊ぶ金夫上手にひねりだす

川西市 山口 不動  
使えない妻が受け取る保険金

河内長野市 辻村 ヒロ  
ゆるやかに我が身におこる変化球

河内長野市 松岡 篤  
産声を上げた時から比べられ

倉吉市 山中 康子  
この辺でラストスパ―トかけて散る

泉佐野市 稲葉 洋  
採決の結果屋台でまた議論

京都市 榎本 宏子  
墓参り誓いは立てぬ七回忌

寝屋川市 岡本 勲  
ふる里がかけこみ寺でいてくれる

堺市 矢倉 五月  
大の字で極楽至極敷き毛布

箕面市 広島 巴子  
雨戸閉め沈黙黙考寝てしまふ

羽曳野市 永田 章司  
二番では駄目だと京の技が冴え

西宮市 泉水 冴子  
後見人が先に逝くことだつてある

札幌市 三浦 強一  
忙中閑録画テレビの時代劇

藤井寺市 俣野登志子  
子を見れば親の輪郭見えてくる

唐津市 井上 勝視  
残り時間見詰め金婚二人旅

八尾市 宮崎シマ子  
珍しく今朝は雀が鳴いている

堺市 澤井 敏治  
万策が尽きた時でも腹は減る

鳥取市 有沢せつ子  
気を若く持つても皺が邪魔をする

岩出市 村中 悦男  
遠い耳聞こえたような振りもする

富田林市 中井 アキ  
花柄の杖に昭和が頼りだす

三田市 上田ひとみ  
頑固さに磨きがかかりいい色に

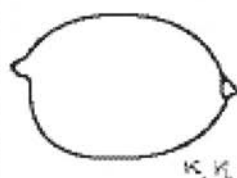
堺市 荻野 像山  
農耕の歴史伝える古代米

# 共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 738句)



## 「人柄」福士慕情選

復興ヘスクラム組んで立つ勇者  
人柄が決めた相手と真珠婚  
両陛下の黙祷じんと身に滲みる  
人柄が良すぎて個性出てこない  
人柄はブータンルックスはインド  
何事も自分の事は後にする  
酒呑むと変な人柄曝け出す  
ほろ酔いで陽気泥酔して毒気  
人柄は良いが女難の相がある  
人柄はとても良いがと語尾にごす  
人情が濃くて時どきお節介  
悪ふざけはおよしピュアなお人です  
人柄に免じ許してあげましょう  
清濁を併せて吞んで動じない  
人柄を四捨五入して褒めておく

海南市 堂上 泰女  
河内長野市 八木加修子  
唐津市 坂本 蜂朗  
豊中市 池田 純子  
鳥取県 斉尾くにこ  
福岡県 林 さだき  
京都市 坪井 孝一  
砂川市 大橋 政良  
大阪市 小谷 集一  
河内長野市 針生 和代  
豊中市 松尾美智代  
堺市 志田 千代  
八尾市 村上ミツ子  
枚方市 海老池 洋  
三田市 北野 哲男

## 「人柄」池森子選

先生と呼ばれて恥をかくなかれ  
作品にじわり出ているお人柄  
飲み食いをすれば育ちが前へ出る  
毒舌も笑って聞けるお人柄  
人柄が良すぎてちよつと物足りず  
人柄はやさしげな目が物語る  
老いて尚心美人にある気品  
人柄は良いのに神さまはそつぱ  
品性を問われる人の叱り方  
逆境で写しだされた人模様  
春風がいつも吹いてるお母さん  
一期一会大切にされるお人柄  
人柄もひとり暮らしで活かされず  
人柄は徳積む親のプレゼント  
無口の父背中にあった句読点

鳥取市 土橋 螢  
大阪府 上山 堅坊  
唐津市 坂本 蜂朗  
高槻市 島田千鶴子  
河内長野市 坂上 淳司  
大阪市 平嶋美智子  
大和郡山形 坊農 柳弘  
西宮市 泉水 冴子  
京都市 高島 啓子  
羽曳野市 永田 章司  
三田市 尾崎 一子  
姫路市 古川 奮水  
大阪市 吉村 一風  
羽曳野市 福田 悦子  
西宮市 山本 義子

七十点はまずまずのお人柄

苦労したことが人柄磨きあげ

底抜けの明るさきつと苦勞人

言葉尻に優しい人と窺える

控えめでちょこつと目立つ藪椿

褒めなくていいよ一人で咲いてます

意地っ張りだけど人情には脆い

悪い奴ぶつてるとこもちよつと好き

いい人やとほめて便利にこき使う

人がええだけではあかん男はん

人柄に引かれた愛のほんまもん

人柄に惚れたと母がまず乗り気

じゃじゃ馬に親が見込んだお人好し

お人柄良いけど妻子泣いている

人柄であろつかドアは半開き

エレベーター最後に降りるお人柄

側に居てハートほっこりさせる友

ハイという返事すずしい人である

イケメンもはるか及ばぬ人間味

一枚の自筆が温い年賀状

ひら仮名がお人柄からにじみ出る

人柄がぐいっと人をひきつける

全身にオーラ輝く人気者

藤井寺市

可児市

鳥取市

八尾市

貝塚市

枚方市

堺市

長岡京市

西宮市

神戸市

香芝市

茨木市

高知市

奈良市

松江市

大阪市

和歌山市

橿原市

弘前市

篠山市

西宮市

松江市

河内長野市

太田扶美代

板山まみ子

福西 茶子

宮崎シマ子

石田ひろ子

伊達 郁夫

村上 玄也

山田 葉子

足立 茂

白川 淑子

大内 朝子

藤井 正雄

小川てるみ

岩本 浩二

石橋 芳山

高杉 力

堀 富美子

居谷真理子

今 愁女

遠山 可住

山本 義子

川本 畔

黒岩 靖博

好き勝手生きていつでもホトケ顔

何事も自分の事は後にする

お人柄犬の躰もゆきとどき

人柄を維持するサブリ飲んでます

強面されど人の輪二重三重

人柄が別れた後にしのばれる

人柄に似ておにぎりも大柄だ

人柄がでんぐり返る三次会

棟梁と呼ばれる人に角がない

肩書きがとれて人柄試される

五十年経てば人柄丸くなり

人柄を貧乏神に見込まれる

自負は自負相手もたてるお人柄

人の輪を大きくしてるいい笑顔

悪ぶっていても人柄こぼれてる

五欲捨て世に出る人の白い髭

懐の広さと言葉にある気品

金釘の人柄にじむ温い文

集団で良い人柄が光ってる

人柄はいいがとこまでの話

控え目に見せてマグマを抱く女

人柄を座った椅子が変えてゆく

非常時に人柄透けて見えてくる

河内長野市

福岡県

神戸市

八尾市

田辺市

堺市

鳥取県

紀の川市

紀の川市

大阪府

米子市

大阪府

京都府

橿原市

大阪市

静岡県

神戸市

奈良市

松原市

鳥取市

大和高田市

泉佐野市

大阪狭山市

村上 直樹

林 さだき

山口 美穂

田邊 浩三

岡本 昇

遠山 唯教

佐伯 やえ

宇野 幹子

辻内 次根

高杉 力

中原 章子

升成 好

都倉 求芽

安土 理恵

井丸 昌紀

蘭田 獏香

山田婦美子

米田 恭昌

市川 雄太

森山 盛桜

鍛原 千里

稲葉 洋

矢野 梓

人柄を語るとそれが詩となり

陰日向なくて誰にも愛される

釘一本打たれ人柄試される

表から見る人柄にある尻尾

飾り気のない人柄が惹きつける

煽てられはい判を押すお人

お人好しすぎて通帳いつもゼロ

だれからもちゃん付けされるお人柄

自販機にだつて義理立てしてしまう

人の輪を大きくしてるいい笑顔

誰も見ていない所でゴミ拾う

庇いたいガラスのようなお人柄

人格にはれて確かな道をゆく

温厚な人柄だから物足りぬ

欲ハナクイツモ静カニ笑ッテル

人柄を箸の運びに視かせる

控え目に見せてマグマを抱く女

人柄の誤算に喘ぐ自己嫌悪

吃水線君の人柄見届ける

秀句

人柄へ添える微笑という化粧

春風がいつも吹いてるお母さん

人柄が見える野菜を買いに行く

大阪市 川端 一步

尼崎市 長浜 美籠

松山市 高橋 宏臣

米子市 政岡未延子

神戸市 山口 光久

大阪市 岩崎 公誠

和歌山市 古久保和子

河内長野市 坂上 淳司

弘前市 高瀬 霜石

橿原市 安土 理恵

和歌山市 柏原 夕胡

豊中市 藤井 則彦

青森県 松山 芳生

鳥取市 春木圭一郎

藤井寺市 鈴木いさお

和歌山市 喜田 准一

大和高田市 鍛原 千里

高槻市 富田 保子

富田林市 中井 アキ

富山市 有澤 嘉晃

三田市 尾崎 一子

倉吉市 中村 毅

言葉尻に優しい人と窺える

下積みをつんでまあるいお人柄

親切を撒いて男はまだ独り

やさしさに触れ膨らんでいく希望

欲望の電車で墜ちていく品位

褒めなくていいよ一人で咲いてます

人柄がにじむ話と身のこなし

人柄を箸の運びに視かせる

たおやかな女性の素顔知りたがり

悪ふざけはおよしビュアなお人です

一椀の品格掬い二人の夜

人柄でしようか相談したくなり

人柄が見える野菜を買いに行く

人柄を煮詰め直して楽に生き

カンパスにあふれる裸婦の品の良さ

人柄であろわかドアは半開き

人柄も好い根性も座つてる

南無阿弥のあたり人柄が分かる

人柄を語るとそれが詩となり

秀句

遺品から姑の品格立ち上がる

人柄は桜の花が咲いたよう

里山の命人柄映え渡り

八尾市 宮崎シマ子

香芝市 大内 朝子

羽曳野市 徳山みつこ

富田林市 関 よしみ

松山市 高橋 宏臣

枚方市 伊達 郁夫

京都市 三宅 満子

和歌山市 喜田 准一

日高市 根岸 方子

堺市 志田 千代

弘前市 岡本 花匠

鳥取市 倉益 一瑠

倉吉市 中村 毅

宝塚市 丸山 孔一

吹田市 大谷 篤子

松江市 石橋 芳山

八尾市 前田 紀雄

松江市 松本 文子

大阪市 川端 一步

富田林市 中崎 深雪

鳥取県 飯野 菖子

鳥取市 平尾 菜美

## 英語 de Senryu ④

麻生路郎句集『旅 人』

英訳 吉村 侑久代  
(岐阜保健短期大学)

春の日は ねまきのままで 暮れていく

*spring day  
is getting dark  
in pajama*

収入の足りないところで うまがあひ

*since we find out  
our small incomes--  
it makes us go great*

### ～リバーウィローのため息～

大正 14 年に古川柳の研究誌『やなぎ樽研究』(1925～1934)が、岡田三面子、阪井久良伎、今井卯木、西原柳雨らを執筆人に迎えて、岐阜の柳書刊行会から創刊されました。全 104 冊のうち創刊号から第 5 巻第 1 号(1929)までの 45 冊の見開きに、上床新助による英訳川柳が掲載されました。毎号 3 句、総数 135 句の数です。上床新助は前年に出した成見延亀との共著『英訳川柳名句選』出版によって、川柳英訳の受容の時期到来を感じたのかもしれませんがね。読者は川柳の英訳に、言葉の世界の不思議さと珍奇さを、あたかも怖いもの見たさのような感覚で楽しんだのではないのでしょうか。『やなぎ樽研究』から上床新助の英訳を紹介しましょう。内容の説明に語彙を吟味して、状況を理解しやすくした英訳ですね。

「あいさつに女は無駄な笑ひあり」(古川柳)

In exchanging salutations/Almost all women will use/Empty words and forced smiles

# 飼う

吉岡 修選



胸奥に飼ってる鬼を持て余す  
飼い主によく似た大だよく吠える(中)  
じゃじゃ馬がいて一日が面白い  
胸に飼う夢追い虫が動き出す  
ブライドという厄介な虫を飼う  
飼主に聞こえるように大叱る  
年金で食費共有するベツト  
ゴキブリは飼われていると思ってる  
智恵袋影武者として飼っている(角)  
私を飼うのが実にむずかしい  
昭和史の中で飼ってた思いやり  
胸に飼う小さな欲を阻めない  
脛かしの鼠一匹飼っている  
飼葉桶牛はセシウムなど知らぬ  
定刻に出社帰宅の伝書鳩  
退職後ひがな一日放し飼いで  
誰よりも先にお帰りのういんこ  
番犬は三食たべて口も利く  
忠実に主人に仕え盲導犬  
年金で妻に飼われている余生  
笑い虫いっぱい飼って恙無い  
善人の顔した鬼を飼っている

比呂朗 蜂 綴 美智代 宏 章 弘 一 美津子 惠 美 子 雅 枝 玄 也 慕 情 則 彦 唯 教 ば っ 茶 子 猯 沓 弘 風 朝 子 勇

バラックで虱を飼った負け戦  
ケータイに夢中子供は放し飼いで  
龍を飼いて天へ翔びたつ時を待つ  
この通り飼いならされて今がある(畜)  
人間に飼われストレス溜めている  
ベツトには糞子供は放し飼いで  
恋に泣き飼っている鳥をとき放す  
物好きで飼ったキリンが育ちすぎ  
人間と猫がけじめのない暮らし(畜)  
九官鳥妻の監視に飼っている  
女好きの虫一匹を飼っている  
飼う前に六法全書読んでおく  
親譲りの貧乏神を飼うて老(畜)  
なつかれて飼うはめになるお人好(畜)  
飼い主が手こずっている腹の虫(畜)  
佳

あずま 美千代 黒 兎 紀 子 扶美代 強 一 公 誠 千 代 光 久 典 子 美 龍 千 恵 子 いさお 渚 彦 注 湖 四 郎 一 粹 霜 石

# 設計

坂本 蜂朗選



家計簿をにらみながらの設計図  
まだ真つ白な東北の設計図  
設計を修正しては生きている(畜)  
設計図何度も引いて老いている  
設計図画いて生れた子でもなし  
設計になかった筈が今白寿  
野心まだある百歳の設計図(畜)  
先に呆けて夫の世話になる予定  
若い日の設計机上で錆びている  
設計になかった親の認知症  
大物の咳で破れる設計図  
設計は大小中の小にする  
妻先に逝って狂った設計図  
設計図子には無断で母の編(畜)  
設計は妻に任せて恙ない  
蜂の巣は神の設計かと思う  
設計がとつても緻密くもの糸  
設計図また反古にする子の主張  
楽隠居設計図では六十五  
設計図無視した嫁と住んでいる  
設計をしている時は夢心地(畜)  
終章は妻に任せた設計図

光 久 霜 石 悦 子 ちかし 孔 一 舞 夢 幸 澄 真 恵 活 子 かつ子 碧 一 粹 堅 坊 殺 准 一 黒 兎 昌 鼓 菜 摘 まみ子 公 一 節 子 慕 情



路 集

設計もせず二軒も家を飲み  
不況にも耐える設計立ててある  
設計の修正せまる痛告知  
生活の設計義理がおびやかす  
年金の箱で設計する余生  
夫逝き義理はもうない設計図  
設計ミスどこにあったか青テン(赤)

人生の指針絆を芯にする  
献立の設計狂う大特(優)

ほんとと古稀設計図など狂うもの(笑)

狭くても花で埋めたい設計図  
改訂のうわさ地獄の設計図

真ん中に安寧を置く設計図  
ありがとをメインに古希の設計図

佳

残高と平均寿命を見比べる  
七回忌見直す寡婦の設計図(後)

コウノトリ見向きもしない設計書  
定年後確かに書いた青写真

設計の余白に播いた花の種

人

設計の理想に遠い現在地

地

人間の設計あざ笑う自然

天

子を増やすプリン線つるキュービッド  
軸

まさか

田中 みね選



階段が運動器具であったとは

ケケケと貯めてまさかの壺の中  
サイレンが曲がる家の方へ曲がる

まさか目をあけるのではと見る檻  
真夜中にまさかと思いいい知らせ

まさかとは思いうが妻に電話する  
子を育てまさか孤独死ないでしょう(後)

同級生まさかあんと同じ屋根  
あきらめた後でまさかのプロポーズ(深)

まさかともやつぱりそうかととも火種  
そのまさかがついに来ました物忘れ

石橋のまさかを知らぬ無鉄砲  
出ていけのこの一発で妻が去り

このひととまさかまさかの五十年  
やつぱりとまさかの色で描く暮らし(編)

生かされてまさかの時の準備する  
まさかのために入れ歯は全部金にする

惚れたのは本気振られたのはまさか  
わたくしが死ぬことなんてありません

船長が先に逃げ出す豪華船  
サル群のボスは絶やさぬ思いやり

そのまさか怖くて医者に行かれない

そう見れば心当りのあるまさか  
元部下が俺の上司になって来る

人生のまさかに備え四股を踏む  
欺されてあげようどうも嘘らしい

出合いとも知らずまさかを切り捨てた  
警官が酔って引き逃げする時代

日常茶飯に聞いている詐欺がくるまさか  
ライバルが白旗振っている まさか

音も無くまさか膝まで積る雪  
天変地異まさかの事が多すぎる

棚ばたの裏に隠れていたまさか  
目が合えばニコツと笑う缶ビール

ロボットも札束みれば心揺れ  
ご本人だけが知らずにいる噂

佳

妻が外でわたしを誉めているらしい  
想定外に翻弄される日本地図

まさかとは思いうが国が潰れそう  
脳みそがでんぐり返るハプニング(上)

高校を出るまで確か男の子

人

専門家はまさかの時も喋るだけ

遺言書僕の名前が抜けている

天

こんなにも亡妻を頼っていたんだな  
軸

逆転のまさかに天狗青ざめる

准一

客山

ひろ子

日の出

かずみ

雅明

泰女

菜摘

智加恵

朝子

霜石

美義

玄也

千鶴子

義雄

上山堅坊

千鶴子

# 初歩教室

## 題一 掴む

鈴木公弘

まずは新しい教室生の皆様のためにご注意を申し上げます。①与えられた題は句想のヒントですが、その言葉を自分流に改変しないこと②句作にあたって理解しているつもりであつても必ず国語辞典を開いて題の正確な意味を把握すること③句の内容は具体的であること(ただし目に映ったことを羅列したような句「物の説明や事態の報告」にせず、自分の感情を入れて描くこと)④誤字・脱字のないよう確認して提出すること⑤川柳文芸の成立過程から考えて長句(五七五)のリズムを維持すること(とくに中7の部分が8音字にならぬよう注意すること)……これだけは守っていただくかと思つています。

原 頑張ろう勝利この手に掴むまで 秋 星  
添 がんばろう東北らしさ掴むまで  
原 あの人を掴み所がまるでない 宏 之  
添 春が来て掴み所がさらに消え  
原 大臣の掴みどころのない答弁 眞砂子

添 大臣の掴みどころのない答え  
原 掴み取り首の上から手が伸びる(山) 弘 子  
添 安売りの首の上から手が伸びる

「…の…の」という書き方を「の重ね」と言つて評価しない選者もおられますが、句に閉じ込めた思いを強調したい時には使つてもよいと思います。

原 夢つかむ孫の手助けそつとする 宏 造  
添 夢つかむ孫のためにと預金する  
原 掴みがねえ」業界用語で気取つてる 信 次  
添 「掴みがねえ」業界用語言つてみせ  
原 驚掴み傷跡のこり医者通い 一 兆  
添 百円を掴む競争して医者へ  
原 あぶく銭掴んだけれど内緒です 裕 美  
添 掴む力ネ博打に勝つたとも言えず

あぶく銭は借金の原動力になるとも言われます。ほどほどに……

原 待ちに待つ春を掴む日目前だ 智 加恵  
添 待ちに待つ春を掴む日すそこ  
原 一人娘(こ) 掴んだために養子の身 洋 一  
添 一人むすめを掴んだために養子です

原句の「一人娘(こ)では4音字です。「むすめ」と書いて構いません。

原 棚ボタは両手で掴み物にする 武 臣  
添 棚ボタを両手で掴み物にする  
原 バレンタイン幸せ掴む未婚男(山) 久 子  
添 バレンタイン彼女掴んだ独り者

原 雲掴むような話の福笑い 一 泉  
添 雲つかむような法螺吹きにも春が  
原 二次会だむんずと腕を掴まれる(山) 則 彦  
添 二次会へ掴んだ腕を放さない

さて教室生の皆様「掴む」と「掴まれる」とは同じでしょうか……。結論を申し上げます。まったく別の言葉です。しかも掴むには自分の意思(意志)が含まれていますが「掴まれる」は自己の意思とは無関係であり、自分は受け身の立場になります。こうした似たような言葉でありながら違う意味の動詞は他にもたくさんあります。しっかりと国語辞典を読んでみてください。

原 赤い糸掴んだ途端夢もさめ 定 廣  
添 赤い糸掴んだとたん夢がさめ  
原 法和長く何も掴めぬまま終る 温 子  
添 法話長くて何も掴めぬまま終わる

ここで問題は「掴む」の否定形が認められるか、ということです。認められないと二刀両断にされる方もあるでしょう。しかし「掴む」努力をしたが相手の話法や取り留めのないダラダラ節のために、結果として期待外れだったので「掴めなかった」という意味が句から読み取れるようであれば、認めてよいのでは……と考えます。

原 口べたがハートを掴みゴールイン 青 生  
原 パーゲン会場掴み引つ張る人の服 加 修子

右二句にはとくに問題はありませんが、中8になる傾向が見えますので、ご留意ください。

原料好き彼のハートを驚掴み  
添お好みの料理作って彼つかむ  
原ちいっちゃん人差し指を掴んでる きつこ

可愛らしさを強調したい意図はよく伝わってきますが、上6になりますので「ちっちやい手」でもいいかと思ひます。

### 【準入選句】

しあわせを掴む人生観覧車 (獨)  
無をつかみ産声あげた辰の年  
勝負事チャンスは掴み攻めたて  
勝つために相手の弱み掴みます  
幸運は呼んでも来ない掴むもの  
みどり児の掴む力の強いこと (龍)  
師の影をうっかり踏んでコツ掴む  
大臣の尻尾掴んで振り廻す  
運掴み度い一心のくじ売り場  
掴み所無き遺伝子に叱咤する (高)

「掴みどころ無い遺伝子を叱咤する」

人魚姫掴むと海が深くなる  
幸運を掴みたいから笑つとく

右八句はいずれも「掴む」を使つておられます。細かいことを申し上げるようですが、出題は「掴む」です。注意力の育成と「つかむ」行為の深さという観点から旧字体を

あえて出しております。課題の漢字を用いていただくよう、お願いしております。また、冷子様の「度い」は「たい」と書いてくださったほうがよかつたと思ひます。

酒飲んで苦手な踊りコツ掴む  
飲みながら左の乳も掴む子よ  
鬼は外掴む豆数八十の路  
マツサージコつを掴んで喜ばれ  
なでしこは夢を掴みにロンドンへ

### 【入選句】

ポーナス日諭吉掴むが夜の街  
や言葉の寸詰まり感があります。「ポーナス日諭吉掴んで夜の街」でよかつたのではないでしょうか。

餅搗きの杵掴む背に汗を見る (安)  
掴み取り欲を出し手が抜け出せず  
目が見えぬつかんだものは白杖  
努力してレギュラーの座掴み取る  
おばちゃんが驚掴みする試供品  
掴んだが頼りない奴やがてボイ

作品としてやや無情な気もしますが、これが現実でしょう。

泥かぶり掴みどころの無い泥鰌  
くじ売場夢掴みたい人の列 (山)  
当たりくじ掴むことなく年が暮れ  
前述のように「掴む」を否定しておられます。しかし、掴みたいという意志があることと現実感を考慮して入選としました。

浜辺での父子で競う掴み取り 志郎  
この句は「父子」を「おやこ」と読まなければ成立しません。ルビを振られるよう、お勧めします。

大衆を掴む白い歯磨きの日 安子  
これ以上磨くとヒットラーになりますよ。  
居酒屋の掴みどころのない話 堅坊

### 【佳句】

掴みどころないが安らく友の声  
幸せをみんな掴んで気づかない (高)  
休肝日ボトルを掴む手を叱る  
掴んだが諭吉はじつとしていない  
空けておく両手は愛を掴むため (白)

「空けておく両手に愛を掴むまで」  
亭主の尻尾掴んだ途端愛がさめ (備)  
夢のなか掴んだ銭は木の葉っぱ  
親切に掴む棒あり風呂便所  
掴んでもつかみきれない人の情 (株)  
損をした笑い話で客つかみ  
【今月の推せん句】  
君と掴んだ夢のかけらが落ちている

打ち明けて掴み所の無い返事 酒井 真由  
運掴む雑魚は眼力持つっている 山本 エミ  
石田ひろ子  
【私の句】  
月光とあしたを掴む話する  
陽炎を掴む野望は捨ててない  
(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

# 秀句鑑賞

同人吟 早川 遡行

— 3月号から

秀句鑑賞も、いい句に出会ふと嬉しくなつてしまします。今月もたくさんいい句と対峙することができこんな幸せなことはありません。いい句を見逃さないことも鑑賞するものの特長であり使命であると考えます。

古いといわれるかも知れませんが、川柳は五、七、五、の十七音字からなる定型詩であります。相撲でいう土俵と同じで、この形は安易に壊すべきではないと私は考えています。

音律からいって、上五の字余りなら許されると解釈する人もいますが、相撲でいう勇み足、サッカーでいうオフサイド、と同じで、これを認めたらスポーツとして成り立たなくなるのと同じように、川柳も定型詩でなくなつてしまします。

川柳は十七音字の形を最も理想とする文芸で、その音律こそ川柳にふさわしいリズムとして、私だけでもこれだけは厳密に守つていきたいと考えています。

## 芸術を超えたカラファエロのエロス

鈴木 いさお

ミケランジェロ、レオナルド・ダヴィンチと並び称されるルネサンス時代の画家ラファエッロ。ヴァチカン宮殿の「著名の間」をはじめ多くの肖像画や、聖母画を描き、「キリストの埋葬」「アテネの学堂」が有名。

「シエナ大聖堂の三美人」あるいは「愛された人」等、優美で温雅な聖母画をエロスと見るかは、鑑賞する人の勝手。しかし大聖堂や宮殿に描かれたラファエッロなどの画に接し、圧倒されない人はまずいないであらう。

## 円満を妻の小さな掌が囲う

牧野 芳光

家庭内がうまく纏まるかどうかは、妻の手腕に拘わることが多い。したがって男たるもの家庭内では細事にわたつてむやみに口出しするべきではない。のんびんだらりとして、妻の指図に従っているのがいいばん。男は外で、女は内で、その分担を心得てさえいれば家庭内は決して乱れることはない。

## 厨房に男ひとりの具を刻む

竹村 紀の治

男性の料理教室がいま流行っている。私の街でもそんなサークルがあつて、結構人気があるようである。一人になつてからでは遅いと、今のうちから備えておこうというのでしよう。解る気がします。

でも、やつていと結構楽しいという男性もいて、こうなると奥さんも大助かり、羽根を伸ばして旅行など、羨ましい限りですね。でもこの句、何とも寂寥感が溢れていて、男の哀愁みたいなものが感じられないでしょうか。

未婚男子が急増している昨今、自分で料理などしなくても、スーパーやコンビニで充分生活出来ていけるのでしょうか。

## 乗り換えた駅から雪になる予感

木本 朱夏

なんと文学的な句であることか。川端康成の、国境の長いトンネルを抜けると雪国だった、で始まる小説「雪国」を思い出します。

主要線からローカル線に乗り換えいよいよ山間地へ向かつて進んで行くのでしょうか。その先はふる里なのか、温泉宿なのかは解りませんが、一つの物語が始まろうとしている。

雪になる予感、これが雨だった、嵐だったら興を殺がれるところですが、雪で物語性が出てきたような気がします。

## 違つ靴履けは違つて見える街

高瀬 霜石

何気ない情景をさりげなく句にまとめ上げる手腕はさすがである。靴を替えただけで街の様子が新鮮に変わって見える。心の変化である。赤い服を着て戦闘態勢に気持ちを切り替える女性。ネクタイを替え新たな闘志で職場へ向かうサラリーマンの心情がこれである。晴れた御空に靴が鳴る―である。

## 反論を浴びて私が磨かれる

岩佐 ダン吉

人間は逆境の中で強くなっていく。特に戦中戦後を不屈に生き抜いてきた私たちは、その虐げられた暮らしの中で、不撓の精神と強靱な体力を養ってきた。

反論をされるとすぐ挫折したり、投げ出したり、逆切れるような若者とはその根底からして違う。反論を教訓としてなお自身を磨こうとする謙虚な気持ちに頭が下がる。

## 親しいが境界線は引いてある

中居 善信

どんなに親しい友人でも踏み込んではいらない個人の自由、プライバシーというものがある。その一線を超えてしまうと関係は必ず悪化する。特に金銭関係に至っては厳にこれは慎まなければいけない。境界線こそその要であるといえる。

## 継ぎはぎの帆で五十年夫婦舟

藤井 正雄

スタートはきつと真つ新たな希望に満ちた帆であつたに違いない。振り返ること実に五十年。様ざまな出来事、挫折を繰り返しながら、二人の子どもも立派に育てあげた。出世はできなかったが落ちこぼれることもなかった。役目を終えた舟の帆は今下ろされようとしている。

## 豆粕と芋で昭和のド根性

村上 直樹

苦しくも愉しかった、懐かしい昭和への懐古。食べられるものは何でも食べた。その中でもサツマイモとおから、それでさえ容易に手に入る訳ではなかった。それに当時はどこも七、八人の大家族で親は大変だった。子ども心にも、餓死したり一家心中を聞かされ驚愕したこともあった。そんな時代を強かに生き抜いてきた私たち、地震や津波などに負けるわけがない。まさに昭和のド根性である。

## 普天間に吐き捨てられたガムの数

星野 育子

基地移設に採めに採めている普天間。政治が変わり、大臣が変わっても、一向に進展しない現実、住民の怒りは頂点に達する。そんな現状を痛烈に批判して詠まれたこの句に敬意を表したい。素晴らしい一句である。

## バーゲンを待つて今年の流行物

板山 まみ子

流行を追つて金に糸目をつけず飛びつく人と、流行が一段落して安くなったところで腰をあげる人の二通りがある。前者は主に若者で、後者は儉約家か主婦というように相場は決まっている。流行が過ぎたからと言って廃れてしまった訳ではないので、充分ファッションを楽しむことができる。でもバーゲンとなると早い者勝ち、急がなくなっちゃ。

## 着膨れをスマートに剥ぐ春の風

西村 りつゑ

それにしても今年日本海を襲った豪雪は凄しい。地震に津波、そして豪雪と、日本はまさに自然の脅威にさらされている感じである。恥も外聞もなく着こんだ服を、春の風がスマートに剥いでくれる。そんな日が一日も早く被災地に訪れるのを祈るばかりである。

## 名水で心ゆたかに米を研ぐ

岸 桂子

名水というからには、山紫水明風光明媚なところでしょう。都会で飲むカルキ臭のする水道水と違い、それは命に染み透る聖水のような清らかなものであるに違いない。私の故郷木曽も貧しいが水だけは自慢できる。そんな名水で炊かれたご飯のまずさからう。答がない。

— 水煙抄

# 秀句鑑賞

— 3月号から

川崎 ひかり

本がまた催眠術をかけに来る

田中 由美子

私も読書大好き人間ですが、若い頃は読み始めたら最後まで読み切れたのに、今は数ページ読んだらこくりコクリです。若い積りでも年を感じます。

世の中の裏を見てきた目を洗う

福井 菜摘

表裏のあるこの世、裏の方に真実を見る事もあります。でも裏ばかり見てたら人間不信になります。目を洗い乍ら真実を見極めたいものです。

歌手なのか曲名なのかも分からない

高杉 力

本当に今頃は、歌手なのか曲名なのかチンブンカンブンです。ひばりちゃんの歌と共に過ごした私達、いい時代でしたが昭和もだんだん遠くなります。

残高と絆比べる預金帳

木田 比呂朗

絆を強くするにもお金が要る時代。冠婚葬祭、孫の入学卒業等々、預金帳がまたかと思えています。

良い意見出るのは会議済んでから

松田 聡

そうなんです、散会となり靴を履いてからの意見が的を得ていて没にするのが惜しいのです。

コンビニが母の味だと子は覚え

藤田 千休

おふくろの味なんて今は昔の事です。コンビニは、何でも揃い美味しい。手間をかけずチンして並べるだけ。子供はコンビニの味がおふくろの味になるのでしょうか。

ほどほどの悩みがあつて惚けられず

上山 堅坊

ほどほどの悩みって良いですね。まして惚け防止にもなっている。人様から見れば悩みと言えない悩みでしょうか？

大叱る口調で夫に指示をする

木村 青生

吹き出しました。私も夫にこの句のように言っているのでしょうか。反省また反省。

こんなことにわくわくしてた若かった

羽田野 洋介

懐かしく若い頃を思い出しました。一寸した事にも心おどらせ幸せ彩に染まって居ました。若いって素敵で幸せな時期です。

出ておいで春の息吹よ虫たちよ

永見 心咲

年と共に寒暖がこたえますが、今年は特に寒く感じます。春よ来い早く来い!!

まだ薬間違う程はほけてない

高野 不二

毎日飲む薬間違ったら一大事です、まだしつかり飲んでる様子安心しました。でも薬間違う様になったら、毎日薬飲んでる私どうしたら良いのでしょうか。

百円玉ちよっと嬉しい部屋の隅

石田 ひろ子

朝掃除していると、お日様に反射して、きらりと光る百円玉。何にか百円玉以上の効果でこ機嫌にして呉れますよね。

仏壇のパバと乾杯子の門出

北村 松風

苦勞しての子の門出。きつとパバも天国で喜んで呉れますよ。お子様に幸多かれと祈って居ます。



## 重要なリズム(1)

ちょうど百年前の一九二二年に発表された文部省唱歌の「春の小川」は、二度ほど歌詞が変わっているようですが、一般に知られているのは一九四七年版の左記のものです。

春の小川は さらさら行くよ

岸のすみれや れんげの花に

これに続く歌詞は書かなくても自然に出てくるでしょう。そうです。「すがたやさしく 色うつくしく 咲けよ咲けよと ささやきながら」です。どなたも、あの優しく軽やかなメロディーと共に思い出したはずです。優れた川柳が覚えやすく、いつまでも記憶に残っているのはこれと同じことで、七五調のリズムと一緒に頭に沁み込むからです。

このように、川柳にとってリズムはとても重要な要素であるにもかかわらず、無頓着な人が多いのではないかと、思うことがしばしばあります。私が選を担当させていただいている「愛染帖」の応募作品の例で言えば、

ケータイが筆不精を加速する

右の句、音読するとリズムが悪いのが分かります。なぜ悪いのでしょうか？その原因は、「中六」になっているためです。何とも感じない人は七五調のリズムに鈍感なのでしょう。

「この程度なら許容範囲ではないか」と思われるかもしれませんが、しかし、大会などになりますと他の句との比較になりますから、中六とか中八は大きなハンディキャップになります。「リズムの悪い句は採らない」という選者が多いのに加え、中六や

中八を採ると苦情や指摘を受けますから、自身では寛容であっても、選では内容を問わず撥ねてしまうのです。入選するとかしないという話は文芸の本質から外れたことですが、悔しい思いをしないためにも充分な配慮が必要ですよ。

また、ひよつとして、先ほどの句は音数を数え間違えて中六になってしまったのか？という気もしています。

川柳は十七文字ではなく十七音ですから、文字数ではなく音数を確認しなければなりません。

「ふでぶしゅうを」は七文字になっていますが「しよ」は拗音であり、これだけで一音ですから「六音」になります。すなわち、文字数は五七五の十七文字なのですが音数は、五音・六音・五音の十六音になっているのです。

音数の数え方で面倒なのは、この拗音と促音だけです。次の「しゃかい(三音)」と「がっこう(四音)」との違いさえしっかり理解しておけば、間違ふことはありません。

「しゃかい」字数は四文字。「しゃ」は拗音で、これで

「一音」になるので、「しゃかい」は三音。

「がっこう」字数は四文字。ちいさな「っ」は促音で、

これ「一音」なので、これは四音。

ただし、文芸は算数と違います。五十七五十七音以外はすべて間違い、というものではありません。皆さんもお気付きのように、破調であつても、句会や大会で入選している作品もあります。どの程度の破調なら受け入れることが出来るのかは人によって異なります。もちろん、厳格な定型厳守派の人々もたくさんおられます。この点も含めて、次回もリズムについて、もう少し検討してみましよう。



## 『麻生路郎読本』余滴

### (8) 河盛家のこと ③

楽原道夫

#### 篤志家仁平

そのほか、河仁を語る豪勢な話は沢山にありますが、私の覚えていたような話のなかにはこんなこともありま  
す。神仏合体の時、大寺神社の境内に  
ある塔が売りに出たとき、それを時価  
で買うてそれをまた大寺さんに寄付し  
た話もききました。(このことは八木  
摩太郎さんも知っていました。当時、  
河仁さんには勝てんなあと堺の人は  
噂したそうです)(葎乃書簡)

大寺神社とは、開口神社(堺市堺区甲斐町東2丁1-29)のこと。開口は、大阪湾の出入り口、という意味。江戸時代まで大念仏寺という寺が境内にあったので、「大寺さん」と呼ばれていた。「葎乃書簡」中の

「神仏合体」は、「神仏分離」の誤りである。一八六八年(慶応4年)に、神仏分離令が出され、寺院・仏像などを破壊する廃仏毀釈運動が起きた。



開口神社三重塔(堺市史より転載)。昭和20年7月10日、堺大空襲で焼失、現存せず。

毀釋論の激しかった時代に於て三層塔がど  
うして残存したかは少なからぬ興味を唆る

譚であるが、茲に至つた徑路を示せば明治初年に於ける世相の一面が展開されるのである。

則ち塔は明治六年頃既に入札に附せらるゝ筈であつたが、鐘樓などと共に河盛仁平の手に歸した。仁平は大寺に以前から融通金を出してゐた關係があつた。然も塔の移轉命令には言を左右にして實行せず、當時權勢並びなき仁平の事として縣官も手の下しやうがなく其處分延びくになり、其内に分離令も緩み移轉する必要もなくなつたので、仁平は改めて之を神社に寄附したのである。寺塔が權勢家の庇護の下に残存したとは、如何にも明治初年らしい感を與へる。(明治維新神佛分離史料中巻『堺市史 第三卷』昭和5・3・31)

二代目仁兵衛も初代と同じく、いや初代以上に、困っている人を助け、神社仏閣への寄進を惜しまなかつた。

・安政5年(一八五八年)、弘前大津波で十三濁川の味咲橋流失。四百余両で榮寶橋を架設し、二百石の白米寄付。

・函館と青森間にある島の弁財天堂再建のため、七百両寄進。

・十三濁川上流に二寶橋、七腰内の今泉に架かる中里橋を架け替え、多寶橋と改称。



塩釜明神の屋根替えに二百両寄進。近くの枝川に木寶橋を架け、鴨形に架かる鴨形橋を架け替え、善寶橋と改称。

金比羅神社に千両寄進。

味咲の深津明神へ二百両寄進。

奈良の一言神社へ千二百両寄進。

元治元年（一八六四年）、法隆寺太子堂再建のため五百両寄進。

奈良の春日明神へ五百両、橋寺へ三百両、岡寺へ三百両、志貫の毘沙門天へ三百両寄進。

慶応元年（一八六五年）、和泉の横尾寺に三百両、藤井寺の葛井寺へ三百両寄進。

明治6年（一八七三年）、藤井寺の道明寺菅原神社へ五百両、羽曳野の菅田八幡宮へ二百両、堺の家原寺の文殊菩薩へ二百両、四天王寺太子堂再建の時、南門を一人で建立し、更に三百両寄進。

明治13年（一八八〇年）、住吉神社へ千五百両、堺の百舌鳥八幡宮へ二百両、金刀比羅神社へ二百両寄進。

明治16年（一八八三年）、弘法大師の千五十年遠忌（明治18年）に向けて、高野山不動堂と順禮堂再建のため、千五百両寄進（筆者註：不動堂と順禮堂は、准胝堂と孔雀堂の誤り）。

〔河盛仁平氏履歴〕朝日新聞、明治18・6・5参照

・四天王寺に聖徳太子尊像を寄進。  
・大阪の住吉神社、堺の大鳥神社に高御座を奉納。  
・大和川中流に本橋架設。

・安政元年（一八五四年）の大震災の時、死者の供養のため本派本願寺に千両を寄進。

・明治元年5月13日、大和川洪水の時、救助船を出して人命を救助。

・高野山金剛峯寺の准胝堂、孔雀堂再建。

（堺市史第七巻別編）昭和5・3・31参照

〔河盛仁平氏履歴〕朝日新聞と『堺市史』の記録に残っているもので、寄付金は、江戸時代に七千二百両、明治時代になってから三千百両である。〔朝日新聞〕明治18・6・5に、〔又京都本派本願寺へ納たる金は實に夥敷其他は記すに遑あらざれば都て書きぬ。以上列記するが如く、普く諸國の神社佛閣へ寄附したる金は實に數万圓の額に上り他人の得て及ぶ所にあらざれば世人同氏の志に感ぜざるはなく（略）とあり、ざっと數万円だと記されている。金の価値は何を基準にするかで大幅に異なるが、米の値段を基準にすると、明治7年の一円は約七〇〇〇〇円に相当するようだ。約三億數千萬円もの大金を寄付していたことになる。

河又・大醬株式会社社長の河盛幹雄氏が、茶舗の「つば市」の社長からの受け売りだがと断つて、次のようなことを教えて下さった。俗に「京の着倒れ」「大阪の食い倒れ」というが、「堺の建て倒れ」という言葉があったそうだが、堺の商人は、儲けたお金で建物を建てる。建物といつても自分の家ではなく神社仏閣の建物で、そのために寄付をするのが堺商人の常識だったということである。

河仁の没落

河盛仁平の噂はなしは、どれをとりあげても真似のできないことばかりです。河仁へはいつも相撲取りが出入りしていたとか、法事とか何かの時は綺麗どころが何人も揃いの前掛けをしてみ手伝いにきたとか、しかし、こんな話のところは二代目の時代ではなかったでしょう。みかん船でお大尽になった紀文が、吉原でお大尽遊びをしたような話になっていますが、私は二代目説だという意見に納得いたします。河仁もそうですが、紀文にしても淀屋辰五郎にしても一代で豪商になるような人物は、金の値打ちをよく知っています。

— 95 —

すから、そんな馬鹿な金は使わない筈です。

### (中略)

そんな贅沢でも何でもない河仁が潰れたのは、堺にとらや銀行というのができて、その責任者にまつりあげられたのが原因です。

「あんたはじつとしてはったらよろしいのんや、私等があんじようしまつきかに……」

という具合にそのかさされたのでしょう。とうとう取り立てを食う破目になったのです。どの世界でも二代目、三代目は初代の苦勞を知らなすぎます。(霞乃書簡)

霞乃は、河仁へ相撲取りや綺麗どころが入りしていたことに対して、馬鹿な金を使うものだと言っているが、筆者は少し見方が異なる。仁平は初代とは比べものにならないくらい家業を発展させた人物である。堺の権勢家となった仁平が力士を最頂にしたり綺麗どころを出入りさせるくらい当然であるし、それぐらいの金は仁平の商売からすると微々たるものであったと思うのだ。

仁平の日常は、亡き先代の教えを守り非常に質素な身なりをしていたようだ。

仁平其居常人に接するに恭敬、儉素自ら奉じ、素食に甘んじ、縞の木綿に小倉の帶、是れが名高い河仁の旦那かと想はれぬ程の風采であつた。(堺市史第七巻別編 昭和3・31)

さる程に二代の仁平氏も亦亡父の行に倣ひ其家に在時は元より外に出づる時といへども紺木綿の糊強き衣類を身に纏ひ毫も外面を飾る事もなければ氏に一面識なき者は、僞父か貧乏人の如く思ひ時に不禮の言を吐事あれど後に其名を聞き却て驚き悔るもありしとなん。(河盛仁平氏履歴)朝日新聞、明治18・66)

仁平没落の原因について触れた資料を挙げておく。

没落は、持ち船が風で沈没したためと言われていますが、技術革新の風の中で、帆船から黒船、蒸気船への切り替えに失敗したのが主要原因と推定されています。(堺の醤油屋河又・大醬、河又・大醬株式会社代表取締役社長河盛幹雄、フォーラム堺学第八集、平成14・3)

(技術革新の風の中で、帆船から黒船、蒸気船への切り替えに失敗したのが主要原因

と推定されています)とあるが、社団法人「日本船主協会」のHPの「海運雑学ゼミナール291」の「昭和初期まで活躍した和洋折衷型帆船「合いの子船」」に、「江戸時代を通じて、日本の内航海運の中心となってきた弁財船(べんざいせん)に代表される和船は、明治維新後の海運近代化によって消滅したと考えられがちだ。ところがこの和船、じつは帆装を西洋式に変えた和洋折衷の「合いの子船」として昭和初期まで活躍し続けた。／維新後、明治政府は、和船、すなわち日本型帆船から西洋型帆船への転換による内航海運の近代化政策を推進しようとしたが、北前船主を中心とする日本の内航船主の多くは、これを歓迎しなかった。／当時、国内での西洋式帆船建造能力は低く、船価は、和船と比べはるかに高かった。さらに当時の和船の性能は、西洋一辺倒の明治政府が考えていたより優れており、あえて西洋型帆船に切り替えるメリットがなかったのである」とある。

仁平の時代は、まだ「合いの子船」ではなくて、江戸時代からの「弁財船」であつたと思われる。明治8年9月に、郵便汽船三菱会社が設立されるが、この会社は、内務卿大久保利通の海運政策案に則り、政府が汽

船13隻（明治7年、台湾への軍事出兵の際輸入したもの）を岩崎弥太郎の三菱汽船会社が無償下付して発足したものである。筆者の同僚の社会科学論に聞くと、日本の国内海運の船が、和船から蒸気船に変わったのは、産業革命を終えてから、すなわち明治の末頃からであり、産業革命以前の日本の技術力では蒸気船を建造することはできず、また海外の蒸気船は非常に高価で手が出なかったのではないか、ということだ。前述の郵便汽船三菱会社にしても、政府が無償で下付することによって発足したことから、蒸気船が非常に高価であったことが分かるのである。

晩年は家業蹉跌を重ねて遂に亦起つこと能はず、歿する年の正月に「自分は裸で出て来て、裸で歸るのだ」と述懐してゐたといはれて居る。（友淵楠庵氏報告）（堺市史第七巻別編）昭和53・31

「晩年は家業蹉跌を重ねて遂に亦起つこと能はず」とあるが、その具体的な原因については、持ち船が嵐で沈没したことが主たるものであると考えられていて、他の原因について言及した資料は見つからなかった。仁平の子孫である河盛久雄氏にお聞きしても、

持ち船が嵐で沈没したためだとおっしゃっていらした。「霞乃書簡」の「とらや銀行」の件は、仁平没落の貴重な証言だといえる。

それでは、いつ頃から商売が思わしくなくなつたのか。

「絵で見る明治商工便覧 第6巻」（昭和62年10月25日、ゆまに書房）に、「住吉堺名所並豪商家内記」（川崎源太郎、明治16年4月）が収録されている。

一面を三分割して、右が「木綿卸商中之町平野嘉平治」、真ん中が「藥種商中之町大道池田平一郎」、左が「鬢附蠟燭商中之町東二丁稻葉義市店」とあり、左端に「木綿卸商河盛仁平」と文字だけある。豪商仁平ならば、全面を使って店前の様子が描かれていて当然である。現に、河内屋本家の木綿問屋の河盛利兵衛や醤油味噌醸造商の河盛又三郎を始め、ほとんどの商店が全面を使って紹介されている。「住吉堺名所並豪商家内記」は、明治16年に発行されたもので、遅くともその前の年くらいには、経営不振に陥っていたのではないか。明治16年、高野山に准胝堂と孔雀堂を再建したが、これは、河仁が傾きかける前に、すでに寄進していたのではないかと思われる。





## (三) 吉良邸跡・堅川をゆく

次の目的地、赤穂浪士が討入りを果たした吉良邸跡に向かう。藤沢周平が描く、『用心棒日月抄』の主人公青江又八郎とその相棒の細谷源之丞は赤穂浪士が討入りする前日まで吉良邸の用心棒をしていたという。吉良邸は回向院の東側にあって、規模は二千五百坪、母屋は六百坪もあった。京葉道路より二筋ほど南へ入った、小さな松坂町公園に吉良邸跡の一部が復元されていた。討入り時の大石内蔵助の気分になって正門前にたずむ。

### 吉良びやかなるお寝巻が戻らけ (柳多留より)

吉良邸跡から少し南側にある本所と深川を二分する堅川をめざす。

「河岸をやわらかくはく帯のような若草、萌黄いろの新芽をつけた柳、そのそばを流れるたつぷりと水量のある川、日はその上にまっぴんなく光をそそぎかけていた。わずかにうねる川波の間にはじける光り、風が吹き過ぎるとき、柳の若葉にきらめいて静まる光り」(『漆黒の霧の中で』新潮文庫)と藤沢周平は堅川を情緒たつぷりに描く。

江戸時代の堅川には橋が少なく、それも一ツ目橋、二ツ目橋、三ツ目橋という名で架けられていた。

堅川の川幅は二十間あまりであったが、頭上には首都高速七

号小松川線が東西に伸びていた。しかも、東側の二ツ目橋からは空堀にされて駐車場や公園になっていたので、昔の面影はまったく無くなっていた。

### 堅川の河岸でまるたを式本釣 (柳多留より)

一ツ目橋(現在は二乃橋)を渡り右に曲がり大川沿いに向かうとそこは、山本周五郎が短編『四人囃し』(新潮文庫『深川安楽亭』収録)のなかで描く水戸藩の石置場があったところだが、今は倉庫群に変わっていた。

大川沿いは、本所深川を水害から護るために鉄とコンクリートの岸壁が延々と続くが、水辺にはテラスと称するレンガ造りの遊歩道がつけられていたので、江戸時代からあった新大橋までその遊歩道を歩くことにする。

大川(現隅田川)に架かる江戸時代の新大橋は百十六間(約二百九メートル)もあった。現在の新大橋は片側三車線の大きな橋で、その下には都営地下鉄新宿線が潜函していた。

その新大橋から東へ向かい、都営地下鉄森下町駅をめざす。

途中、堅川と小名木川の南北を結ぶ六間堀があった辺りを歩く。「六間堀の入口あたりから椋鳥の群れが飛び立った。椋鳥は町の上を斜めに駆けていったん大川に出たが、そこで空高く舞い上がって旋回したと思うと、今度はさっきの道に戻ってきた。初蔵屋敷の木立の中に、掻き消すように姿を消した」(『ささやく河』新潮文庫)と、六間堀の光景を藤沢周平は詩情豊かに描いていた。

## 川柳はじめ物語

森本弘風

子供の目から見ても亡父は世渡り下手であつた。そんな亡父が退職後はいきいきとしていた。若い頃からの趣味である絵を画く時間を自由にとる事が出来るからである。

ところが子供である私は、亡父の世渡り下手の遺伝子は受け継いだが全くの無趣味で、退職はしたものの有り余る時間を潰す方法が見付からなかった。

そんな私がある日、朝日新聞会館へ行くところとちようどカルチャー教室の受講生を募集していた。その中に「川柳入門」という講座があつた。「川柳入門」とあるから川柳の「てにをは」から教えて頂けると思うと共に、川柳を作る事は頭を使うので定年後の呆け防止になるであらうし、その上紙と鉛筆だけで済む、これからの年金生活に経済的にも安くつく趣味だと思い、講師の名前も見ず（もつともその名前を知つたとしても当時

の私には、その人となりはチンプンカンプンの人であつた）に早速受講申し込みをした。さて、初日は片岡つとむさんが講師であつた。講習の受講者は三十人以上で今考えると野村静男さん・大内朝子さん・村上直樹さんなどベテランがたくさん顔を揃えていた。

つとむ先生の講義の最初の数分は川柳とは……という話であつたように思う。その際「末摘花」の句は川柳では無いと言われたが、それまでに私が川柳らしきものとして読んでいた本は、鈴木倉之助校注の「俳風柳多留二編」（社会思想社刊）と、亡父の書架からこつそり持ち帰つた「末摘花」だけだつた。その一冊に駄目の烙印を押されてしまった。

そのショックも癒えぬままに講座の前に配られたプリントの互選をせよと言う。兎も角どんな選をしたか覚えていないが、言われるままに互選をした。

家に帰り妻に講師は片岡つとむさんと橘高薫風さんという人であると話すと、そのお二人は新聞の「なにわ柳壇」の選者であると教えられる始末。それまではこの「なにわ柳壇」も私は読んでいなかった。

次回の講習は橘高薫風先生の講座であつ

た。この講義も、つとむ先生と同じく初めの数分だけは川柳とは……についての話であつた様に思う。後は先生が予め作つていらしたプリントの鑑賞と、宿題として皆さんが提出した句の講評がなされた。

翌月の講座のためにこの日出された宿題の題は「角」で、私も取り敢えず三句作り提出したが、その内の「退職金貰うころには角が取れ」という句に「ご自分の人生を素直に言つて居られる事が大変良いのです」との評を頂戴した。

そんな調子で始めた川柳だが、暫くして薫風先生から川柳塔にお誘いを受け、先生に推薦者をお願いすると雅号を「弘風」としたらとのお話を頂戴し、喜んでお受けした。今では句会の後の懇親会を楽しみに、数カ所の句会に参加している。

川柳は川柳を始めた目的の一つ、定年後の呆け防止には充分役立っているが、今一つの目的、経済的には安価につく趣味としては自分自身の責任ではあるが果たせないでいる。

最後に薫風先生にお詫びすると共に現状を見る。

師匠から頂いた風泣いている である。

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

## 第5回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社主幹

小島蘭幸選

好き嫌いなくす魔法のごまをかけ  
ラーメンに胡麻たつぷりのわたし流  
和え物につきごま足してさあ酒だ  
ごま団子母の元氣な頃想う

開運へ呪文を唱え食べるごま

脳活にごまの力を信じきる

精進料理ごま一振りの円やかさ

春の膳京菜シャキシャキごまびたし

おばあちゃんのごま味噌の味継いでいく

胡麻食べて無病息災今が華

減塩食の一振りのごま美味くする

たつぷりとゴマ入れ亡母の味に似る

ごま振って私の味をしめくくる

つきごまは多忙な主婦の応援歌

ごまいっぱい使ってごまの香に染まる

春菊のごま和え春が匂い立つ

幸せはごま和えも出るフルコース

ルーベにはごまが小判に見えいる

すりごまをかけると踊りだすプリン

ふりかけたゴマが可愛いひなの寿司

### 【準 特 選】

じわじわとごまに嬉しくなる厨  
日本を元気にするとゴマが言う

### 【特 選】

楊貴妃になろうと胡麻を食べている

杵つき製法の「すりごま」  
オニザキの

ごま

長い間親しまれてきた  
オニザキの「すりごま」は、  
名称を変更し、パッケージ  
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、  
元々すり鉢ですったゴマで  
はなく、杵と臼を使った杵  
つき製法で出来た「すりご  
ま」です。

今までと変わらぬ、風  
味豊かな味わいをご堪能く  
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションス  
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

# 第36回 全日本川柳2012年徳島大会

日時 平成24年6月10日(日) 午前9時30分開場  
会場 あわぎんホール(徳島県土文化会館)大ホール  
〒770-0835 徳島市藍場町2-14

交通機関 JR徳島駅から徒歩8分・徳島空港からのアクセス  
(徳島空港→JR徳島駅前)空港連絡バスで28分

宿題 第一部 4月16日締切(当日消印有効)  
(事前投句 高校生・一般の部)

「踊る」 近江あきら選 「大」 小梶 忠雄選  
「鈴」 大野風太郎選 「巡」 礼 長江 時子選

「事前投句 小・中学生の部」  
「自由吟」 堀江 加代選 「おとな」 赤松ますみ選

投句料 二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。  
専用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句を記入・各題

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛  
郵送または郵便振替口座へ送金のこと。(当日消印有効)

投句先 小中高生は投句料無料。  
〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

TEL 06(6352)2210 FAX 06(6352)2433  
(社)全日本川柳協会 宛

宿題 第二部(当日投句、11時10分締切)  
郵便振替口座 009701913575

「野」 心 渡辺 梢選 「カメラ」 新家 完司選  
「燃える」 田頭 良子選

第二次選者 各題二句、当日配布の句箋に記入。  
久保田半蔵門 赤井 花城 岡崎 守

参加費他 四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円 昼食他二、〇〇〇円)  
表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ  
全日本川柳徳島大会実行委員長 井上 博

## △表彰式典・前夜祭ご案内▽

◎表彰式典 平成24年6月9日(土) 午後5時半  
(川柳文学賞・功労者・大会10回連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場  
会場 阿波観光ホテル 5階(JR徳島駅から徒歩2分)

〒770-0833 徳島市一番町3-16-3  
TEL 088(622) 5161

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)  
大会・前夜祭のお問い合わせ先

〒773-0008 小松島市田野町字本村111  
土橋 旗一方

全日本川柳2012年徳島大会実行委員会事務局 宛  
TEL 088(532) 9343

大会・前夜祭参加費の送金先 4月16日まで(必着)  
郵便振替口座番号 016000171140086

全日本川柳協会徳島大会事務局 宛

△宿泊・観光ご案内▽  
宿泊 ホテルクレメント徳島・徳島東急イン他

観光▽ 鳴門公園・渦の道・大塚国際美術館観光  
6月9日(土) 12時45分〜17時 6、900円

集合場所 JR徳島駅前 12時35分  
募集人員 45名様(最少催行人員15名様)

▽秘境祖谷観光(祖谷のかずら橋・祖谷温泉・大歩危峽船下り)  
6月11日(月) 8時30分〜18時10分 8、900円

集合場所 JR徳島駅前 8時20分  
募集人員 45名様(最少催行人員15名様)

宿泊・観光申し込み・問い合わせ先  
(株)エアトラベル徳島 担当・森・菅

TEL 088(625) 5551 FAX 088(653) 2344



# 本社 三月句会

三月七日(水) 午後一時  
アウイーナ大坂

3・11から一年、いま尚被災地では復興に向けての厳し毎日が続いています。

そんな中、三月句会は130名(投句9名)も  
の参加で開催された。初出席は尼崎市の矢野  
野薫・神戸市の毛利きりこ・三田市の上田ひ  
とみ・明石市の杉山ひさゆき・篠山市の酒井  
健二・加古川市の宮本喜明・伊丹市の中野晶  
平の諸氏。

今月のお話は藤井則彦さん。「関西力と  
ニュービジネス」と題して、たこ焼き・回転  
寿司・カラオケ・コンビニなど関西が生んだ  
ニュービジネスと関西人の強さを、同人の  
川柳を交えながら楽しくお話しされた。

一部をご紹介します。

◆インスタント・ラーメン  
キッチン革命児ですカップ麺  
三万日済んで備蓄のカップ麺  
まだ妻と和解できないカップ麺  
◆スーパーマーケット  
スーパード半日過すお年寄り  
スーパードのちらし並べて朝のパン

東吉 千歩

◆カラオケ

酒飲むとカラオケ向きの声になる  
点数が出るカラオケで力みすぎ  
等々。時のたつのも忘れて聞き入った50分間  
だった。(いさお記)

月間賞は、松尾美智代さん(豊中市)  
(司会)美籠・善純(協取り)宏子・真理子  
(受付)りこ・敏治(清記)勝弘

席題 「うふふ」 久保田千代選

見たぞ見たぞ万札を拾いましたネ  
うふふふ豊服のボツケから諭吉  
自販機に百円玉が残ってた  
予定表毒の呑む日はうつつふ  
言葉より妻のうふふが恐ろしい  
雪解けの小川でうふふと水車  
リングから靴までシャネルですうふふ  
大金を握り思わずでうふふ  
遠い日の思い出浮かびつうふふ  
へそくりを今日も数えながら眠る  
楽しみへ眠れぬ夜のうふふふ  
部屋の鍵貸したら彼氏釣れました  
クロワッサンと朝のおしゃべりするレタス  
お誘いにいつもうふふと言う熟女  
内緒ごと含み笑いのコンバクト  
フクシマの春はうふふと芽吹き出す  
うふふと笑いをもらう繁昌亭

遅刻してセーフうふふ助かった  
窓全開春がうふふと手を招く  
うふふからあははトホホへ終わる恋  
春ですなバツとうふふの桜咲く  
つまらない噂ふんわりうふふのふ  
ざまあ見る憎き上司がけつまずく  
殿方を全部味方にするうふふ  
つくしんぼううふふと顔を出す  
合格のやつとうふふの春になる  
大事な話いつもうふふで煙に巻く  
うしろ姿にうふふを見せて通話中  
今更に何を言うのと妻うふふ  
草食の男うふふと煮え切らず  
うふふのふ仕掛通りのプロポーズ  
大入りになにわの春のうふふのふ

佳  
春の夜のうふふふから弾むむ  
うふふと昨日をささむ葱刻む  
うふふと笑う女の身のこなし  
埋み火に風がささやくうふふふ  
お供えのおはき大きめでうふふ  
妻うふふ言うてエプロン渡される  
地  
一直線にあなたに着地するうふふ  
天  
少女の背うふふをのせて弾み出す

舞夢 弘之 敏子 能子 弘之 玄也 時雄 完司 能子 光久 希久子 堅坊 遠野 和夫 敏治 朱夏 完次 朝子 富美子 義子 一風 あかね 公誠



オイとハイウふふそれでも血が通う

# 兼題 「梓」 北村 賢子選

梓外に線引きされてから奮起  
梓のちいとも出たがる左利き  
黒梓の笑顔と喪主を見比べる  
年齢の梓越えてゆく赤い靴  
黒梓の中であなたの大笑い  
放任主義がまた学校に呼び出され  
梓のなかで人間臭く生きている  
二度の戦梓の違いを教えられ  
マンネリの梓を蹴散らすパイオニア  
百歳の母の遺影は赤い梓  
頑張れる梓で泣いたり笑ったり  
梓の一角蹴破り息子大空へ  
梓も柵も要らない美しい芝生  
かろうじてわたし入った美人梓  
梓はずす春の恋ですボンジュール  
梓を出た元気な字書く一年生  
梓入りはじりだがテープは俺のもの  
ガキ大將今はしつかり梓の中  
日進月歩梓にこだわってはおれぬ  
可能性梓を知らない子の無限  
額縁が窮屈そうな幼児の絵  
人間のエゴで西瓜が真つ四角  
ボランテア出来る歳にも梓がある

准一 一步 哲男 希久子 牙子 茂 寿子 公誠 則彦 ひさゆき 加お里 シマ子 扶美代 克己 ふりこ 淳司 弘風 美智代 求芽 朝子 保州 武彦 日の出

梓を出た途端に羽根が生えてくる  
義理という見えない梓に縛られる  
早々と推薦梓でサクラサク

子沢山梓をはみ出す子に期待

憂鬱の梓取っ払う春の風

梓の中で春と相談する個性

妻がいて子がいて僕は梓の外

梓の中じつと出来ない好奇心

春だもの梓はみ出して芽が弾む

佳

五線譜をはみ出すほどの音痴です

飼い殺しにされるやさしい梓の中

額縁からでたがってます春の裸婦

安全なエリアのびのび欠伸する

妻の梓ひらりと越えてノラになる

人

梓にはめ成長の芽をつんでいる

地

カラフルに梓をはみ出す子の未来

天

竹の子の視野に仕切りも梓もない

軸

父さんの昼は毎日ワンコイン

## 兼題 「タッチ」 堀 正和選

お触りはやめたと桃に拒まれる  
タッチしてハグして次はどうするの

大輪 かずお 正和 みつ子 朝子 信子 武彦 能子 寿子 すみえ 朱夏 ばつは 美龍 富子 野薫 朱夏 富美子 千休 房子

ややこしい話は妻にタッチする  
春風がタッチつばみよ起きなさい

お水取りから春の扉へタッチする

古都 望春のタッチで暮れなずむ

ハイタッチなでしこゴール決めました

豪快なタッチで大阪を変える

うっかりと押すかも知れぬ核ボタン

頬染めて手と手合わせる青い恋

あたたかいタッチをくれるもみじの手

胎動に夫がタッチする笑顔

勇壮なタッチで龍を描き上げる

のびやかなタッチ鳥獣戯画楽し

達人の筆のタッチが盗めない

情熱のタッチで描く余生の絵

キャバレロの華麗なタッチラブソング

ハイタッチして幸せのお裾分け

椅子取りゲームいつもタッチの差で負ける

満員電車タッチせぬのに騒がれる

不審物には触れるなと書いてある

改札口でタッチしないと帰れない

ご破算ヘチヨットと未練な削除キー

ONとOFF気分次第で切り換える

静電気アツと驚き手をさする

駅伝のたすきに行けと意気を込め

タッチの差百人一首腕競う

次世代バトンタッチの負の遺産

タッチの差二位の悔しさバネにする

准一 真理子 あかね 富子 克己 ひさゆき 千代 淳司 希久子 正雄 かずお すみえ 無限 朱夏 忠昭 無限 富美子 啓子 義 三四郎 千代 加お里 公誠 靖博 玄也 宏子

タッチの差だろうと2位は2位で負け

バトンタッチ器でないと三代目

触れないでそこは私の古い傷

結願の札所仏とタッチする

佳

タッチする相手がなくてまた幹事

ドントタッチアラフォーですがまだ蓄

指先で愛をまさぐる点字の書

まだ元氣エンマにタッチして還る

妻の語尻ソフトタッチになる怖さ

人

美人です妻にはお手を触れないで

地

びんずるさんに触ると痛み消えそうだ

天

口出しはせぬと決めてたはず同居

軸

タッチだけでメシは炊けるしフロも沸く

兼題 「半分」 長島 敏子選

前半は夢後半は無我夢中

つり銭でも半分のコップ酒

今買えば半値で買ったマイホーム

半分は衣かあちゃんの天麴羅

肺半分胃半分で生きてます

人体の半分もらうならどっち

折り返しあと半分は鬼になる

半分はスリルいかな煮ています

悠々自適その半分を持て余す

冗談で半分ほどは生きている

半人前が酒の席なら大車輪

半分が小さく見える猜疑心

あれ以降半信半疑ですこの世

半分はポケット半分で勝負

半分は隠れ巨人の甲子園

年金の半分はどは呑んでいる

半分になった視力と記憶力

地動説今も半信半疑なり

半日の素つびんでいる気持よさ

三次会半分寝た人連れてゆく

イカナゴが春の半分連れて来る

マスコミが半分つくる世の流れ

半分は敵にまわしている見せ場

半錠の睡眠薬と夢を見る

浮動票でも民意とや過半数

半身が濡れる不況の傘の下

半分は夕陽に縋るサヨナラ

どちらかに寄っているアンパンのアン

遊び半分でないとし長生きは出来ぬ

半分は三途の川で使います

半分は自分史に半分は闇に

淋しいね半分本気だったのに

佳

奥の手があるから半分だけ本気

千津子

扶美代

大輪

茂

敏治

美龍

見清

野薫

完司

宏子

保州

わこ

公誠

篤子

すみ子

求芽

理恵

直樹

希久子

喜明

勝弘

義

瑠美子

三四郎

ダン吉

弥生

生きていく視野半分には虹を描く

ふたありになった半分こになった

檜山の頂哀し道半ば

蹠いた石も半分痛からう

人

わたくしの半分わたしでないわたし

アンダンテで行く人生の折り返し

地

半分にしてはいけない日章旗

天

半信半疑まだ治らない凭れ癖

軸

兼題 「寄せ書き」 川上 大輪選

寄せ書きの四角い文字と丸い文字

寄せ書きに新婦の名前間違える

夢だけの寄せ書きだったマニフェスト

寄せ書きを旧姓で書く下心

寄せ書きの隅に逢うてはならぬ人

寄せ書きのどこどこに波の音

寄せ書きに青春がある宇宙

寄せ書きのハートマークに立つ波紋

寄せ書きから一人ひとり欠けてゆく

寄せ書きに女心が揺れている

左遷にも寄せ書きくれたパートナー

寄せ書きに日本背負うと書いた奴

寄せ書きの好意が重くなってくる

寿子

蘭幸

三四郎

わこ

理恵

朱夏

朱夏

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

瑠美子

寄せ書きは田陣組んだ応援歌

お見舞いの寄せ書き元氣連れてくる

寄せ書きの隅に謎謎らしいこと

一句添えられ寄せ書きが呼吸する

一目見て一番まずい字が私

寄せ書きに目立ちたがりの太い文字

独りではないよと寄せ書きを贈る

寄せ書きは五七五で決めました

寄せ書きの真ん中に居て淋しがり

寄せ書きは柢に入れてあげましょう

寄せ書きに訂正印は押せません

寄せ書きの下手な癖字も懐かしい

好きだったひとの隣に書く名前

寄せ書きの葉書楽しく踊り出す

筆跡鑑定寄せ書きという証拠

寄せ書きで悪筆がとうとうばれた

寄せ書きの夢は蕾のまま萎む

寄せ書きのマドンナ囲む恋敵

寄せ書きをもらいハビリ加速する

佳

寄せ書きに青いりんごの勢揃い

寄せ書きに棘を隠したバラの花

寄せ書きが点滴よりも効きました

悪口もあって光っている色紙

AKBの寄せ書き欲しいおじちゃん

人

アリバイのつもり寄せ書き隅っこに

蕉子

玄也

理恵

好夢

舞夢

光久

完司

保州

無限

牙子

五月

時雄

ひとみ

月子

卓

千代

靖鬼

晶平

楓楽

喜明

弘之

俊宣

理恵

楓楽

月子

地

寄せ書きがばつんと残る子供部屋

天

寄せ書きに僕のミミズが這っている

軸

寄せ書きに有名人は見当たらず

兼題「塞ぐ」

小島

蘭幸選

古里の道を塞いだ放射能

他愛ない噂に塞ぐことは無い

逃げ道を妻のお尻に塞がれる

三狼では明日の暮らしは守れない

涙目はあくび塞いだだけに

塞がれた道を回れば青い海

札束が僕の行く手に揃んである

ドカ雪に思考回路を塞がれる

イヤホンをすればこの世はおらが春

逃げ道を塞いで鯉を泳がせる

落ちたい穴塞ぎたい穴あるこの世

逃げ道は塞がぬようにして諭す

塞ぎ込む日は多からう北は雪

めぐりきてなお被災地に胸塞ぐ

愛はまだ言葉に成らぬ通せん坊

ウツの日は明るい色のシャツを着る

塞いでる穴から洩れてくる秘密

世界不況僕の未来が塞がれる

春ですよ塞いでなんかいられない

ひとみ

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

進

沖繩のころ塞いでいる政治

口移しのワインで塞ぐ嘘ひとつ

ケイタイを塞いで春の水の音

塞いでも聞こえてくるのです噂

鬼を塞ぐのは小さいお豆さん

目を閉じているのに何もせぬあなた

大吉が出たトンネルを抜けそうだ

鍵穴を塞いでもまだおさまらず

内緒でも塞ぎ切れずに梅が咲く

父が佇んでいるだけで塞がれていた

広いはずの世間が行く手また塞ぐ

三狼を通して地蔵さんになる

大雪に塞がれお隣が遠い

佳

塞がれて忍耐力が身についた

妻の口大きな蓋がいますのです

正直な口をとくとき塞ぎたい

おぼちゃんのお喋り塞ぐ蟹の足

生ゴミの袋が勝手口塞ぐ

人

傷口を塞いでくれたのは時間

地

哀しみに塞ぐ被災地にもさくら

天

塞がれて研ぎすまされてゆく五感

軸

傷口を笑い話にして塞ぐ

牙子

朱夏

哲子

光久

シマ子

良一

千代

千代

寿子

瑠美子

義

真理子

耕治

希久子

日の出

完次

富美子

朋月

完司

あかね

無限

無限

無限

無限

無限

無限

無限

無限

# をいぬ

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります。  
楷書で誤字のないようにお願い  
いたします。

編集部

## 岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

村雀うわさ持ち寄る散髪屋  
散髪屋で仲間とはずむ釣談義  
散髪の椅子でわたしを組み立てる  
振られて髪を切るほど純でない  
スキンヘッド毎日手入れ行く床屋  
愛犬の散髪代は惜しくない  
スッキリと散髪しても妻は無視  
地の神よ貧乏ゆすり止め給え  
人も猫もほつき歩く癖がある  
ライバルにゆるい癖玉投げて見る  
結論を出してからも悩む癖  
復路には紙の袋に野良の物  
ガス抜きと称し闇僚入れ替える  
ガスコンロ囲んで鍋の和が出来る  
春先の大陸からの重いガス  
黒いガス晴れて明日が笑い出す  
癖のある歩きを靴に教えられ  
散髪も一日延ばし雪の中

蟹 重 郎  
一 重 忠  
茶 子 瑠  
節 子 子  
公 子 子  
昭 弘 子  
完 司 子  
忠 良 子  
清 帆 子  
幸 安 子  
圭 一郎  
菖 子  
和 子  
雅 子  
た ぬ  
美 恵子

## 川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

マイベースプラス志向でほがらかに  
ほがらかに轢が踊る傘の上  
わたくしはそう朗らかな深海魚  
朝酒で恵比寿顔した三が日  
民苦汁官はほがらかな年を越す  
アルコールほがらかに棄入れてある  
ほがらかな嫁で凶作忘れたる  
ほがらかな空を唄ってランドセル  
ほがらかな人の側には花が咲く  
お日さまの笑顔一億万ボルト  
ほがらかな声で旦那を尻に敷く  
横綱に土がつくの待っている  
ほがらかに後期高齢者になろう  
人生は夢があるからおもしろい  
初夢は一富士だけで目が覚める  
天の句を夢のさ中で猿が喰う  
夢覚めて若いわたしが懐かしい  
寝が浅く一夜に夢を五つ見る  
胸の鈴鳴らせてくれる夢うふふ  
母の夢五十回忌も通過点  
もう駄目だ西瓜畑を逃げる夢  
サラリーマン時代の悪夢今も見る  
踏み張った所が夢の発信地  
こんなにも夢の無い国僕の国  
うるう年一十分分に夢を見る  
夢の色まだむらさきにとどかない  
門構え立派でも跡継ぎはない  
門松を蠟梅の香で包み込む  
お正月ミ二門松が盛り上げる

和 子  
公 恵  
か ず  
滋  
岳 人  
久 芽 代  
野 蒜  
美 代 子  
紀 美 恵  
完 司  
泰 山  
石 花 菜  
玲 坊  
重 忠  
泰 輔  
た け 代  
美 美 子  
勝 恵  
玲 子  
清  
紀 治  
陽 之 助  
三 津 子  
照 彦  
盛 桜  
義 人  
善 江  
龍 枝

負けいくさみんな知ってる城の門  
裏門は隠しカメラに任しとく  
その門を潜ると火柱が上る  
天国の門が開いたような春  
熟慮していつも同じ門の前  
人間を天狗にさせる門構え

## 川柳塔すみよし(大阪)森松まつお報

湯豆腐がゆれてしんみり秘密もれ  
歳重ね二人で語る来し道を  
茶ごころがしんみり袱紗の静と動  
欲張った罰だと思うすつからかん  
赤ん坊の手には未来が詰まっている  
僕が居るとみんなしんみりするので  
欲張ったついで泣いてる砂の城  
逆縁の哀しき小石今日も積む  
仏心のかけらも見えぬ欲深さ  
愛着の孫が年金カジリ取る  
欲張った男の顔に耳がない  
しんみりと友と二人で友語る  
妹が病み先見えぬまふ春を待つ  
つづれ帯亡母の面影きゅつとしめ  
かけうどん末意にた愚痴をいう  
あの日から敏感にした震度一  
小さ目の服を買っては後悔す  
子等がみな帰り座敷が広くなる  
日本が好きだから原発なくしたい  
愛着に欲もからんで捨てられず  
しんみりと話して姉妹笑い合い  
しんみりと離婚のわけを話し出す  
公約に愛着ないと知らん顔

美 知 江  
禎 元  
美 ツ 千  
芳 光  
く に こ  
節 子  
篤 子  
吉 太 郎  
柳 弘  
朝 子  
太 郎  
勝 弘  
美 龍  
の 子  
五 月  
昌 紀  
チ エ コ  
妙 子  
温 子  
和 代  
舞 夢  
半 夢  
一 歩  
り つ え  
か り 子  
定 子  
晴 雄

陽シ欣堅徑芳柳三希  
子マ子之怯子車弘津久  
選

七難をかくし通した笑い皺  
土砂降りが止んで夫婦にいい笑顔  
なでしこの笑顔の裏に努力賞

アルバムの笑顔に笑顔返してる  
ぶるぶるとするほど溜る貯金箱

決勝へ駒を進めて武者震い  
雨戸から今夜寒いと音がする

九度七分ふるえ止まらぬ咳やまぬ  
寒いニユース足の裏から冷えてくる

年末は貧乏ゆすりやめなさい  
ブルブルの音に安堵の救助ヘリ

身震いが止まらぬ核がある限り

### 川柳塔おっぱこ時社(香川)川崎ひかり報

スマホは指一本の新時代

獅子舞が新春寿きやって来た

へそ線が出て来た新しい古札

箱根路をつなぐタスキに新記録

ランドセルでか過ぎ心配新人生

新しい年の始めに露天風呂

初孫の踊る文字の年賀状

新しい年も毎日吞む菓

### 川柳クラフわたの花(大阪)西川義明報

佐助を一輪飾る茶の心

青テント誇り捨てたが妻子恋う

晩年になってふくらむ好奇心

驚と共に春待つランドセル

箒目の又一枚の落ち葉散る

耳掃除眠りを誘う母の膝

食卓つくえ二役強いる空財布

幹子

菜摘

かずみ

義泰

登美代

喜久子

みね

智三

かず子

富子

保州

はつ恵

あきら

弘

くに子

よしみ

いさむ

放任

ひかり

宏

知佐子

美代子

いづみ

民

宏

晴美

懐に焼芋ひとつ受験生  
驚に誘われ楽し山歩き

古校舎傷がはしやいでいる机  
色褪せど結び目固い赤い糸

大掃除の中も整理する  
世の中を食い物にする鷹もいる

雑巾を絞れぬ子供いる日本  
母の掌の温み試して子は眠る

学歴が泣いております議員さん  
生きているのは今日が一番大事な日

大掃除人事も変えて期待する  
二重橋とことこ鴨の花の恋

言い訳をするが私が軽くなる  
突然に過去が飛び出す大掃除

### 川柳ささやま(兵庫)遠山可住報

ネギ刻むリズムに乗った妻の味

老顔へ和温軟なら刻みたい

期待した程でなかった福袋

見送りの駅ようしやなく時刻む

捻子巻けば気ままに動く古時計

期待薄私の一生涯納得で

肩すかしあてにするのはもうよそう

うっとり世界遺産にはまり込み

削除キー迷える指でそっと触れ

まな板も磨きなおして大みそか

振袖が足止めさせた初詣

仏像を刻む祈りを一つ積む

色褪せた記憶が生きる糧となる

記憶の糸必死でたぐり話してる

お年玉もらうわたしはおばあちゃん

俊子

義明

はじむ

浩三

愛子

博子

和子

耀一

正春

孝子

奈良司

哲矢

ますみ

一風

久子

美緒子

純子

美紗子

哲男

美民

真由

啓子

多美子

開子

可住

可住

数の子の皮をむきつつ除夜の鐘  
新成人期待がかかる春迎え

バソコンの間をうろつくツイッター

介助のおかげ今日の命をありがとう

立春は進路に迷う青春譜

白無垢の雪はまだ立春を謳わせず

六十年やっと似合って良き夫婦

立春や金刀比羅宮の小豆粥

杖よりもやさしく温い手を添える

立春の足音を待つおでん鍋

立春に寒波サーピスしてゆるむ

身の丈に似合うくらはしは至福なり

バソコンのお医者患者と目が合わぬ

立春の晴れ間喜ぶ小鳥たち

長く生き前がもうすぐ突き当たり

サバ読んで似合う夫婦になつて

立春のこどろが春の波になる

介助する手こどろ窓を少し開け

立春にもつれた毛糸解きほどく

閉じこもりの老も待ってる春立つ

バソコンのキーを握って SOS

只一途脇目ふらずに介助犬

人並みに使いこなして打つ文書

診察の顔は見えないバソコンだ

立春だ巻きずし買って独り食う

介助する母が笑顔を取り戻す

介護され天引きされて死ねもせず

照代

美智子

盛桜

いさを

諷人

房子

重忠

茶子

彩子

照彦

孔美子

弘子

八重

和子

実満

富江

満

小鹿

惣子

節子

美代子

みさ子

かおる

露子

京

忠良



パソコンができませんでは職がないす

### 川柳らくだの会(鳥取)岸本 宏章報

まさか詐欺電話の口調柔らかい  
親でなくまさか酒癖じいちゃん似  
鶏は飼われた義理で卵生む  
菌の治療終つて帰る靴がない  
ひと時の安らぎもらうカモの世話  
設計になかった同居孫の守り  
飼い主に聞こえるように大叱る  
酒の席まさか本気に受けるとは  
内視鏡見ながら医者がとり言  
芋にねぎ春の畑の設計図  
猛犬注意そんな気配もなく静か  
わが餌は魚介類なり浜育ち  
お互いが汚れて減ぶ泥仕合

### 高知川柳社

### 小川てるみ報

半分嘘かよわい絆可愛がる  
褒められて半額だとは言えぬ服  
半丁の豆腐を笑う寒の月  
大切な人に今年も書く賀状  
効率が生んだ挙句の廃棄物  
ガラクタも児等にとっては宝物

### 川柳塔唐津(佐賀)

### 仁部 四郎報

土産物先に送つて軽くなり  
札束を燃やし暖とる夢を見た  
鏡山池の鯉にもボスが居る  
年毎に斜線の増える住所録

高 明  
勝 視  
輝 夫  
蜂 朗

特養で聞く方言にある温み

### 川柳ふつもん吟社(鳥取)夏目

伊達直人善意の種は明かすなよ  
パンドラの箱からもれた放射能  
最大のリスク背負つた自爆テロ  
ばばっちい皺の手曾孫抱く至福  
バッチイ部屋から愛が始まった  
瓦礫押し上げて新芽が天を指す  
種明かしはすまい男で居たいから  
わたしの心すっぱり入れて切手貼る  
放射能三度も浴びてまだ懲りぬ  
ぎりぎりの値引社運をかけている  
種明かし出来ぬ俺には種がない  
ばばっちい仕事も秘書に任せきり  
放射能に負けず桜よ咲いてくれ  
種明かしできぬ赤字の裏に謎  
百円を割り勘だとはばばっちい  
面白み本気になれば湧いてくる  
招待の酒にリスクが付いて来る  
ふくの肝リスク承知で食べっている  
やらせ雇い賛成多数ばばっちい  
撫子の咲いてる庭が春日和  
ばばっちい旦那の寄附がこれだけか  
放射能まいて電気の値上げかい  
最後かも知れない老母の爪を切り  
ばばっちい物指先でつまみ上げ  
異議なしにする裏方の苦勞人  
私学受けリスク分散する娘  
イノシシもリスク冒して餌がす  
忍び寄る悪魔の吐息放射能

### 一粹報

四 郎  
洋 々  
無 限  
昌 鼓  
菊 香  
みゆき  
清 帆  
敏 夫  
一 瑠  
凱 柳  
春 信  
清 名  
金 祥  
重 忠  
蟹 郎  
孝 二  
圭 一郎  
地 佳平  
振 作  
善 夫  
行 男  
義 徳  
とも湖  
節 子  
妻 子  
隆 浩  
月 満  
回 春子

シーベルト何度聞いてもややこしい  
放射能も不倫も漏れて更迭だ  
脱北へリスク覚悟で舟を出す  
リスク承知それでも受けた稲作り  
原発のリスク小出しにする政府  
自己暗示かけ幸せの中にいる  
空っぽの心に好きな人が住む

### ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

賽の目はいかが出ますか年新た  
残り時間を考えていて湯がたぎる  
奴風天女と恋をしておいで  
おめでとうナデシコジャパン世界一  
とにかく何も起らずおめでたい  
人それぞれ正解がある己が道  
ジバンでも祝う心があればいい  
究めても尚究めても天無限

### 川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

就活の氷河期春よ早く来い  
自慢する技術はないが人当り  
思い出は馬車にも乗った通学路  
騒がしくなつてきました政治塾  
初釜に心づくしの椀並び  
気の毒な顔はしないで下戸の自負

### 川柳塔きやらほく(鳥取) 大塚 恵子報

モナリザが承知しましたと微笑んで  
寒椿の息が聞こえてきませんか  
平和とツポン兵役も無く素敵だ  
ころころと転がる寿命についていく

鶴 子  
千 代  
瑞 枝  
未 延子

炬燵から箱根駅伝肩こらす  
注連飾り今年に蜜柑ついている  
やさしい目の龍と交わす屠蘇の味  
陽が落ちて帰る人無く暮れなずむ  
八十才ハテサテ何を始めよう  
ゆつくりと弱火で焼いた餅の味  
元旦の祝詞素直に受けておく  
祈りましよどうぞ今年が良い年に  
焙り出し吉の模様が浮いて来た

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

柳歩報

生きざまが自分の顔を彫り上げる  
まだ女顔のお手入れサボらない  
フクロウの顔して夜を待っている  
酒少しはいり見事なえびす顔  
能面の顔だが態度で丸わかり  
好奇心抱いて百迄生きる顔  
気にならない顔があるだけよしとする  
脇腹を風がくすぐるハヒフヘホ  
くすぐられ夢の人生白寿まで  
くすぐると一升瓶からひとしずく  
くすぐりの天こ盛りから落ちる種  
イケメンに老いの心をくすぐられ  
くすぐったのは昨夜の雪の精だろう  
告白しハートマークは震度7  
逆風は覚悟で本音吐いてみる  
ああ言えばこう言う妻と同居中  
考え過ぎ苦手な挨拶目に浮かぶ  
枝豆をつまみ言い訳まだ続く  
そこまです言うからナメクジ怒り出す  
言わないでお願い梅も咲く

桂子 昌枝 芳山 涼子 聡美 柳歩 久絵 ちえこ 草庵 とも子 治代 寿代 幸代 弘充 青帆 玲子 晋子 博子

ざわざわと何か来ている気配する  
ざわざわをポケットに溜めクレそうだ  
ざわざわの世相に負けぬ意志で生き  
ざわざわと不安の水が原子炉に  
ざわざわに負けずおとらず一直線  
歌うように囁くように白い恋人  
演歌よりフォークが好きなおじいさん  
やと笛吹けた吹けたと姦しい  
ニューミュージックいつか悲鳴になっている  
散歩道ふとビツコロの音を拾う

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

尊厳を保つ目だけはしつかりと  
隠しても目には出ている下手な嘘  
戦争も平和も見ている世界の目  
大金に御用学者は目がくらみ  
目も耳も衰えたけど口達者  
絡まれて困った夢で動悸打つ  
蜘蛛は巣を互い絡まぬように張る  
絡んでもすりりと抜ける年の功  
結論が頭の中で絡み合う  
稲束を絡んでかつぎ手伝った  
飲むほどに横の飲兵衛絡みつく  
丈夫だと自負した足がよく絡む  
白壁に葛絡ませて守る蔵  
赤飯を炊いて祝った終戦日  
今生きて病魔に勝った小豆飯  
赤ちゃんが泣くと赤飯色になる  
賑やかに赤飯食べた子沢山  
夢いっぱい赤飯炊いて送り出す  
仏滅の日も赤飯は売ってある

知恵子 ゆき 長吉 幸子 民子 禮子 千里 左余 久智子 美智子 萩江 玲子 龍枝 次男 智恵子 日出子 玲坊 風露 喜美子 賀寿恵 泰輔 祐子 美代子 鬼一 恭子 石花菜 和子 英子 茶子

赤飯で送った兄は白い箱  
やり返す元氣三食からもう  
鐘たたき無言電話にやり返す  
似合わないモラル悪いとやり返す  
やり返す言葉がすぐに浮かばない  
世界一「京」を作ってやり返す  
今度こそやり返そうと決めている  
やり返すやり返すド根性  
亡父の歳越えて祝うか赤まんま

川柳塔みちのく(青森)小寺

花峯報

新発見僕にもあった可能性  
かくしてもうきうきニコリ当りくじ  
新しい寝巻き初夢つれて来る  
朝市のカッチャの声のはなやいで  
がんばらう朝日が守る震災地  
うきうきと逢いに出て行く靴の音  
脳洗淨記憶新たにすげ替える  
縁側には春はもうすぐ日の匂い  
昨日とは違う顔出すのが朝日  
春かぜに浮かれて弾むスニーカー  
過去は過去何が何でも初日の出  
朝日みて今日が元氣ですごしたい  
新しい風を吹かせる孫の声  
草枕ならど重ねるひとり旅  
新築の屋根に希望の発電機  
切り株に緑したたる芽が萌える  
新米が毎年届く母がいて  
罹災地でまず甦る名無し草  
朝一番元氣を吸った万歩計  
新しい自分探しの旅へ出る

悠子 康子 重忠 けいこ 由紀子 貞子 瑞子 醉美蓉 照彦 美鈴 小とみ 信子 一湖 つとむ きよし 吞舟 洋子 ひとし 芳生 則彦 隼 ふうさ 花匠 雅城 愁女 井蛙 黙人 慕情



どんな夢抱いているのかなあ新芽  
花ススキ亡母の涙忘れない

### 川柳塔なら

坊農

柳弘報

五楽庵

願い事無事に咲かせて春になる

念願が何時か叶うか宝くじ

叶うなら送り人には今の妻

財産は家族だったと知る絆

散財をした翌朝の虚脱感

幸先を呼び込む健やかな笑顔

叶わない初恋だから美しい

幸先が良く金杯をゲットする

これ以上日進月歩望まない

貧しさがくれた忍耐という財

夢叶う策はかしわ手よりも汗

一心に願ったことが叶ったよ

反核が叶う日が来るきつと来る

叶うまでの過程をポケットに入れる

景気良いメーブルが届く雑煮餅

熱っぽいウインクだった見込みあり

嫁ぐ娘に幸先が良い時雨止む

財産と介護を計るキリギリス

初詣でどここの神籤も大吉で

嫁はんと時代の波は逆らえぬ

叶うまで女は愛を抱いたまま

ひめゆりに十五の春が眠らない

幸先がよさそう初詣のみくじ

そう言えばあれが前触れだった幸

吉と出た初夢きつと叶えます

印籠も時代の波にさからえず

年明けて三度も出会う青い鳥

(中) 次郎 勝弘 紀雄 萌子

いさお 幸先

ふりこ

将文

満作

勝弘

堅坊

隆子

克己

信子

完次

弘修

郁夫

恭昌

博一

柳弘

國治

龍馬像燦々時代を賭けたその拳  
海ゆかば背負つて生きて来た私  
叶つたら呆気ないものしゃばん玉  
最高の財産青い地球です  
復興元年息吹きをくれる呱呱の声  
残された時間財産だと思ふ  
復興の願い叶えに龍が来る  
子や孫の幸先おもう鈴を振る

わがあゆ川柳会(鳥根)松本はるみ報

一ぱいのお茶がいきさいのんでくれ  
そのことはお茶を一杯のんでから  
一時保育親子共々泣き別れ  
古手帳はじめて知つた子の思い  
銘酒でも時と場合で苦くなり  
その話聞かないことにして平和  
耳打ちの話に手が出る足が出る  
けんかしたその日を手帳はみんな知り  
谷間いをお茶が結ぶという絆

### あかつき川柳会(大阪)山本 柳昌報

昆布かつおすめを足したような僕

救援の心がしみる握りめし

美味しいう無理に言われる妻の飯

給手紙に美味しうに栗弾ける

美味しうまで口癖以後無口

愛してるなんて美味しいう言葉聞く

太陽をひとり占めして野良仕事

暖かい家庭に育つ明るい子

大阪の春はやっぱり相撲から

南向き斜面で土筆出番待つ

弥生 義久 寿之 富子 芳子 理恵 俊彦

好栄 惠美子 澄子 英子 ちよえ

かつ子 是るみ 博利 清泉

蕉子 宏子 敏子 穩夫 見清

シマ子 保州 いさお 隆昭 忠昭

転げそうに見えて転げない千鳥足

足許を照らしてくれる君が居る

足許をじつと見ている小商い

足許がふらつく落ちつかあかん

足許の小石にだつて意地はある

今日の無事折つて磨く夫の靴

恋のため息足許で花になる

足許に未来へつづく白い道

足許を固める汗だ惜しまない

ギリシヤより足許暗い長寿国

足許が吠えているのに気付かない

ニッポンの足許だらう沖繩は

タンカーを漏れた油はどうなった

苦も楽も忘れることが潤滑油

日に一度油を差しては縄のれん

今年から仲良くしてる湯湯婆と

原油高ホルムズ海峡波高し

偏差値に二月の絵馬が揺れている

大臣も公募にしたらどうですか

二人羽織のような答弁する大臣  
国難に政党助成食うやから  
核廃絶生きる権利とその勇氣  
錆びさせてならぬ被災地への思い  
次々と悪い政治に民脅え  
身を切る言うて民意を切る気なり

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

何の芽か鳥が運んできたらしい  
運運ぶ女神に春を待たされる  
変わりないかメーブルが運ぶ親思い  
未知数があしたの夢を運ばせる

欣之 秀夫 たもつ 太郎 克己 奏子 たくこ

朝子 丹吉 祥昭 紀乃 信子

すみ子 哲男 勝弘 和雄 のぶ久

直子 桃花 鉄心 柳弘 美智子

美智子 峯二 鈍甲

月子 輝子 徑子 富美子

大輪報

柳弘

鉄心

桃花

直子

和雄

勝弘

哲男

すみ子

信子

紀乃

無我の境筆の運びに迷いなし  
煩惱のいくばくももち運ぶ  
いい便り運んでくれよコウノトリ

佐一  
あきこ  
准一

何積まれても黙って運ぶ一輪車  
ぬるま湯で泣いた分だけ強くなる  
温泉が出るかもしれぬ家の庭

登美代  
小輪  
大輪

ふやかせて角が取れぬ家の庭  
ぬるま湯に不平不満の出す事も  
人間が好き銭湯に行っている

秀雪  
小雪  
大輪

あの時の煮え湯くすりとなった今  
問答無用湯剥きをされてゆくトマト  
原子炉の中を暴いた内視鏡

克子  
夕胡  
秀子

内視鏡宝さがしは止められぬ  
内視鏡と仲良くなった還暦後  
内視鏡こわかったよと大笑い

美子  
紀久子  
由美子

内視鏡に写らなかつた悔いひとつ  
知らん振りしていてくれる内視鏡  
天国の暮し見つめる内視鏡

泰子  
美子  
紀久子

新しい命と弾む内視鏡  
ほたる川柳同好会(大阪)水野  
黒兎報

和子  
英子  
紀子

愛犬に粹な計らい嫁探し  
ちゃんちゃん粹なベストにして欲しい  
半纏が舞う山車の屋根の上

郁子  
幹治  
柳童

生粋の江戸っ子いまや絶滅種  
なれてない他所行言葉舌を噛む  
煙草止め頭のためにチューイング

正子  
黒兎  
柳童

夫婦ギア噛みつ軌みつ二万日  
赤ちゃんが噛んでしゃぶって知る世間  
幼子はまるで火がつくように泣き

純子  
順子  
長子

酔って乗りまるでゆりかこ終電車  
見た目とはまるで違ってぬくい人  
まるで駄駄つ児道頓堀にブルとは

美智代  
春代  
久子

見逃そうまるで気付かぬ振りをして  
年の差はまるで親子の新婚さん  
どっちなかな思案する子へ二つ買う

公子  
桂子  
公子

インターフォン身構えをしてどちらさま  
米子住吉川柳会(鳥取)渡辺多美子報

康子  
桂子  
公子

買えばいい意地でつくったおせちです  
番号順にして待つお年玉はがき  
はつきりとしたところに夢がある

礼子  
公一  
正二

大山の乳房から出るうまい水  
好きな色染めてくれよと婿に言い  
青空にわた雲ふわり日をあびて

宏之  
登美枝  
多美子

往く道を頭の隅においておく  
ほがらかにしているとみんな寄って来る  
意け心をおさえるように眉をかく

紀の治  
未延子  
多美子

肝胆の酒風呂敷の無限大  
突然の美女に尻尾をつかまれる  
招くのはとてもやさしい春の音

欣之  
晴美  
信子

龍界を越えたとところにある希望  
無愛想も売りものにして客招く  
座の場所あれば招いて下さいな

高峰  
壽鷺  
伸雄

悔いのない一日にするのはタクト  
てのひらへ風を刻んである別れ  
ご招待うきうき紅を引くキツネ

和子  
千恵  
伸雄

人生の余白ゆつくり流れよう  
優しさに痛さつらさもひと休み  
深雪

彦次  
登子  
深雪

富柳会(大阪)古田千華報

千華報

ひと冬を案じてくれる袖南瓜  
性善説信じゆつくり仲直り  
脱ぎ捨てたビッグな人生未練ない

寿之  
アキ  
千華

五千万鮎のよだれ拭いている  
新春の風に應える象の耳  
信じてる止まつた針が動くのを

佳子  
よしみ  
武人

どん底を這うてやさしい彩で咲く  
盃に一片浮かぶ桃の色  
大志抱く男を女抱きしめる

華恵  
奏子  
紅紫朗

あとや先終の筏が流れつく  
しがらみがおいでおいでをする昔  
ビッグバン時空を超えて酒を呑む

七郎  
森子  
よりこ

祝盃をあげよ今年は登り龍  
南大阪川柳会 津守柳伸報

柳伸報

饅頭を食べると酒が不味くなる  
豚饅頭にまだ借りがあふ浪速つ子  
饅頭のもてなし酒は出ないかな

和雄  
柳弘  
典子

好きさと言うたし饅頭ばかり届く  
右手に饅頭左手に盃  
饅頭をはおばる男隙を見せ

正春  
たもつ  
ひさ乃

日本の良さを味わう青畳  
名作を味わい心癒やされる  
あの戦後味わえはこそ頑張れる

太朗  
太郎  
ダン吉

鯛料理味わっている今至福  
辛酸をなめて人間らしくなる  
味わった3・11をばねにする

ルイ子  
弘風  
克己

ほろ酔いで平和味わう年賀状  
敗北を味わうことも明日の糧  
次世代へ汚染の地球残す罪

柳伸  
清伸  
柳伸





なやましい看板見とれつゝいふらり  
 たはこ屋に看板娘居た昭和  
 細腕が老舗を背負う三代目  
 看板のメニューが競うデバの地下  
 鬼退治桃太郎さんに憧れて  
 流鏑馬の名手乗馬も矢も達者  
 モデルまねわくわくさせる試着室  
 スーパーに妻のお供で荷物持ち  
 ローカー線柳詰掘んで一人旅  
 うちのママ放し飼いだよ翔んでる  
 芳香を放つ盆梅春を呼ぶ  
 倒幕の名乗りを上げた都構想  
 不況風土練に耐えている看板  
 代返で見事卒業ありがとう  
 カレンダー妻の予定でほうまり  
 逃げ惑う鬼より恐い放射能  
 そわそわとうれしいデパートをみがく  
 予定などないのに出して見る手帳  
 退職後威張る相手は犬ぐらい  
 鍛えられ弱音を吐かぬ放し飼ひ  
 故里のみどりに心解き放つ  
 遺伝子が作る立派なへそ曲り  
 冬將軍威張って座る日本海  
 グリコから元氣貰いに戎橋  
 絵手紙の鬼は優しい顔で来る  
 満面の笑顔の裏に鬼が棲む  
 やさしさに触れて仏になった鬼  
 天下取る様に放った呱呱の声  
 まいりました妻の放った無言の矢

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

明子 幸子 けい子 隆彦 武男 ヒロミ 靖博 エミ 輝子 久美子 一慧 英美 孝代 光弘 正博 弘光 弘光 三和子 和代 和子 加修子 直樹 芳野 敬二 正美 正子 ふみ

げんえい

五十年味も素つ氣も無い人と  
 ファスナーでしつかり自我を封じ込む  
 お互いの過去にはチャックを締めておく  
 ファスナー二人の仲をしつかりと  
 ファスナーで止めておきたい恋もある  
 ファスナーの歯がかみ合わず開いたまま  
 布かんだファスナーと妻手強いぞ  
 歳ですねファスナーあいて知らん顔  
 ずたずたにされても愛は信じたい  
 ズタズタに切れた絆を繋ぎたい  
 張り替える障子ずたずたはしゃぐ孫  
 民主党ずたずたにする消費税  
 来る明日を信じて子等は伸びていく  
 全自動の妻をオーバーホールする  
 通販を信用しない戦中派  
 色と欲背負って登る八十路坂  
 皇室に敬語使わぬ人が増え  
 よめはんはいつもすまんとおおきにと  
 不合格神も小銭じゃ御不満か  
 急ぎ足で遠のいてゆく昭和  
 過去形になった景色に色が無い  
 柳の芽くわしいことは知りません  
 如月の海きららと春暮色  
 目処立たず途方に暮れているがれき  
 炬燵で聞く遠雷のごと冬花火

川柳同友会みらい(鳥取)吉田陽子報

弘子 志華子 捷也 舞夢 滋彦 紀子 すみ子 日の出 集一 公平 桃花 穀子 照子 千歩 浩二 知之 善之 眞澄 希久子 理恵 義作 満子 富昌 恭昌 陽子報 みどり 久司 温子 美恵子 章子

愛着があつて破れも気にしない  
 ヤレヤレと何度いったか日が暮れる  
 葬式でないと出合えぬ隣組  
 届くまで昇って行くぞ五七五  
 親こころ空回りで届かない  
 人人人繋がりているいつの日も  
 沈む国とても独りじゃ担がれぬ  
 もういない尊い人と気づく時  
 身の程を知って治った肩の凝り  
 酔ったふりしても割り勘ふん負担  
 眠る子を肴に七五三祝う  
 芋を焼くうまいけども喜ばす  
 水と空氣がうまいだけでは満たされず  
 ありあまる脂肪でどんと乗りきれる  
 故郷の屋根が恋しく靴はずむ  
 ペン先が鋭くわたり攻めてくる  
 長生きをしようね孫に嫁が来る  
 浅知恵で回る我が家は平和なり  
 むずかしいことは出来ないことにする  
 婆さん茶碗洗いは番でんこ  
 浅い川大河の苦勞測れない  
 仲良しはききうで終わりの欠け茶碗  
 いずも川柳会(鳥根) 佐藤治代報

陽子 寒之 純宏 一聴 葵 美津恵 慶一 安子 信子 三郎 敦子 三子 嘉子 綾野 華蓮 菜美 一眸 和代 はお 遊公 弘公 孝亮 桂次 祐次 たえこ 房緒 弘子 健柳 あきこ

芽が出ない出ないと頭ふつてみる  
 参加して自分の居場所確かめる  
 喜びを飾る言葉がみつからぬ  
 喪に飾る写真そろそろ用意する  
 ゆっくりと相槌を打ち敵になる  
 風雪に耐えて私の芽がのぞく  
 「マダダヨ」少しゆっくりしていよう  
 老木も若木に負けず芽吹き出す  
 ゆっくりと私の色を出してゆく  
 気まぐれだから自由参加の方に行く  
 身の丈の飾りの中で暮らして  
 パーマかけて着飾ってみるおばあちゃん  
 ゆっくりと論しゆっくり棘を抜く  
 掃き寄せてゆっくり燃やす胸の垢  
 ゆっくりとまだこの道は続きそう  
 しぶりと参加してみや面白  
 呑み込んだ愚痴みぞおちで発芽する  
 飾っても泥んこ遊び終らない  
 笑い顔見たくて輪から出られない  
 一節の祝い歌から輪が温む  
 参加者の顔ぶれを見て闘志湧く  
 恋の芽が酔った振りして帰さない  
 ゆっくりと煮つめ沈む僕らの海  
 太陽がゆっくり沈む僕らの海  
 ボコボコの人間が好き参加する  
 乗り越えた私の節目までやる  
 いつか芽が出ると信じて水をやる

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

治代 敬子 佳子 シゲ子 志げる 英子 美千代 美佐子 多喜 夢生 幸子 蘭水 久枝 徳子 ちえ 左余 寿美 美江子 歌子 熊四郎 昌枝 喜子 玲子 茂美 章峰 文子 ちかし

妻を頼る関白様にございます  
 頼り甲斐あります家中の手摺り  
 縁あって頼り頼られ五十年  
 頼りない自分に発破かけている  
 踏ん張ってあと十年を頼る足  
 次世代に頼るしかない負の遺産  
 八百万の神にすがったメスの跡  
 七光だけで社長と呼ばれてる  
 頼られて採まれ男の顔になる  
 才能に恵まれ運に見放される  
 いい天気庭で小鳥が遊んでる  
 お恵みで合格をした落ちこぼれ  
 恵まれた黒髪わざと茶に染めて  
 花束に恵みの笑みをもらってる  
 恵みの雨ちよっと続けばよかれ  
 神さんのチョンボとか雪なる恵み  
 待ち続け煮えくりかえる拉致家族  
 まさかまさかニューハーフからラブコール  
 難題を玉出色でケリつける  
 あいまいな人と分かって頼んでる  
 頼られることで自信がついて来る  
 まだ杖に頼らなくて歩いてそう  
 年金も俺と同じで頼らない  
 魔の雪に二の足を踏むラッセル車  
 頼らない男が好きなきまぐら  
 聞き上手頼りにされて逃げられず  
 曖昧な返事だきつと誰かいる  
 負けん気の兄ちゃんに辣腕家  
 シーズンを前に褒めたり貶したり  
 万物のいのちにあめつちの恵み  
 まだ妻に握られているラブレター  
 頼られて背筋しゃきつとなりはった

千代 ばつは 舞夢 半銭 日の出 政男 りつえ としお 誠雄 時虹 冬也 玄山 像子 篤子 敏治 みつこ 雅明 清進 世紀子 八千代 月彦 山彦 願 朋月 公誠 扶美代 唯教 健吾 俣一 由天 笑

余裕などないが時々無駄を買う  
 しみじみと鏡が話しかけてくる  
 良い人と言われた意気地なしを恥じ  
 正直な鏡しみじみ見つけてる  
 よくぞ来た妻としみじみ日向ぼこ  
 軸足がブレないように根をおろす  
 しみじみと仏と話すことが増え  
 病み上がり白いご飯の美味いこと  
 追いついていっばい刺さっている背中  
 追いつくのか雪被災地を思う  
 亡き人が読経の中に浮びくる  
 やがてを思う独りを思う夜の雨  
 人間って可愛いものねにぎり飯  
 竜神に穏やかな年折るのみ  
 子を論ししみじみ自分ふり返る

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

美人より少し太めがタイプです  
 夫婦して自分が先に逝くつもり  
 お世辞だと解っているが顔くすれ  
 古希で知るタイプにこたわり損した  
 笑窪ある孫が笑って見上げてる  
 内気な娘お強くなって里帰り  
 タイプではないとけつたが惜しい奴  
 消費税なるべくなら上げないで  
 タイプではないがとつてもやさしいの  
 雪柳チラホラ春が目覚めてる  
 なるべくは嘘をつかず生きてきた  
 淑やかな恋に変わった寒椿  
 帰る頃やつとほどこけた人見知り

房子 いわゑ 久仁雄 昌紀 たもつ 光久 加お里 扶美代 蕉子 千代 希久子 義子 楓 楽 茂幸 初音 泰子 洋子 佐紀子 あかり イサミ よしひさ 里江 健二 柳明 美也子



したたかな内氣にコロリ騙される  
あのタイプ使い難く納屋の奥  
哀しみの海にもそつと春は来る  
割り勘も良いがなるべくタダの酒  
タイプでも無いひとばかり寄つて来る  
内氣だが心は熱い句を作る  
ああく笑つたと涙溜めている  
なるべくなら福島の子でおらせたい  
間魔様をなるべく避けて生きている  
老いてなお夢と情熱まだ盛ん  
今年こそなるべく早く来てよ春  
春めいて小さな旅のプラン練る  
よく笑う爺婆がいて平和です  
面倒だからなるべく妻の言うとおり  
ご臨終医者が見たのは腕時計  
本命と思ひ込まれた義理のチヨコ  
誠実なタイプに託す親ごころ  
ほくとつな人が好きです私もよ  
鬼の面つけて隠している内氣  
節ぶしで男の志が太くなる  
ひとり居て光と影に生きている

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

コンビニの惣菜母が香らない  
来年は敷けるだろうか花むしろ  
一枚のはがきが解いたわだかまり  
春先という感触に残る冬  
父からはがき元氣か金あるか  
はがき絵が故郷の香り連れてくる  
生え際の白に女の苦勞見る  
うるせえなおっぱい呑んだ口が言う  
マニユアルの作り笑ひが出迎える

キヨミ 紀乃 五み 靖鬼 耕治 哲夫 見清 祐康 勝巳 ヨシエ 哲男 かずお 野薫 美純 千津子 朋月 比ろ志 奮水

作り物バストで男釣り上げる  
いかせん物言いたがる首の皺  
子育ても出来な親が子を作る  
慰めよみた見守りがありがたい  
どうせ死ぬけど死ぬ氣がしない日々  
手さぐりの夢に言葉が踊り出す  
地下水の流れが作る落し穴  
厚化粧いつそお面をつけますか  
人として普通に生きる難しさ  
楽しみより我慢はがきの母でした  
惜しいけどこの絵はがきと思ひ切る  
朝ドラのミシン見る度亡母が見え  
お礼言いながら束ねる年賀状  
演歌より港に似合うシンフォニー  
思いとはうらはら笑顔作る技  
関心があるから丸い返事する  
仕事より家庭が似合うひとなのに  
ひと言がことり音する胸の底  
芸術家取りで女性顔つくる  
絵手紙の字も震えてる雪ダルマ

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

たこ焼を食べてビールが欲しくなり  
味自慢日本一はタコ焼や  
たこ焼がこんなうまい玉の汗  
子も孫もやっぱ好きなたこ焼  
たこ焼を口いっぱいいい笑顔  
大阪は角を曲ればたこ焼や  
たこ焼を考えたら人栄誉賞  
たこ焼のように中身の熱い人  
たこ焼はタコの大きな店がいい  
編み替えて母の形見のこのセーター

歌留多 千恵子 行兵衛 美津子 健二 隆 堅坊 夢 則彦 美智代 見清 玲子 千枝子 求芽 かずお 葉子 千代 巴子 満子

人情が編みこまれてる裏通り  
川柳をすこし編んでおりますの  
編み返している間に冬が終りかけ  
マフラーは手編み長さは二人分  
自分史に編み込む恋の思い出を  
幸せは七色で編むマニティ  
引いて引いて小さな暮し編む独り  
編み上げたベアのシャツが春を呼ぶ  
マフラーを母の手引きで編む娘  
セーターに恋人と書いてます  
ふられた夜月をほほえみ気にするな  
炭坑の煙を見たいお月さん  
花丸がある今月のカレンダー  
月並みな愛想が出来る子役達  
満月が自己主張する無人駅  
月あかり悲喜こももを照らし出す  
待ち遠しい偶数月の十五日  
月の暈あしたの雨を予告する  
義理たて月とさみしき帰り道

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

先輩のひとこと受けて道きめた  
ひとことが多くていつも四面楚歌  
氣の利いた言葉一つで場が和む  
スタートの一言一言背中押す  
期待するこの一言が人活かす  
孫ほめる一言多くて逆効果  
浮き沈みのんきな暮らし夫婦舟  
お母さん説教だけはひとことと  
悠長に川の流るの様に生き  
ひとこととで分かるはずないTPP  
ゴマスをまともに受けるのん気者

ヨシ枝 登志子 シルク 六點 榮 アヤ子 婦美枝 雅枝 光男 フジ子 武義 ちづる 昌子 紀雄 恵美子 いさお 瑠美子 美代子 やすの 勇太朗 楽鬼 三楽 一幸 ミヨノ あや乃 泰子 昭好 ちる

朋  
月



音立てて食べる男をそでにする  
釣れたフグ膨らんでいる自己主張  
大臣のカウントダウン刻む音

忠 順子

諭吉を崩す一円玉が足りなくて  
婆ちゃんのお洒落じこかがちくはくで  
フグ提灯人の浮世を見てござる

宣子

夫にも違つた夢があるらしい  
貯金箱小銭たまらずあくびする  
窓に雪ちり鍋囲み舌鼓

淑子

会果てて片方づつの靴と下駄  
トラフグに因果ふくめてフルコース  
背徳の味かも知れぬフグの肝

裕美

判決を見ての遺影の妻と娘が  
ラップして冷凍したくなる余韻  
四分音符春風に乗る軽い靴

雅司

オカリナの独りはつちは寒からう  
フグの肝ひとと勧めてちよつと待ち  
ちよい惚れの妻に頭が上からない

ちあき

ラブコール今やメールが橋渡しし  
一円が足らず諭吉を崩すレジ  
鑑定団一〇〇〇万もする小銭

美和子

雪ダルマ生きているのも辛からう  
大山滝句座(鳥取)

哲夫

雪国にブレハブ寒すぎませんか  
財布にも一枚欲しい貼るカイロ  
酸欠になりそう雲が低すぎる

ヨシエ

風雪に飽きて探している霞  
崖つ淵やつと仕事の鬼になる  
種の無い男が春の種を蒔く

菜々子

退職の辞令がほしい畑仕事

石花菜

新象 完司報

寿代

紀の治

芳山

照彦

玲子

雪花菜

え

うらかな田舎の道をバスの旅  
賽銭の音もだんだん寒くなる  
生きている親蟹足を切り落とす

善江

新婦さん電話するの気が引ける  
仕事場の華と言われた頃もある  
うらかな時間を食べて老いてゆく

七七

お寒い小便小僧つらら下げ  
なめくじとゴキブリだけは殺します  
父の日も母の日もなく製作業

仁美

八十路の坂は急勾配にできている  
静かなる殺意シベリア寒気団

善江

鏡台の前を離れぬ妻を待つ  
汚染した大地眠らす雪化粧

由紀子

道ならぬ恋路を照らす雪明り  
私のこころ見透かすコンバクト

熊四郎

うれしい日今日の手鏡よく笑う  
ラッキーと思った時が下り坂

七七

みぞれ道托鉢僧のわらじ跡  
手を焼いた子等が心配してくれる

忠央

許し合う愛に程よい雪見酒  
喜怒哀楽三倍にする三面鏡

仁美

健康であるラッキーを生かされる  
父の背と母を鏡に生きている

柳弘

つつがなく年金の来る国である  
介護の手やつと伸ばして見る鏡

朝風

ひとひらの雪に口づけされました  
雪女美しいけど恐ろしい

賢子

何事もない暮しラッキーだと思ふ

修

川柳おがわ(大阪・前月分) 籠島

郁夫

恵子報

銀杏

三郎

恵子報

洋

三郎

鈍甲

三郎

かすみ

三郎

さち子

三郎

麗

三郎

川柳塔鷹野みか月(鳥取・前月分) 福西 茶子報

戦争に負け滑稽な話する  
人の世に笑うジョークと刺すジョーク

茶子報

祝成人年金叩くのし袋  
今日といの独り舞台を演じ切る

茶子報

母さんの雑煮がうまい小正月  
大根の滑稽裸婦像のかたち

茶子報

七〇億を眼下に竜は思案する  
我が家にはパンザイもなし宝くじ

茶子報

富士山に匹敵貫録の和装  
大衆に向かつて咳を落とすしとく

茶子報

和服着りやおてんば娘もしとやかに  
陰となる枝を払って風を呼ぶ

茶子報

滑稽はどつこいしよから始めよう  
滑稽でいいさ手つなぎ離さない

茶子報

山陰に底抜け陽気な友がいる  
滑稽な顔でめまいを耐えている

茶子報

若水を雑煮の湯気にしてあげる  
滑稽さ消えて無口な人ふえる

茶子報

お雑煮で祝う元旦百回目  
亡き母に習った味の雑煮食べ

茶子報

お雑煮は今も男子が供えます  
振り袖を競う二十歳のお祭りだ

茶子報

山陰の冬の険しき優雅なり  
病む妻よ一度着て見せ訪問着

茶子報

小太りの和服が似合う瘦身美  
頬かむりして腰をふる滑稽さ

茶子報

正座して柱の陰に亡母がいる  
筆筒から亡母の匂いする和服

茶子報

久枝

茶子報

小満

茶子報

かおる

茶子報

| 句 会 名                   | 日 時 と 題                               | 会 場 と 投 句 先                                                                        |
|-------------------------|---------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 川 柳<br>藤 井 寺            | 15日(日)14時締切<br>転校・火・席題は共選             | 藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F<br>近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分<br>〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子     |
| 岬川柳会                    | 15日(日)14時締切<br>結果・萌える・触れる             | 淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分<br>〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592<br>八十田洞庵                        |
| 豊 中<br>もくせい<br>川 柳 会    | 16日(月)13時40分締切<br>こたえる・取柄・ひょっと<br>自由吟 | 豊中市中央公民館4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分<br>〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清                             |
| 川 柳<br>さ ん だ            | 17日(火)13時から<br>線・新型・開く・ほいほい<br>自由吟    | 三田市中央公民館<br>〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和                                            |
| 岸 和 田<br>川 柳 会          | 21日(土)13時30分締切<br>足音・揺れる・鮮やか・ラップ      | 岸和田市立福祉総合センター<br>〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19<br>中岡香代                                 |
| 川 柳 塔<br>みちのく           | 21日(土)17時締切<br>印鑑・いっぱい・羽化             | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」<br>〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯                             |
| はびきの<br>市 民 会<br>川 柳 会  | 22日(日)14時締切<br>抜く・写真・カーテン・手帳          | 綾南の森 公民館<br>近鉄高鷺駅北東・徒歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏                          |
| 川 柳<br>ふうもん<br>吟 社      | 22日(日)13時開場<br>流石・ゴーサイン・もがく           | 開発ビル2F ホール<br>〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原深雪                                           |
| 京 都<br>塔 の 会            | 23日(月)14時締切<br>達・がっかり・使う              | 京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル<br>弁財天町328-202 都倉求芽              |
| 南 大 阪<br>川 柳 会          | 23日(月)18時開場<br>おばちゃん・リフォーム・畳<br>ビチビチ  | 大阪市立住まい情報センター 5F 研修室<br>地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口<br>〒540-0004 大阪中央区玉造1-16-13-304 前たもつ |
| 松 露<br>川 柳 会            | 23日(月)19時30分締切<br>仏・のんびり・雑詠           | 溝口五区集会所<br>〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3<br>小西雄々                                      |
| 川柳クラブ<br>わたの花           | 27日(金)9時開場<br>牡丹・鯛・畳・自由吟              | 八尾市生涯学習センター<br>〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明                                         |
| 川 柳 塔<br>すみよし           | 28日(土)13時開場<br>太鼓・煌めく・とても             | 住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分<br>〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9<br>古今堂蕉子                        |
| 和 歌 山<br>三 幸 会<br>川 柳 会 | 28日(土)12時30分開場<br>カード・荷物・迂闊           | 和歌山商工会議所 4階 第2会議室<br>〒640-8570 和歌山市南中間町20<br>ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」                  |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

# 4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

| 句 会 名                | 日 時 と 題                                    | 会 場 と 投 句 先                                                                           |
|----------------------|--------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 川 柳 塔<br>な ら         | 5 日(木)13時開場<br>救う・舞・現実                     | 奈良市立中部公民館4F<br>近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分<br>〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵                      |
| 城 北<br>川 柳 会         | 7 日(土)13時開場<br>ときどき・折る・差・自由吟               | 旭区老人福祉センター3F<br>地下鉄千林大宮③番出口<br>〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子                         |
| 富 柳 会                | 7 日(土)14時締切<br>ある日・先取り・自由吟                 | 富田林市中央公民館<br>近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10<br>TEL.0721-25-0603 池 森子  |
| 倉 吉<br>川 柳 会         | 7 日(土)14時締切<br>若い・くよくよ・ラッキョウ               | 倉吉市 明倫公民館<br>〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17<br>谷口次男                                    |
| 八尾市民<br>川 柳 会        | 8 日(日)13時30分締切<br>美学・駅・這う・雑詠               | 八尾神社内 西郷会館3F<br>近鉄八尾駅西口徒歩5分<br>〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一                            |
| 川 柳 塔<br>わかやま<br>吟 社 | 8 日(日)14時締切<br>兼 題 = 夜・続く・誘惑<br>課題吟 = ひらがな | 和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2<br>兼 題 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子<br>課題吟 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫  |
| 西宮北口<br>川 柳 会        | 9 日(月)13時45分締切<br>絵・来る・ユニーク・自由吟            | 西宮市立中央公民館<br>阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや4F<br>〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子                   |
| 川 柳<br>あまがさき         | 10 日(火)14時締切<br>普通・鼻唄・惜しい・自由吟              | 尼崎女性センター トレビエ<br>阪急武庫之荘駅南へ200m<br>〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治                        |
| ほ たる<br>川 柳<br>同 好 会 | 10 日(火)13時30分締切<br>迷路・従う・どろどろ              | 豊中市立蛸池公民館<br>阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F<br>〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎                         |
| あかつき<br>川 柳 会        | 13 日(金)14時締切<br>軽い・顔・大地・時事吟                | 大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2階)<br>地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側<br>〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花 |
| 川柳大阪                 | 14 日(土)14時締切<br>リズム・骨・基本                   | 地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」<br>〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純                            |
| 川 柳 塔<br>ま つ え       | 14 日(土)13時45分締切<br>空っぽ・鳴る・虫・やっぱり           | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子                                              |
| 川 柳 塔<br>さ か い       | 14 日(土)13時から<br>両方・浴びる・(折句)オスロ             | 堺市総合福祉会館<br>〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑                                             |
| 川 柳 塔<br>打 吹         | 14 日(土)13時締切<br>カバン・採用・眩しい                 | 倉吉市上灘町9 上灘公民館<br>〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光                                            |
| 川 柳<br>ねやがわ          | 15 日(日)14時締切<br>おっとり・発表・退院・自由吟             | 寝屋川市立総合センター4F 第1研修室<br>寝屋川市駅からバス<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉                         |

# 柳界展望

を執筆中の木津川計氏は毎日新聞3月5日夕刊の特集ワイドで「一人語り劇場」――芝居と時代切々と大きく採り上げられた。

## ▽計 報▲

★大阪・中之島一帯で昨年12月に開かれた「OSAKA光のルネサンス2011」に協賛し朝日新聞社が募集した「としび川柳」に左記の同人諸氏が入賞した。

節電に励む灯りのいじらしさ 藤井 則彦

としびも母と付き合う針仕事 野下 之男

★京都塔の会40周年記念句会は2月26日(日)ハートピア京都にて開催。参加者80名。お話は「能と京都」と題し藤井則彦氏。同人の天位。

爺ちゃん是天寿全う龍になる 松尾美智代  
先祖から継いだ田んぼを持て余す 片山かずお  
添いとけるつもり微妙に揺れながら 安土理恵  
☆本誌に「川柳塔の讃歌」

■田村邦昭氏(同人・鳥取市)は2月9日逝去。享年81歳。通夜葬儀には新家完司副主幹、同人の岸本宏章、孝子、有沢せつ子、池沢大鯨の諸氏が参列した。

■井伊東吉氏(参与・岸和田市)は3月1日逝去。享年79歳。家族葬にて見送られた。

## ▽催 し△

○木津川計氏は4月30日(月・祝)14時から泉大津市旭町のテクスピア大阪で開催される「泉大津市文化フォーラム・カルチャースクール」で「王将」を口演。入場無料。13時から会場で整理券配布。問合わせ先は泉大津市秘書広報課TEL0725-331131。会場は

南海泉大津駅から徒歩3分。

## ▽お詫して訂正△

2月号P112下段19行目、野鶴→野鷲。

3月号P19下段16行目、年賀状未だ来ぬ友

三十日過ぎ→来ぬ友十日過ぎ。P19下段18行目、

割り勘にいつも微笑で僕が居る→微笑む。P44上

段2行目、村山玄也↓村上。P44中段8行目、片

岡千恵子↓智恵子。P79下段12行目、坂東倫子↓

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

板東倫子。

## 新同人紹介

稲見則彦  
いなみ のりひこ  
―五楽庵・姦・慕情推薦

紹介者 遠山 可住

神戸市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

河内長野市 紹介者

## 松江しんじ湖

## 番傘川柳会創立10周年記念大会

開催日 5月13日(日)

場所 松江市津田公民館

受付開始 午前11時30分

宿題と選者 各題2句

|       |        |   |
|-------|--------|---|
| 「度 胸」 | 石橋 芳山  | 選 |
| 「進 む」 | 松本 文子  | 選 |
| 「咲 く」 | 渡辺 康乃  | 選 |
| 「勢 」  | 長谷川 孝流 | 選 |

出句締切 12時30分

投句料 1000円

欠席投句は4月20日(金)まで

〒690-0012 松江市古志原 1-12-11

井谷 久子 宛

常任理事会 3月7日(水) 次回 4月6日(金) AM10時

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

河内長野市 紹介者 藤原 克三

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

河内長野市 紹介者 藤原 克三

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

河内長野市 紹介者 藤原 克三

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

河内長野市 紹介者 藤原 克三

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

河内長野市 紹介者 藤原 克三

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

河内長野市 紹介者 藤原 克三

河内長野市 紹介者 坂上 淳司

# 第一回 川柳塔社各地句会代表者・役員拡大会議

開会の辞として小島主幹から「提案、意見を出し合い有意義な会になりますように」との挨拶に始まり、西出理事長、川上・新家両副主幹と各地句会代表者など総計五十名の参加者を得て二月十五日午後一時より四時まで開催された。

二〇一四年に迎える川柳塔社九十周年を踏まえて「川柳塔社九十周年 塔勢拡大」を会議の基本主題に置き、魅力的な句会運営、同人・誌友の一層の拡大について句会代表者などの経験談の披露があり、第一回誌上大会の現況報告、九十周年記念事業の概要の説明があった。また参加者の新たな提案・意見を聴取した。紙面の都合上詳細記述は省略するが、各議題についてそれぞれ熱心な意見の披露があったことを報告させていただきます。

川柳塔社と他柳社とを分けるものは何かとの質疑に対しては、理事長より麻生路郎の「川柳は人間陶冶の詩である」「いのちある句を創れ」を引用して路郎イズムの実践を目指すものとの発言があった。

また同人とはどういう性格のものかという問が会議の話題になった折に、大内朝子氏より主幹当時の薫風先生が「同人とは塔を支える一本の柱になるということである」と話されたことがある旨のエピソードが披露され一同思いを新たにした。

最後に川上副主幹の「熱心なご意見、ありがとうございます」と閉会の辞があり会議を終えた。

関係者一同、同人・誌友の皆さまの会議への多大なご協力を感じいたします。

(水野黒兎記)

## 川柳塔みちのく25周年記念句会

日時 7月1日(日) 受付 午前10時  
席題発表 午前11時 投句締切 午前12時  
会場 弘前プリンスホテル  
弘前市駅前1丁目3の4

電話 0172-33-5000

会費 4000円(昼食・懇親会・記念品・発表誌含む)  
会宿 (各二句詠・共選)

|      |    |     |   |
|------|----|-----|---|
| 「膝」  | 櫛引 | 八千代 | 選 |
|      | むさ | し   | 選 |
| 「檸檬」 | 沢田 | 百合子 | 選 |
|      | 千島 | 鉄男  | 選 |
| 「丸」  | 工藤 | 青夏  | 選 |
|      | 加藤 | 彩人  | 選 |

席題 (各二句詠・共選)

|   |     |     |   |
|---|-----|-----|---|
| 「 | 齊藤  | あまね | 選 |
|   | 佐藤  | 古拙  | 選 |
| 「 | 大黒  | サチエ | 選 |
|   | 佐々木 | かもめ | 選 |

問い合わせ先 電話 0172-44-7378

〒036-0161 平川市杉館宮元53-1

小寺 花峯 宛

## 平成24年度 三川連川柳大会

日時 4月29日(日) 受付 10時  
場所 三重県総合文化センター大研修室  
(生涯学習棟4階)

〒514-0061 津市一身田上津部田1234

会費 1000円 出句締切 11時30分  
開会 13時  
会宿 (各題二句)

|          |   |   |    |   |   |
|----------|---|---|----|---|---|
| 「キッチン」   | 中 | 山 | 恵  | 子 | 選 |
| 「虫」      | 中 | 村 | ま  | ゆ | 選 |
| 「のほほん」   | 青 | 砥 | たか | こ | 選 |
| 「朝」      | 久 | 保 | 光  | 範 | 選 |
| 「柔らかい」   | 本 | 樋 | 口  | 仁 | 選 |
| 「人生」     | 榎 | 岡 | 訓  | 恵 | 選 |
| 「染め(わる)」 | 竹 | 岡 | 完  | 司 | 選 |
| 「自由吟」    | 新 | 家 | 完  | 司 | 選 |

懇親会 17時より「風の蔵人」津駅東ソシアビル

会費 5000円 幹事 大野たけお

(090-6649-7650)

お問い合わせ 吉崎 柳歩 (059-380-0303)

主催 三重県川柳連盟



# 編集後記

★菜の花を視野に 交番  
眠くなり

薫風

★大震災以後、ものを書く人、創作する人ではない、自分は何を成すべきか：を模索しなかつた人はいないだろう。詩人・俳人歌人の大震災関連の著作が書店にたくさん並び、マスコミにも取り上げられ話題にもなっている。

★私も何冊か求めたが書くということとは、生きるということだと痛感する。ただ残念ながら、川柳関係の震災関連の書物が店頭になどと並ぶことがない。話題にならなくても、私たちが川柳人には自分の目で見て、考え、震災を詠む、今を詠むという姿勢が大切であろう。

★川柳塔のホームページ

を開いたことがあります。インターネットの画面で川柳塔と検索してみてください。毎月の本社句会、各地句会案内やお知らせ、本社句会秀句などが掲載されています。ホームページには川柳塔の理念が次のように述べられています。

★「川柳塔とは……生涯を川柳の社会化に尽くした麻生路郎は大正13年刊『川柳雑誌』を発刊。『川柳は人間陶冶の詩である』『いのちある句を創れ』を標榜し、昭和11年プロ川柳家を宣言。昭和40年7月路郎亡き後は同人制をとり「川柳塔」と改題して現在に至る。寝転べば畳一帖ふさぐのみ（路郎）路郎イズムを支えとする川柳塔社は、全国に同人誌友を有する川柳結社で大阪市に本社をおく」

## ひとつ

「はじめての江戸川柳」川柳塔誌に好評連載中の誹風柳多留一 篇研究の輪講のメンバーの一人である小栗清吾氏が「はじめての江戸川柳」という著書を出版されました。第一章では

五番目は同じ作でも江戸産れかみなりをまねて腹がけやつとさせ

の句を例に判る句、解釈の難しい句などを絶妙な読み方指南で江戸の笑いを紹介する快著です。著書全

体では十章にわたり、八百三十六句の江戸川柳が引用・解説されています。

江戸川柳の題材は日本の正史のみならず、俗説や神話・伝説の類、謡曲、浄瑠璃、和歌、俳句なども題材であり、あるいは中国の歴史や古典なども題材であり、そういった分野の研究に基づいて難解な川柳を謎を解くごとく解説してあります。平凡社発行、新書版税別八百円。す。平凡社発行、新書版税別八百円。（水野黒兎）

★全国には川柳結社やグループがたくさんある中で、川柳塔という船に乗り合わせた同人・誌友のみなさんとの御縁を大切にしたいと思えます。あなたのお声をお寄せください。誌面作りに活かしたいと考えています。

★春の川柳塔まつり誌上大会の結果は5月号発表。お楽しみに。

（朱）

大会の結果は5月号発表。お楽しみに。

（朱）

大会の結果は5月号発表。お楽しみに。

かな使い等々。

◆また、判読が困難な文字も目につく。行書・草書や、極端な崩し文字。或いは薄すぎる鉛筆や何回もの書き直しによる判読不明文字等々。

◆鉛筆の場合は少し濃い目のもの、ボールペンや万年筆の場合は、一度下書きしてから指定の用紙に清書する、ことなどを

お奨めする。

（い）

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号)地名

都道府県  
市町村  
姓  
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201





# 檸檬抄投句用紙

「青い」(4月15日締切)

6月号発表

池 森子 選 — 共選 — 福士 慕情 選

B

A

B

A

地名

市都  
道府  
姓  
雅号

地名

市都  
道府  
姓  
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

6月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (8句)  
水煙抄 (8句)  
愛染帖 (3句)  
檸檬抄 (2句)  
一路集 (3句)  
初歩教室

小島蘭幸  
川上大輪  
新家司  
福家共  
池森子  
岸本宏  
寺川弘  
森一  
鈴木公弘  
担当

「調理器具」  
「荷物」「あやうい」  
「ポンポン」  
「ブレンド」

7月号

檸檬抄  
一路集  
初歩教室

## 本社4月句会

と き 4月6日(金) 13時開場・14時締切  
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。  
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛  
おはなし 「江戸川柳で愉しむ孔子」  
兼題 「箱」  
「ぶらぶら」  
「崩れる」  
「割り勘」  
「向き合う」  
西出楓楽  
柿花和夫  
小林わか  
岩佐ダン吉  
嶋澤喜八郎  
村上玄也  
小島蘭幸  
会費 1000円  
投句料 500円 (各題2句以内) (切手可)

## 本社5月句会

7日(金) 午後1時から  
兼題 「脇」「ドラマ」「奇跡」  
「内」「幕」「惚れる」

## 第30年度 夜市川柳募集

第11回「強がり」 高田美代子 選  
ハガキに3句 4月末日締切  
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 川柳塔さかい

## 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八千円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇二二年(平成三十四年)四月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

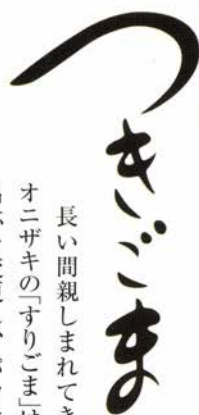
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七九三九四〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

# 杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた  
オニザキの「すりごま」は、  
名称を変更し、パッケージ  
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、  
元々すり鉢ですったゴマ  
ではなく、杵と臼を使った  
杵つき製法で出来た「すり  
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味  
豊かな味わいをご堪能く  
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ  
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

ご宿泊 10,500 円～

ご宴会 15名以上からの受付

※送迎可、片道1時間迄送迎範囲あります。

## 『春夏秋冬溢れる自然 吟行句会に最適』

牛滝温泉  
いよやかの郷

ご予約・お問い合わせ

TEL 072-479-2641

〒596-0114 大阪府岸和田市大沢町1156

<http://www.iyoyaka.jp/>

いよやか

検索

■(出)(旧)のご利用は混み合いますのでお申込みは早い目に。